

オニキシベ6遺跡

—厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10—

2014.3

厚真町教育委員会



1. オニキシベ6遺跡遠景 E→



2. I-30区縄文時代後期遺物出土状態 S→

カラー2



1. A地区北西壁土層断面 SE→



2. VBB-01検出状態 S→

序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園の町であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、豊穣なる農作物の恵み授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と豊かな“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるため、農業用水確保と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が平成7年度に本格着工されました。

さて、本書はこの厚幌ダム建設に先駆け、沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として、平成24年度に発掘調査したオニキシペ6遺跡の調査報告書であります。本遺跡からは、約3,000年前の縄文時代の堂林式系土器が厚真町では初めてまとまって出土し、本州以南に生息・分布するイノシシの焼けた骨や炭化したクリの木の実なども町内で初めて見つかっております。これらの調査成果から、この時代の人たちがどのような場所に遺跡を残し、他の地域と交流をしてきたのかを考える上でも貴重な資料と思われます。

今後は、これらの貴重な埋蔵文化財を地域の教育的資源、文化的財産として広く普及、活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに関係機関に、真に厚く、感謝申し上げる次第であります。

平成26年3月

厚真町教育委員会
教育長 兵頭 利彦

例 言

1. 本書は、平成 24 年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査されたオニキシペ 6 遺跡（登載番号：J-13-118）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部の委託を厚真町教育委員会が受託した。

3. 調査・整理（分担）は以下の体制で行った。

調査担当者：奈良智法・乾 哲也 調査員：岩橋由久 調査補助員：服部一雄 事務員：鈴木直樹・今村陽子

測量技能作業員：海津孝之・大山眞由美 整備技能作業員：日野 修・畠島雄樹 写図工：海津孝之

発掘作業員 27 名 整理作業員 11 名

調査協力：荻野幸男・宮崎美奈子・松井 昭（厚真町教育委員会嘱託職員）

天方博章（羅臼町教育委員会）

宮塚 判（宮塚文化財研究所）

4. 本書の編集は服部・奈良・乾の協力を得て岩橋が行った。各節の執筆は文末に記す。

5. 関連諸科学については、以下の機関および個人に依頼した。

AMS 法 ^{14}C 年代測定：株式会社 加速器分析研究所

黒曜石原産地分析：株式会社 第四紀地質研究所

動物遺存体同定：千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理

炭化種子同定：Project Seeds 考古植物研究会 樋坂恭代

6. 出土遺物の写真撮影：有限会社 写真事務所クリーク 佐藤雅彦

7. 復元土器実測の一部、剥片石器実測は株式会社 トラスト技研、礫石器の実測用写真撮影は、株式会社 シン技術コンサル、石材同定の一部を株式会社 アースサイエンス 加藤孝幸に委託した。

8. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会で保管している。

9. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂いた、記して感謝申し上げます。

北海道教育厅生涯学習推進局文化財・博物館課、北海道胆振総合振興局、北海道室蘭建設管理部 厚幌ダム建設事務所、公益財团法人北海道埋蔵文化財センター、苫小牧市美術博物館、千歳市埋蔵文化財センター、日高町教育委員会、新ひだか町教育委員会、乙部町教育委員会、厚真町幌内自治会、(有)金野技建工業

愛場和人、赤石慎三、阿部明義、新家水奈、右代啓視、大沼忠春、小笠原学、長田佳宏、小野寺聰、川内谷修、工藤研治、越田賢一郎、越田雅司、齊藤大朋、齊藤 傑、佐藤一夫、佐藤 剛、澤田 健、鈴木琢也、瀬川拓郎、高橋和樹、田才雅彦、田中哲朗、種市幸生、千葉英一、土肥研晶、富永勝也、友田哲弘、中田裕香、中山昭大、長沼孝、長町章弘、西脇対名夫、畑 宏明、広田良成、福井淳一、藤田 巧、藤原秀樹、三浦正人、蓑島栄紀、宮塚義人、宗像公司、村田 大、森岡健治、斎中剛司、吉田裕史洋、渡井 曜

凡 例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、Tピット以外の遺物略号には層位名を付加している。

【遺構】 Tピット : TP 土坑 : P 桁穴 : KP

【遺物】 土器 : P 擦文土器 : SP 縄繩文土器 : ZP 縄文土器 : JP 土製品 : PP 刺片石器 : FT

種石器 : ST ルイ・チップ : FC 磨 : S 石製品 : SP 骨角器 : BP

【遺物等集中】 土器片集中 : PB 磨集中 : SB 骨骨集中 : BB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

【堆積土】 樽前a 砂質降下火山灰 : Ta-a 樽前b 降下軽石 : Ta-b 白頭山苦小牧火山灰 : B-Tm

樽前c 砂質降下軽石 : Ta-c 粘土質黄褐色シルト(いわゆるローム) : L 搅乱 : KR

【色調】 小山・竹原編著(1994)『新版 標準土色帳』に従った。

【注記】 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については()内に粒径(単位:mm)、状態を記載した。

A+B : AとBが同量比混じる A-B : Aを主体にBが多量に混じる

A=B : Aを主体にBが少量 A≡B : Aを主体にBが微量

φ : 粒径(単位:mm) ↓ : 以下 (状態) : 斑状に混じる・均一に混じる

【層位】 標準堆積層はローマ数字を用い、連構覆土や風倒木搅乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また各層の上・中・下位について下記の略号を用いている。

U : 上位 M : 中位 L : 下位

3. 掘図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

基本土層 : 1/50 Tピット及び土坑 : 1/40 集中遺物出土状況 : 1/10, 1/20, 1/40

土器実測図 : 1/3 土器拓影図 : 1/3 刺片石器実測図 : 1/2 磨石器実測図 : 1/3, 1/4

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

【線種】 - - - : オーバーハング - - - - : トレンチ - - - - - : 搅乱・トレンチによる遺構推定

【堆積図】 堆積図に下記トーンを用いている。

□ : I層 □ : II層 □ : III層 □ : IV層 □ : V層 □ : VI層

■ : 粘土層 ■ : シルト層 ■ : 砂質シルト層 ■ : 粘土質シルト層

□ : 砂層 ■ : 砕層 ■ : 砂礫層 ■ : 黒色帶

5. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

【断面】 V——V : たたき痕 | ——— | : 刺片石器 微細剥離 / 磨石器 擦り痕 / 清沢面

【平面】 ■ : 清沢面範囲 ■ : 被熱による赤色化 / 付着物範囲

6. 一覧表中の材質については、服部・乾が肉眼観察で分類し、下記の略号を用いた。緑泥片岩は緑色泥岩に含めている。また、頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、破断面等の肉眼観察によるものである。

Aga. : メノウ And. : 安山岩 Gr-Mud. : 緑色泥岩 Obs. : 黒曜石 Qu. : 石英 Sa. : 砂岩

Ser. : 蛇紋岩 Sh. : 頁岩 B. : 骨

本文目次

カラー図版

- 1-1 オニキシベ6遺跡遠景
- 1-2 I-30区縄文時代後期遺物出土状態
- 2-1 A地区北西壁土層断面
- 2-2 VBB-01検出状態

序文

例言

凡例

第I章 調査の概要

第1節 調査要項と体制	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
第2節 調査に至る経緯	1
1. 厚幌ダム建設事業	1
2. 発掘調査までの経緯	2
第3節 調査の方法	4
1. 調査区の設定	4
2. 準備工	6
3. 包含層および遺構調査の方法	7
4. 整理作業	7
第4節 遺物の分類	7
1. 土器	7
2. 刺片石器	9
3. 磨石器	10
第5節 調査結果の概要	11
第6節 遺跡の位置と周辺の環境	12
1. 厚真町の概要	12
2. 遺跡の位置と周辺の環境	19
3. 調査区内の地形と地質	23

第II章 摺文・統縄文文化期の調査

第1節 包含層出土遺物	32
-------------	----

第III章 縄文時代の調査

第1節 Tピット	37
第2節 土坑	42
第3節 集中遺物	44
1. 土器集中	44
2. 磨集中	48
3. 烧骨片集中	51
第4節 包含層出土遺物	56
1. 土器・土製品	56
2. 刺片石器	67
3. 磨石器・石製品	71
4. 骨製品	78

第IV章 自然科学的分析

第1節 オニキシベ6遺跡における放射性炭素年代	87
第2節 黒曜石原産地分析	90
第3節 北海道勇払郡厚真町オニキシベ6遺跡の動物	94
第4節 オニキシベ6遺跡出土の植物種子について	96

引用・参考文献	100
---------	-----

報告書抄録

奥付

挿図目次

第I章

図I-1 厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財 包藏地位置図	3
図I-2 グリッド配置図	5
図I-3 グリッド区分図	6

図I-4 厚真町内遺跡分布図	14
図I-5 遺跡周辺の地形図	20
図I-6 厚真川上流域と鶴川中流域の古地形図	22
図I-7 発掘調査区内の地形図	24
図I-8 地形面区分及びIV群土器分布図	26

図 I-9	基本土層柱状図	28	図 III-13	縄文時代包含層出土土器(1)	57
図 I-10	包含層土層断面図	29	図 III-14	縄文時代包含層出土土器(2)	58
			図 III-15	縄文時代包含層出土土器(3)	60
			図 III-16	縄文時代土器接合関係図	65
第Ⅱ章			図 III-17	縄文時代包含層出土剥片石器(1)	68
図 II-1	統縄文・掠文化期包含層出土遺物	33	図 III-18	縄文時代包含層出土剥片石器(2)	69
図 II-2	統縄文・掠文化期土器接合関係図	34	図 III-19	縄文時代包含層出土礫石器(1)	72
			図 III-20	縄文時代包含層出土礫石器(2)	73
第Ⅲ章			図 III-21	縄文時代包含層出土礫石器(3)	74
図 III-1	縄文時代遺構配置図	36	図 III-22	縄文時代包含層出土礫石器(4)	75
図 III-2	TP-01~04 平面及び断面図	40	図 III-23	縄文時代包含層出土礫石器(5)	76
図 III-3	TP-05~07 平面及び断面図	41	図 III-24	縄文時代包含層出土礫石器(6)	
図 III-4	TP-05・06 出土遺物	42		石製品及び骨製品	77
図 III-5	VP-02~04 平面及び断面図・出土遺物	43	図 III-25	土器数量分布図(1)	80
図 III-6	VPB-01~04 平面図	45	図 III-26	土器数量分布図(2)	81
図 III-7	VPB 出土遺物	46	図 III-27	土器数量分布図(3)	82
図 III-8	VSB-01~03 平面及び断面図	49	図 III-28	土器数量分布図(4)	83
図 III-9	VSB 出土遺物	50	図 III-29	土器数量分布図(5)	
図 III-10	VBB-01・02 平面及び断面図	52		石器数量分布図(1)	84
図 III-11	VBB-03 平面図	53	図 III-30	石器数量分布図(2)	85
図 III-12	VBB 出土遺物	54	図 III-31	石器数量分布図(3)・重量分布図	86

表 目 次

第Ⅰ章

表 I-1	グリッド設定基準杭座標値一覧表	6	表 III-4	TP-05・06 出土土器属性表	42
表 I-2	オニキシ×6 遺跡検出遺構一覧表	11	表 III-5	TP-06 出土石器属性表	42
表 I-3	オニキシ×6 遺跡出土遺物一覧表	11	表 III-6	縄文時代土坑属性表	42
表 I-4	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)	15	表 III-7	VP-03・04 出土土器属性表	43
表 I-5	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)	16	表 III-8	VPB 出土土器属性表	47
			表 III-9	VSB 出土土器属性表	51
			表 III-10	VBB 出土土器属性表	55
			表 III-11	VBB 出土石器属性表	55

第Ⅱ章

表 II-1	III層地区別検出遺物一覧表	31	表 III-12	縄文時代包含層出土土器属性表(1)	62
表 II-2	統縄文化期包含層出土土器属性表	33	表 III-13	縄文時代包含層出土土器属性表(2)	63
表 II-3	掠文化期包含層出土土器属性表	33	表 III-14	縄文時代包含層出土土器属性表(3)	64
表 II-4	統縄文化期包含層出土剥片石器属性表	33	表 III-15	縄文時代包含層出土剥片石器属性表	70
			表 III-16	縄文時代包含層出土礫石器属性表	79
			表 III-17	縄文時代包含層出土石製品属性表	79
			表 III-18	縄文時代包含層出土骨製品属性表	79

第Ⅲ章

表 III-1	V 層地区別検出遺構・遺物一覧表	35			
表 III-2	T ピット計測一覧表	38			
表 III-3	T ピット逆茂木跡属性表	38			

写 真 目 次

図版 1-1	遺跡遠景	103	図版 5-4	VFB-04 出土状態	107
図版 1-2	A 地区 V 層調査前状態	103	図版 5-5	VSB-01 出土状態	107
図版 1-3	B 地区調査前状態	103	図版 5-6	VSB-01 断面	107
図版 1-4	A 地区完掘状態	103	図版 5-7	VSB-02 出土状態	107
図版 1-5	B 地区完掘状態	103	図版 5-8	VSB-03 出土状態	107
図版 2-1	A 地区北西壁土層断面	104	図版 6-1	VBB-01 検出	108
図版 2-2	J-28 区 旧河道土層断面	104	図版 6-2	VBB-01 断面	108
図版 2-3	I-28 区 高位部土層断面	104	図版 6-3	VBB-02 断面	108
図版 2-4	B 地区土層断面	104	図版 6-4	VBB-02 遺物出土状態	108
図版 2-5	B 地区基礎層断面	104	図版 6-5	VBB-02 完掘	108
図版 3-1	TP-01 完掘	105	図版 6-6	VBB-02 周辺遺物出土状態	108
図版 3-2	TP-01 断面	105	図版 7-1	VBB-03 出土状態	109
図版 3-3	TP-02 完掘	105	図版 7-2	VBB-03 烧骨片検出状態	109
図版 3-4	TP-02 断面	105	図版 7-3	G-H-28 区 Va 層遺物出土状態	109
図版 3-5	TP-03 完掘	105	図版 7-4	I-29-30 区 Vb 層上位遺物出土状態	109
図版 3-6	TP-03 断面	105	図版 7-5	G-28 区 滑車形耳飾出土状態	109
図版 3-7	TP-04 完掘	105	図版 7-6	A 地区 西側縦縄文土器出土状態	109
図版 3-8	TP-04 断面	105	図版 7-7	P-6 区 縦縄文土器	109
図版 3-9	TP-05 完掘	105	図版 7-8	B 地区 III 層調査状況	109
図版 3-10	TP-05 断面	105	図版 8-1	縦縄文・縫文化期包含層出土遺物	110
図版 3-11	TP-06 完掘	105	図版 8-2	TP・VP 出土遺物	110
図版 3-12	TP-06 断面	105	図版 8-3	VPB-01・02 出土遺物	110
図版 4-1	TP-07 完掘	106	図版 9-1	VPB-03・04 出土土器	111
図版 4-2	TP-07 断面	106	図版 9-2	VSB 出土石器	111
図版 4-3	A 地区 V 層調査状況	106	図版 10	VBB 出土遺物	112
図版 4-4	VP-02 完掘	106	図版 11	縄文時代包含層出土土器(1)	113
図版 4-5	VP-02 断面	106	図版 12	縄文時代包含層出土土器(2)	114
図版 4-6	VP-03 完掘	106	図版 13	縄文時代包含層出土土器(3)	115
図版 4-7	VP-03 断面	106	図版 14	縄文時代包含層出土剥片石器	116
図版 4-8	VP-04 完掘	106	図版 15	縄文時代包含層出土鍛石器(1)	117
図版 4-9	VP-04 断面	106	図版 16	縄文時代包含層出土鍛石器(2)	118
図版 5-1	VPB-01 出土状態	107	図版 17	縄文時代包含層出土鍛石器(3)	119
図版 5-2	VPB-02 出土状態	107	図版 18	縄文時代包含層出土鍛石器(4), 石製品及び骨製品	120
図版 5-3	VPB-03 出土状態	107			

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査要項と体制

1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業 埋蔵文化財発掘調査 その2

委託者：北海道胆振総合振興局 室蘭建設管理部 受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：オニキシベ6遺跡（J-13-118）

調査面積：1,401 m²

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内 485 ほか

受託期間：平成24年4月9日～平成25年3月26日

発掘期間：平成24年7月23日～平成24年9月21日

整理期間：平成24年11月1日～平成25年3月15日

2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 兵頭利彦

生涯学習課社会教育グループ

参考 佐藤照美（平成24年9月30日まで）・長谷川栄治（平成24年10月1日から） 主幹 上田敦子

学芸員・主任 奈良智法（発掘調査担当者） 学芸員・主査 乾 哲也（発掘調査担当者）

嘱託職員 調査員 岩橋由久 調査補助員 服部一雄 事務員 鈴木直樹・今村陽子

臨時職員 測量技能作業員 海津孝之・大山眞由美

整備技能作業員 日野 修・畠嶋雄樹

写図工 海津孝之

発掘作業員 27名 整理作業員 11名

（乾）

第2節 調査に至る経緯

1. 厚幌ダム建設事業（図I-1）

町内を縦貫する厚真川中下流域には約3,000haもの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和45（1970）年に現河口より38km地点に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和45年には洪水と渇水、昭和48・50・56年にも洪水が発生し、近年においても、平成12年春の融雪期と平成13年秋に、家屋や農地に被害をおよぼす洪水、平成18・22年にも一部がオーバーフローする事態が発生している。また、昭和59・60・63年には深刻な水不足にも見舞われており、平成19年は、幼穂形成期の水不足により深水灌漑が行えなかつたため低温障害を受け、作況指數が極端に低い年でもあった。特に田植え時期における農業用水の確保は農業者にとっては勿論、厚真町民にとっても毎年の关心事であり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水や農業灌漑などを目的とする新たなダム建設が陳情されていた。また、市街地への人口集中の進行による住宅街や苫小牧東港への水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな上水道水源確保が急務となっている。

これらの状況の抜本的な治水等の改善策として、昭和52年に北海道士木現業所により厚幌ダム建

設事業の予備調査が着手されている。その後、昭和61年に「厚真川総合開発事業計画調査」の着手が決まり、平成7(1995)年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が結ばれ、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして、現厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また、同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所が開設され、その後、沿岸漁業団体への説明会や環境アセスメントも実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の農業経営体育成基盤整備事業、農業用水路再編対策事業(厚幌導水路建設)が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工として、平成14年度からの水没地域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、北進平取線としてむかわ町穂別まで延長開通の計画である。厚幌ダム本体(堤体)は、平成20年に建設費節減のため最新工法での設計変更がなされ、堤体長516m、高さ47.2m、台形C S Gダムでオニキシベ6遺跡より直線距離で約400m下流に堤体を建設する計画である。貯水は常時湛水面標高85.4m、最深湛水面標高88.1mであり、総貯水量は47,400千m³、現在の厚真ダムのおおよそ4.7倍の貯水量となり、絶大な効果波及があり早期完成が望まれていた。

しかし道内複数のダム事業との関係からダム堤体着手の予算確保が困難な状況が続き、当初計画の平成24年完成から平成27年秋に試験湛水、28年に春に供用を開始する工期延長となった。その後、平成20年11月に公共事業再評価を受け多目的ダムの必要においてA評価を受け事業継続となっていた。ところが、平成20年7月の政権交代によって全国の公共事業、とりわけダム事業の否定的見直しが進められ、厚幌ダムもその対象となった(苫小牧民報社2009.10.7)。平成23年8月に国土交通省は事業継続を決定し、平成24年度からは完成に向けて埋蔵文化財発掘調査費用も予算が配当され、公益財團法人北海道埋蔵文化財センター(以下、道埋文)も発掘調査に参入している。平成29年4月共用開始に向け、道路切替工事などが急ピッチに進められている。なお、厚幌ダムは国費54%、道費44.6%等のいわゆる「補助ダム」と称されるダムである。

2. 発掘調査までの経緯

A 厚幌ダム建設事業の埋蔵文化財事前調査(図I-1)

厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて、平成12年7月6日に北海道室蘭土木現業所(当時)厚幌ダム建設事務所(以下、ダム事務所)より、ダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書(室土厚幌第158号)が厚真町教育委員会(以下、町教委)を経て北海道教育委員会(以下、道教委)へ提出された。協議区域は最深湛水面標高88.1m以下の区域と道道上幌内早来停車場線(以下、道道)切替路線幅の合計約235,500m²に及ぶ。まず、平成13年6月に道教委による試掘調査が行われ、約8,250m²の「要発掘調査」面積となり、厚幌1遺跡(J-13-25)として新規登載された(平成13年7月18日付 教文第4265号)。これを受け、厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、試掘調査までは道教委が行い、発掘調査は厚幌ダム建設に係わる受益者が厚真町1町であることから、町教委と北海道胆振総合振興局とで委託契約を結び、町教委が行うことになった。翌平成14・15年度の2ヵ年で厚幌1遺跡の発掘調査を行った(町教委2004)。

湛水地域内は平成13年10月に所在確認調査(A調査)が行われ、周知の遺跡(オニキシベ1遺跡、上幌内1遺跡)を含め16カ所、面積235,500m²の要試掘調査の回答がされた(平成13年11月16日付 教文第4532号)。以後、追加箇所や範囲拡張も含め平成19年度までに8回、18地点の試掘調査が実施され、14遺跡、約143,000m²の要発掘・要遺構確認調査地点が確認されていた。

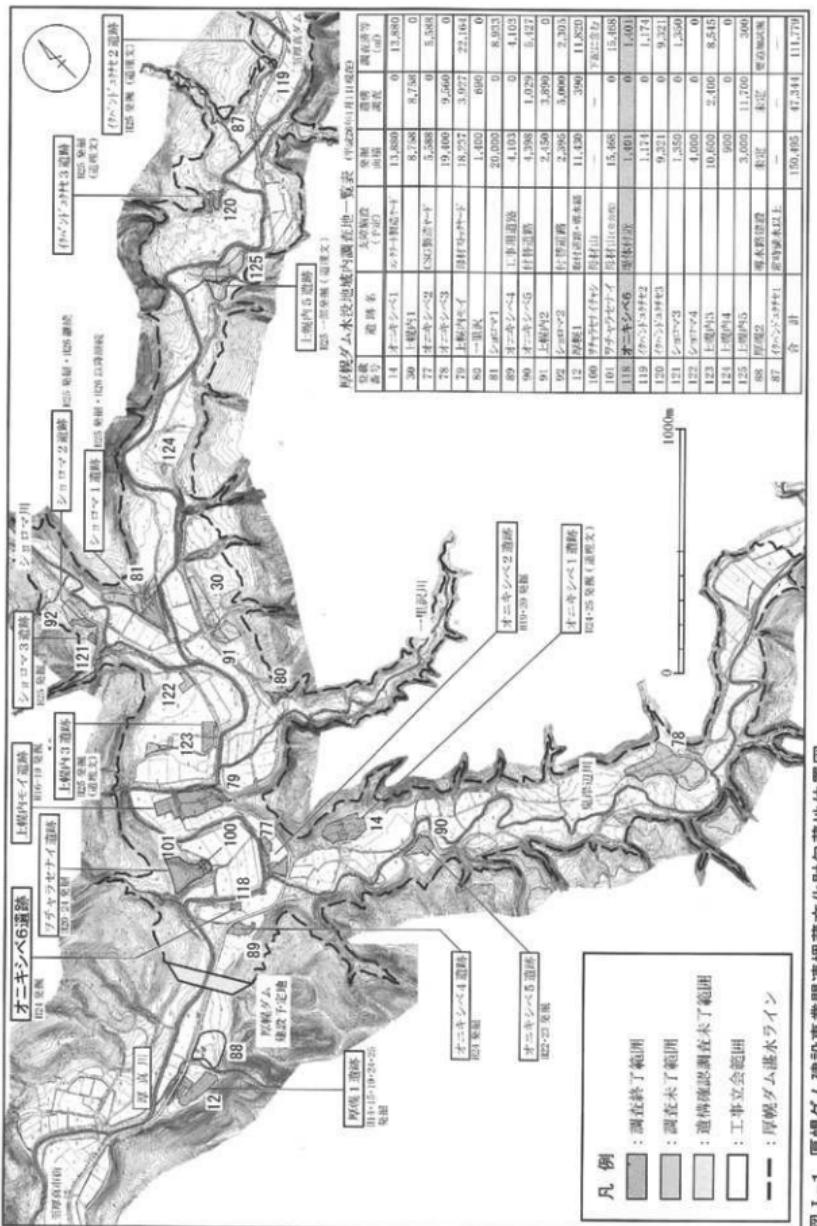


圖 1-1 厚晚夕公建設事業圖

10

調查統了範用

調查未了範例

卷之三

厚幌ダム湛水ライン

しかし、これまでの発掘調査成果から河岸段丘の低位面にも埋蔵文化財包蔵地が広がること等、この地区における遺跡の立地パターンが判明してきており、建設工事中の発見を避けるため新たな視点での再試掘調査の必要性が生じていた。これを受け道教委は平成21年5月に湛水地域内の所在確認踏査を行い、要試掘調査地点10ヵ所を回答した（平成21年6月11日付 教文ス第928号）。これらの試掘調査は平成22年11月を最後に一連の所在・範囲確認調査は終了した。既に発掘調査が終了した面積と遺構確認調査面積を含め、平成24年1月現在の要発掘調査地点は21ヵ所に及び要発掘面積143,901m²、要遺構確認調査面積は42,604m²が追加された。平成26年1月1日現在までの発掘調査終了面積111,780m²を含めると合計約197,840m²である。（図I-1）

なお、本事業はダム常時満水以下の範囲内にある埋蔵文化財包蔵地の全域が対象となり、面的な発掘調査によって包蔵地範囲が広がる場合もある。この場合は調査面積の拡張も道教委やダム事務所と協議し、随時拡張している。これまででも上幌内モイ遺跡やオニキシベ2遺跡等において範囲拡張があり、道教委に限らず町教委でも部分的に試掘調査を実施しているが、重機によるトレーナー掘削での範囲確定、内容確認の難しさを感じる。

B オニキシベ6遺跡の発見経緯と調査範囲

オニキシベ6遺跡は、平成13年10月のダム事業所在確認調査においては、要試掘調査対象外であった。平成21年5月に常時満水88.1m以下の水没地域内において道教委が実施した所在確認調査で「追加8」として厚真川本流に面する5,000m²の要試掘調査の回答を得ている（平成21年6月11日付 教文ス第928号）。試掘調査は平成21年7月に道教委によって実施された。標高約56mの自然堤防状地形である西部地区と、標高約57mの独立丘状地形の2地区に分かれ下層黒色土V層より遺物が出土し、西部のA地区1,300m²（発掘調査）と東部B地区200m²（遺構確認）の合計1,500m²要発掘調査の回答を得ている。出土遺物はA地区で下層黒色土から縄文時代後期末葉の堂林式土器が多量に出土した。B地区は搅乱層中より礫が出土し、堆積状態等から近現代の盛り土による独立丘状の地形と判断され、遺物回収を目的とする遺構確認調査の回答となった。なお、B地区は表土除去時点で、樽前bテフラより下層が残存している自然地形と判断し、通常の発掘調査に切り替えている。また、調査区壁面精査中に上層黒色土III層より統縄文文化期前葉の土器が出土し、約36m²（3m×12m）の範囲で上層黒色土のみの範囲拡張変更を行っている。

上記の試掘調査で新たに発見された埋蔵文化財包蔵地であり、平成22年1月にオニキシベ6遺跡（J-13-118）として道教委の埋蔵文化財包蔵地調査カードに新規登載された（平成22年1月29日付 教文ス第3349号）。

(乾)

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査区のグリッド網は近接するオニキシベ4遺跡と合わせ公共座標（世界測地系 平成15年十勝沖地震対応）を用い、遺物包含層の堆積が想定される段丘面のほぼ全面を含む200m×250mで設定し、5m四方のメッシュで区分した。グリッド網の起点（A-0 区 : X=-137240.000 Y=-206.000）は北東コーナーで南北のX軸をA-B-C…のアルファベット列で、東西のY軸ラインを1・2・3…のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北東コーナーの杭としA-1区、A-2区…とした。

現地での杭打設は、道教委回答文書添付図面より作成した調査区範囲の境界杭とグリッド設定の

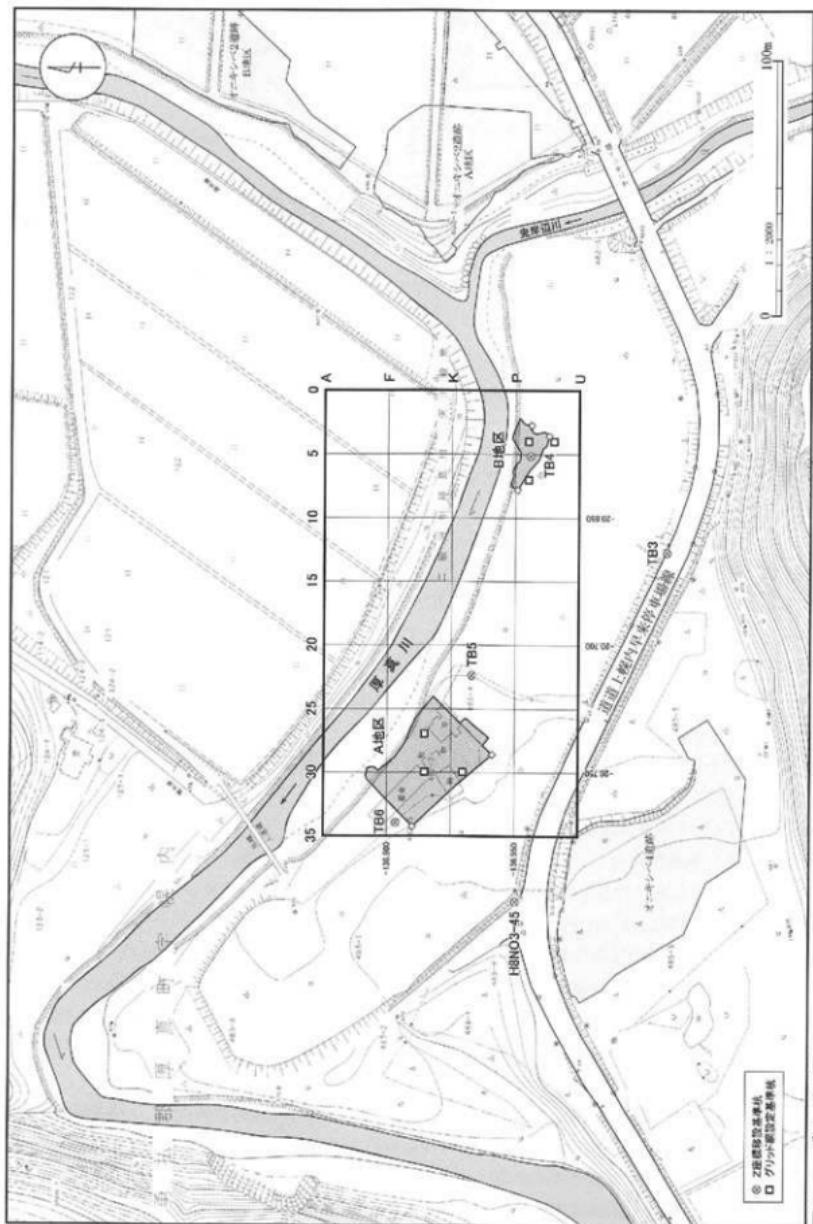
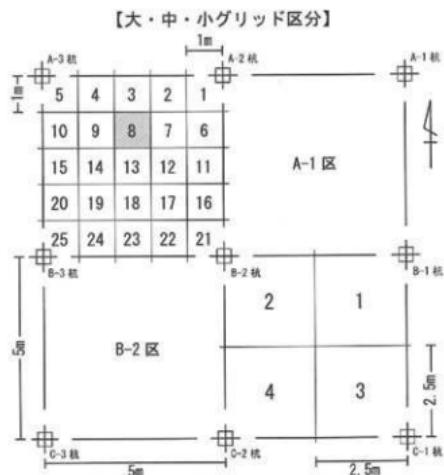


図 I-2 グリッド配置図

◎ Zn監視井基準点
□ グリッド配置点基準点



グリッド記載例

A - 2 - 8
大グリッド 中・小

*1 本書の遺跡・遺物一覧表は原則、大グリッドを表記している。

*2 中グリッドはV層出土のフレイク・チップと種の取り上げの際に用いた。

*3 小グリッドは報告書作成にあたり、遺跡位置を示すために図中のみに用いた。

表 I-1 グリッド設定基準杭座標値一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標
H8N03-45 (3級基準点)	-136,950.471	-20,800.639	56.199
TB3	-137,009.635	-20,663.532	56.373
TB4	-136,955.812	-20,625.714	56.699
TB5	-136,933.012	-20,711.863	54.959
TB6	-136,903.466	-20,769.781	55.725

図 I-3 グリッド区分図

基準となるグリッド杭を(有)幅田測量に委託した。オニキシベ6遺跡では調査区境界杭をA地区で2点、B地区で3点を打設し、調査区内外にグリッド基準杭各3点を打設した。これらを元に表土・火山灰除去範囲と調査区内のグリッド設定を行っている。グリッド杭は調査補助員と測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて調査区全面のグリッド杭を設置した(図I-2)。

絶対高は、(有)幅田測量によって、グリッド杭設定の他、調査区内外の仮設杭へ移行すると共に各グリッド杭へ移設した。絶対高算出の基準杭は他の遺跡と同一杭を用い、本遺跡調査区を北に約20mの位置にある「3級基準杭 厚幌ダムH8 BMN03-45 北海道室蘭土木現業所」である。

2.準備工

A地区は平成16年まで民家や畜舎があった場所で、平成15年に移転補償のため建物基礎も含めて解体撤去され荒蕪地となっていた。解体撤去当時、埋蔵文化財・古墳として周知化されていなかったことから、立会等は行っていない。B地区は周囲が水田跡地であり平成14年度以降の作付を行っておらず、約10年に及ぶ休耕田化によって直径5cm前後のヤナギが密生していた。6月に休耕田に密生していたヤナギの伐採作業を実施し、表土・火山灰除去は調査員及び作業員が立会し、合わせてジョレンやスコップでⅢ層上面の精査や搅乱層の除去作業を行った。なお火山灰除去において調査区内に存在する切株は、遺物包含層の保全のため抜根作業は行っていない。また発生材売り扱いについては町教委で報告書を作成し、ダム事務所へ提出している。同時に発生した枝葉等については町教委が廃棄物処理委託業務を発注し、検収作業等も実施している。

この他、現場事務所や作業員休憩棟のプレハブ等はオニキシベ4遺跡と共に、短期間の発掘調査への関連諸経費の節減に努め、小型機材庫1棟と仮設トイレ2台のみの配置とした。なお、猛暑日での発掘現場における小休止には大型テントを用い、緊急等の連絡については小型無線機を利用し、オニキシベ4遺跡発掘現場事務所への電話等による外部からの連絡に対応した。(乾)

3. 包含層および遺構の調査方法

遺構は焼土や焼骨片集中等は、堆積状態を把握するため先行トレンチ掘開し、実測撮影面とした。また燃焼面や形成面のほぼ全量をフローテーションサンプルとして採取し、土壤サンプル量は合計128.30tに及ぶ。処理は同事業のヲチャラセナイ遺跡に運搬し、ビニールハウス内で乾燥、計量を行った後、フローテーションマシンを用いて調査期間中に処理を行った。記録図化については光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、測量技能作業員が堆積図作成の実測を行った。各調査経過は35mm一眼レフカメラでデジタル画像とモノクロで写真記録撮影を行った。

遺物の取り上げについては調査員による層位確認と段丘堆積物中の自然礫とを認定区分したうえで、光波式トータルステーションによるXYZ座標（公共座標世界測地系）をデジタル記録している。この時、手簿（日付・グリッド・層位・遺物名等）の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。なお、調査終了後の現地については、Tピットなどの深い遺構のみ埋め戻し作業、伐採用地内にある池などの危険個所への安全ロープ設置を行ったが、他はそのままの裸地状態で発掘調査を終了している。
(乾)

4. 整理作業

一次整理は、乾が担当し、5名の整理作業員が発掘調査開始と共に町内南部地区の軽舞整理事務所（旧軽舞小学校）にて出土遺物の水洗、注記作業等を行った。出土遺物の台帳照合と分類作業も本事務所にて行い、V層出土遺物の分類作業等を行っている。この際、出土状態等が曖昧なものについては、現地調査担当の岩橋や服部に確認をとりながら進めた。11月の整理業務に入ってからは、各担当の調査員が遺物の調査区遺構名や層位、種別、細分類、分類等の台帳確認作業を行った。また並行して、フローテーション処理後の選別作業も行っている。

二次整理は、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行い、復元土器の一部や剥片石器の実測は（株）トラスト技研へ委託した。また礫石器実測用写真撮影を（株）シン技術コンサルへ委託し、報告書掲載用の出土遺物の撮影は（有）写真事務所クリークに委託した。実測遺構図等の第2原図の作成やトレース作業・編集は、パソコン（Os Windows Adobe IllustratorCS5）で行った。写真データはOs Windows Adobe Photoshop CSで切り抜きやレイアウトを行っている。報告書掲載図や写真図版などの版組み、一覧表の編集も上記のソフトで行い、本文のWord文書と合わせて印刷所へデジタル入稿した。遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは、分類及び調査区毎にコンテナに収納し軽舞整理事務所（旧軽舞小学校）に収蔵している。
(乾)

第4節 遺物の分類

1. 土 器

縄文時代早期から掠文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで型式、時期等の細分をした。

第I群土器 縄文時代早期に属する土器。

文、組紐圧痕などを施すもの。

A類 貝殻文・条痕文土器。

B1類 東鉄路Ⅱ式に相当するもの。

B類 早期後半の東鉄路式土器群。絡条体圧痕

B2類 東鉄路Ⅲ式、コッタロ式に相当するもの。

B3 類 中茶路式に相当するもの。

B4 類 東剣路IV式に相当するもの。

第II群土器 繩文時代前期に属する土器。

A 類 繩文丸底・尖底土器群。

A1 類 美沢3式、網文式土器に相当するもの。

A2 類 トビノ式、静内中野式に相当するもの。

B 類 円筒下層式系土器群。

B1 類 円筒下層a式ないしはb式、虎杖浜2遺跡
2群土器(白老町教育委員会 1978)に相当するもの。

B2 類 円筒下層c式ないしはd式、植苗式、大麻
V式に相当するもの。

第III群土器 繩文時代中期に属する土器。

A 類 中期前半の円筒上層式系土器群。

今回の調査では出土していない。

B 類 中期後半から末葉の土器群。

B1 類 萩ヶ岡1・2式、天神山式に相当するもの。

B2 類 柏木川式に相当するもの。

B3 類 a 北筒式に相当するもの。

B3 類 b 煉瓦台式に相当するもの。

第IV群土器 繩文時代後期に属する土器。

A 類 後期初頭の土器群。

A1 類 a 古手の余市式土器。円形刺突文の有無
に関わらず、貼付帯や地文繩文が多段
の羽状構成の土器。

A1 類 b 天祐寺式に相当するもの。IV群A1 類 a
土器に併存する。非在地系。

A1 類 c IV群A1 類 a 土器に併存する沈線文系の
土器。非在地系。

A1 類 d 北筒III式に相当するもの。肥厚帯が頗著
で円形刺突文を有する土器。

A2 類 新しい段階の余市式。古手のタブコブ式。
階段状の器表面や斜め下方からの刺突文
や錐端圧痕文が施される土器。

B 類 後期前葉の土器群。

B1 類 新手のタブコブ式。縦位の棒状貼付帶繩線
文、地文繩文のみが施されているもの。

B2 類 手稲砂山式に相当するもの。

B3 類 入江式、大津7群、白坂3式土器。

C 類 後期中葉の土器群。

C1 類 ウサクマイC式に相当するもの。

C2 類 手稲式に相当するもの。

C3 類 縦渦式に相当するもの。

D 類 後期後葉の土器群。

D1 類 堂林式、御殿山式に相当するもの。

第V群 繩文時代晚期に属する土器群。

A 類 晩期前葉の土器群。

A1 類 爪形文や刺突文を施すもの。

A2 類 大洞B・BC式土器に相当するもの。

B 類 晩期中葉の土器群。

B1 類 繩線文や円弧文を施すもの。美々3式、ママ
チI・II群に相当するもの。

B2 類 大洞C1・C2式土器に相当するもの。

C 類 晩期後葉の土器群。

C1 類 ママチIII・IV・V群に相当するもの。

C2 類 大洞A・A'式土器に相当するもの。

第VI群土器 縦繩文文化期に属する土器群。

A 類 初頭から前葉にかけて土器群。

A1 類 札幌市H37遺跡 丘珠空港地点相当のもの。

A2 類 いわゆる沙見式相当。縦線文が施され、地
文に帶繩文発達以前の土器。

A3 類 砂沢式・二枚様式に並存する撮入系土器。
a : 砂沢式土器。 b : 二枚様式土器。

B 類 恵山式土器群。

B1 類 アヨロ2類土器並行の土器。

a : アヨロ2類a相当の土器。

b : アヨロ2類b相当の土器。

B2 類 アヨロ3類相当の土器。

C 類 後北式土器群。

C1 類 江別太1~3式土器。

C2 類 後北B式土器。

C3 類 後北C₁式土器。

C4 類 後北C₂-D式土器。

D 類 後北式に並行する弥生系土器群。

E 類 宇津内・下田ノ沢式土器群。

E1 類 宇津内IIa式・下田の沢I式土器。

E2類 宇津内IIb式・下田の沢II式土器。

F類 北大式土器群

F1類 北大I式土器。

F2類 北大II式土器。

第VII群土器 横文文化期に属する土器群。

A類 北大III式相当

B類 瓢形

B1：横文「前期」に相当するもの

主として胴部上半に横走沈線のみを施す一群

B1a：軽い段により頸部を形成した無文もしくは数条の横走沈線を廻らすもの

B1b：多条の横走沈線を施すもののもの

B2：横文「中期」に相当するもの

主として口縁部文様帯が未形成もしくは単調な刻みのみの一群

B2a：横走沈線を地文とし、刻文を重ねるもの

B2b：刻文のみのもの

B2c：無文のもの

B3：横文「後期」に相当するもの

主として口縁部文様帯を形成した一群

B3a：横走沈線を地文とするもの

B3b：綾杉文主体のもの

B3c：斜位、あるいは縦位の沈線で網目状文、「X」

字状文等を施すもの

B3d：胴部文様帯を3段以上に区画した上でVII

B3a～cの文様要素を施したもの

B3e：無文のもの

B3f：口縁部文様帯に数条の沈線を廻らせたもの

C類坏形

C1：台部を有さないもの

C2：平底の低い台部を有するもの

C3：平底の高台部を有するもの

C4：上げ底の高台部を有するもの

C4a：口縁部に沈線を有するもの

C4b：体部に刻文を施すもの

(乾)

2. 剥片石器

ポイント類

長軸4cmを境に石鏃と石槍・石鉈とを区分した。

A「石鏃」

1細身で薄手のもの。

2無茎のもの。

3明瞭な茎部をもつもの。

4不明瞭な茎部を持つもの。

5片岩型で周縁のみに調整加工を施すもの。統
縄文時代に特徴的なもの。

B「石槍」・「石鉈」

1明瞭な茎部をもつもの。

2茎部端が平ら。b茎部端が尖る。c抉りがある。

3不明瞭な茎部をもつもの。

a茎部端が平ら。b茎部端が尖る。c抉りがある。

C欠損品・未製品

石錐

A 剥片の一部に機能部を作出したもの。

B 柄と機能部の区別が明瞭なもの。

C 柄と機能部の区別が不明瞭で幅広なもの。

D 柄と機能部の区別が不明瞭で棒状のもの。

E 他石器からの転用品と思われるもの。

ナイフ・スクレイパー類

縁辺に刃部が作出されたもののうち、素材の1辺
に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

A「つまみ付きナイフ」

1素材の周縁にのみ加工を施したもの。

2素材の片面全体に加工を施したもの。

3素材の両面全体に加工を施したもの。

B 素材端部に刃部が形成されているもの。

1「ラウンド・スクレイパー」

2「エンド・スクレイパー」

C 素材端部に刃部が形成されていないもの。

1「サイド・スクレイパー」

a原石・転石面無。 b原石・転石面有。

2「コンケイブ・スクレイパー」

a原石・転石面無。 b原石・転石面有。

3 「挿入石器」

D 純縄文時代に伴う「ナイフ状石器」

E 欠損品

a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

RF・UF

縁辺部に刃部が作出されたもののうち、素材の

1 辺に対し半分未満の連続的剥離のあるものをRF、使用によると思われる微細剥離のあるものをUFとして扱っている。

ビエス・エスキーユ

石核

(服部)

3. 磨石器

石斧

A 磨製石斧

B 未製品1:

剥離・敲打により完成品に近い大きさまで整形されているもの。

C 未製品2:

礫皮を残すが、擦り切り・剥離・敲打調整により素材礫形状が不明瞭なもの。

D 未製品3:

剥離・敲打調整が部分的に施され、素材礫の形状を大きく残すもの。

たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で細分類を行った。

I 平面形が縱長のもの。

A 扁平のもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁棱あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2を並存するもの。

B 棒状または角柱状のもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁棱あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2が並存するもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A 扁平のもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁棱あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2を並存するもの。

B 厚さがあるもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁棱あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2が並存するもの。

III 平面形が円～橢円形のもの。

A 扁平のもの。

B 球形または棒状のもの。

IV 破片のため上記に分類不可のもの。

V 磕片を素材としているもの。

すり石

A 断面三角形の様の後に擦り面のあるもの。

B 断面橢円形の様の側縁に擦り面のあるもの。

C 扁平様の側縁にすり面があるもの。

D 北海道式石冠

E その他

砥石

滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。

線条痕はほとんど観察できない。

線条痕のある礫

肉眼観察において、明瞭な線条痕があるもの。

石重・台石

便宜的に素材礫の重量が900g以上で、素材礫の平坦面に擦り面・敲打痕があるもの。

滑沢面と敲打痕のある大型礫

I 表裏面にそれぞれが単独で認められるもの。

II 一面に両方の痕跡が認められるもの。

III 素材礫の形状が変形する研磨面を有するもの。

加工痕のある種

加工目的の剥離があるので、剥離加圧（打点）部分に潰打面が形成されず側面観が後線状となるもの。

自然縫

加工痕や明瞭な使用痕が認められないもの。

I 平面形が縱長のもの。

A：扁平のもの。

B：棒状または角柱状のもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A：扁平のもの。

B：棒状または角柱状のもの。

III 平面形が円～梢円形のもの。

A：扁平のもの。

B：球形または棒状のもの。

（服部）

第5節 調査結果の概要

本遺跡は厚真川に隣接した標高 54.0m～56.4m の自然堤防上の A 地区と 80m ほど東に位置する標高 54.5m～56.5m の独立丘状の B 地区とに立地している。厚真川との比高差は約 3m である。地形的特徴から約 80m の距離をおいて A 地区 (1,201 m²) と B 地区 (200 m²) に分かれ、検出遺構数、出土遺物点数ともに主体は A 地区である。しかし、本遺跡には近年まで民家があり、遺跡として好条件となる自然堤防地形のもっとも標高が高い部分が削平されていた。このため、遺物包含層の多くは遺失しており、本来の遺跡の一部を調査したに過ぎない。

発掘調査の結果、縄文時代早期後葉から擦文文化期に至るまでの出土遺物が確認されている。このうち縄文時代後期末葉の堂林式系土器群が当遺跡の主体的な時期で、約 17,170 点の出土土器のうち約 16,360 点の約 95% を占めている。平成 14 年度より継続している厚幌ダム関連の発掘調査では、この時期がまとまって出土した調査例としては初例である。

この時期の検出遺構は土器集中 2 カ所、疎集中 1 カ所、焼骨片集中 3 カ所に留まる。遺物は調査区の中央部付近から南部への緩斜面に土器片を主体に集中的に出土し、この時期に特徴的な土製の滑車形耳飾も 2 点ほど出土している。石器では黒曜石製の有茎石鏃やナイフ・スクレイバー類が多く出土し、肉眼観察からの石材产地は、不純物の流紋岩が層状に混じる赤井川産黒曜石が主体であ

表 I-2 オニキシベ6遺跡検出遺構一覧

	A地区	B地区	合計	備考
調査面積	1,201 m ²	200 m ²	1,401 m ²	
Tピット	5	2	7	
土 坑	2	1	3	
土器集中	4	0	4	縄文時代中期後半・後期末葉
疎集中	3	0	3	
焼骨集中	3	0	3	焼骨片
検出遺構数	17	3	20	

表 I-3 オニキシベ6遺跡出土遺物一覧表

遺物 種別	土器												合計				
	A地区		B地区		A地区		B地区		A地区		B地区						
皿型	20	69	0	5	0	4	0	0	0	0	0	10	0	120	228		
V型	16,374	278	826	11	241	17	7	0	0	1	2	0	18,774	86	3,805	142	40,564
擦乱	363	22	64	2	0	0	0	0	0	0	1	0	6	46	1	505	
小計	16,757	369	890	18	241	21	7	0	0	1	2	1	18,774	102	3,851	263	41,297
試掘	30	3	3	0	0	0	0	0	0	2	0	28			66		
表探査	17	3	2	0	0	0	0	0	0	11	0	7			40		
合計	17,173	914	267	7	1	3				18,889	4,149				41,403		

る。この他、多量に出土した焼骨片集中などからはフローテーション作業によって、エゾシカと思われる陸棲哺乳類の焼骨片が多量に回収され、骨鑑片やイノシシの焼骨片部位が4点ほど出土している。またクルミやブドウなどの野生種炭化種子も回収され、クリ子葉も1片ほど出土している。

この他の遺構遺物として、Tピット7基、土坑3基を検出しているが、帰属時期は不明である。

当初、縄文時代の遺物包含層であるV層が発掘調査対象層位であったが、火山灰除去中に続縄文・擦文文化期の遺物が少量出土した。続縄文文化期では、恵山式土器の影響を受けた土器や後北C₁式、C₂-D式土器が出土しており、弥生式系土器も1点ほど出土している。擦文土器はⅢ層からの出土遺物としては、O I突瘤文を有する初期段階や口縁部に段状沈線文が施文される前期の擦文土器が出土している。

(乾)

第6節 遺跡の位置と周辺の環境

1. 厚真町の概要

A 地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振総合振興局の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口4,379人(平成25年1月末日現在)の農業の町である。町域の総面積は404.56km²で、流路52.3kmの二級河川厚真川流域に広がり南北32.5km、東西17.3kmと細長く、南部は約6.5kmにわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で35分、海上物流の拠点である苫小牧港からは40分と現代社会において利便性に恵まれた位置でもある。町域を縱貫する厚真川は源流部から河口までの1河川流域で厚真町域のみを流下し、全国において1河川流域を有する自治体は数少ない。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高200~600mの山地が続き、総面積の約70%を山林が占める。東は夕張山地から続く低い山地を挟んで、むかわ町と接し、北西は標高100m前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯(以下、苫東地区)内で苫小牧市と接している。厚真の語源は3説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム(at-to-mam「向こうの湿地帯」)で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという(厚真村 1956)。

町内は、大きく4つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区、むかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鰯漁が盛んであったが、現在では、苫小牧沿岸にかけてホッキ貝(ウバガイ)の全国一の漁場となっている。かつては標高10m前後の砂丘列が発達し、背後には勇払原野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区的静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開拓された標高10~20m前後の支笏火山・樽前山の火山灰で構成される低平な台地と縄文海進期の海跡湖群、湿地が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は静川台地と全く同じ地形・地質様相を呈している(仮称厚和台地・鰯沼台地)。中部には厚真町の中心市街があり、鶴川、平取・徳別、早来、浜厚真方面への道道交差部に官公署や住

宅地が形成されている。かつては、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展していた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知恵辺川、ウクリ川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追山地南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中部以北では厚真川は頗美宇（はびう）川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシルク川、幌内川の3河川の合流点である。この地区は上流域の山間部より产出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和5年から24年まで早来駅とを結ぶガソリン機関車軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く（松野・石田 1960）。標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市との境界線付近、標高570m峰南側の夕張山地南城に源流部がある。

B 歴史的環境

(1) 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成25年1月末日現在で136ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期に至るまである（図1-4、表1-4-5）。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苦東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鰯沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区及び幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝ノ上地区、むかわ町穂別・豊田地区へ抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1ヵ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yrB.P.が得られている（町教委2006）。縄文時代に入り浜厚真3遺跡で東釧路Ⅱ式土器がやまとまって出土している（道埋文2003）。早期の遺跡に関しては厚真川中下流域に分布し、上流域は遺物のみがごく少量出土するに過ぎない。厚真川流域に限って言うならば、縄文遺跡は海岸部から流域を遡るかたちで拡散した可能性がある。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熟殻や哺乳綱の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけて遺跡数が激減し、晚期前葉に増加、続縄文文化期から擦文文化期前期には遺跡数が再び減少する。この様な各時期における遺跡数の偏りは苦小牧市の傾向と概ね一致しているが、厚真町の特徴差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけて遺跡数が増加する傾向がある。

(2) 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究は、最初の記録として、大正5（1916）年に現在の朝日遺跡から出土した縄文土器を教材として、学校に保管する許可書が発行されたことである（厚真村郷土研究会1956）。遺物の多くは縄文時代晚期初頭の土器片と思われ、数点の土偶片も出土している（厚真村郷土研究会1956、亀井1956、古井1961、北海道大学附属図書館HP「北方資料データベース」）。以後、厚真町での埋蔵文化財に係る流れは大きく3期に分けることが可能である。

オニキシベ6遺跡

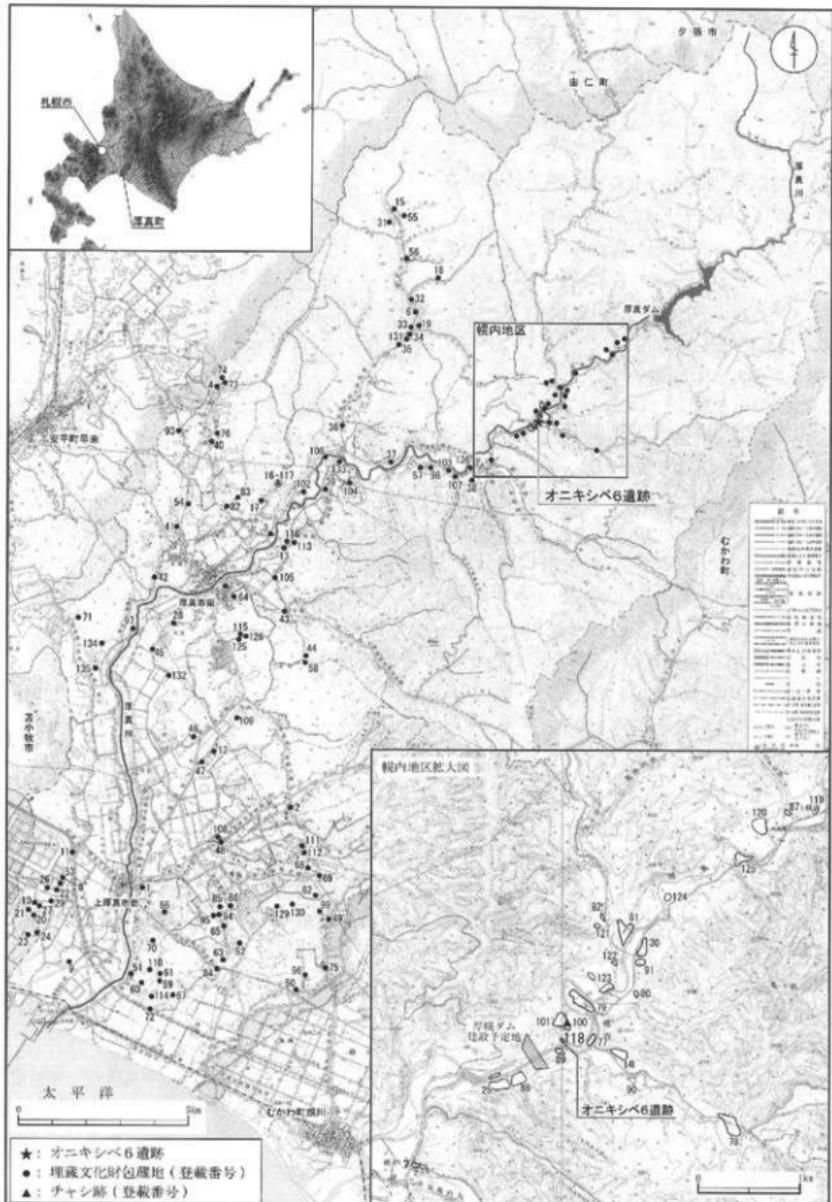


図 I-4 厚真町内遺跡分布図 (平成 25 年 2 月 28 日現在)

表I-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登載番号	種別	名 称	時 期	文 紙等	登載番号	種別	名 称	時 期	文 紙等
1	遺物包蔵地	上厚真遺跡	縄文中期、統繩文期、擦文期	I	46	遺物包蔵地	豊沢2遺跡	擦文期	
2	遺物包蔵地	輕舞遺跡	縄文中期、統繩文期	I	47	遺物包蔵地	豊沢3遺跡	統繩文期	
3	遺物包蔵地	朝日遺跡	縄文中～後期、統繩文期、擦文期、近代	I, 2, 31	48	遺物包蔵地	櫛沼1遺跡	詳細不明	I
4	遺物包蔵地	幌里1遺跡	縄文早・中期、統繩文期	I	49	遺物包蔵地	鹿沼2遺跡	縄文中期	5
5	遺物包蔵地	新町遺跡	縄文早・中期、統繩文期、アノミ期	I, 4, 6	50	遺物包蔵地	鹿沼1遺跡	縄文早期	5
6	遺物包蔵地	高丘1遺跡	縄文中期、統繩文期	I	51	遺物包蔵地	厚和1遺跡	縄文中期、アイヌ期	I, 4, 6
7	遺物包蔵地	幌内1遺跡	縄文中期、後期	I	52	遺物包蔵地	鹿沼3遺跡	縄文中期・晚期	
8	聚落跡	先和道路	縄文後期、統繩文期、擦文期	I, 8	53	遺物包蔵地	厚真13遺跡	縄文早期	10
9	遺物包蔵地	厚原真遺跡	詳細不明		54	遺物包蔵地	本郷3遺跡	縄文時代	
10	遺穴遺跡	厚真10遺跡	縄文中期・後期	3, 8	55	遺物包蔵地	高丘11遺跡	縄文後期	
11	遺物包蔵地	厚真11遺跡	縄文時代		56	遺物包蔵地	厚和12遺跡	縄文時代	
12	遺物包蔵地	豊沢1遺跡	統繩文期	I	57	遺 畜	轄内5遺跡	縄文前期、近世アイヌ期	32
13	遺物包蔵地	東有浦遺跡	縄文後期	I	58	遺穴遺跡	豊沢4遺跡	縄文早・後期	
14	聚落跡	オニキシベ1遺跡	縄文中期・後期	I	59	遺物包蔵地	厚和2遺跡	縄文中期	
15	遺物包蔵地	高丘12遺跡	縄文中期		60	遺物包蔵地	厚和3遺跡	縄文後期	
16	チャシ跡	坂丘チャシ跡	中世アイヌ期	I, 6	61	遺物包蔵地	厚和4遺跡	縄文中期	
17	遺物包蔵地	坂丘1遺跡	縄文晚期		62	遺物包蔵地	鹿沼4遺跡	縄文時代	
18	遺物包蔵地	高丘2遺跡	詳細不明		63	遺物包蔵地	厚和5遺跡	縄文時代	
19	遺物包蔵地	高丘10遺跡	詳細不明		64	遺物包蔵地	新沢2遺跡	縄文後期	
20	聚落跡	厚真1遺跡	縄文中期	I, 8, 13	65	遺物包蔵地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
21	遺穴遺跡	厚真2遺跡	縄文時代	8	66	遺物包蔵地	厚和6遺跡	縄文前期	
22	遺穴遺跡	厚真3遺跡	縄文早～後期、統繩文期、擦文期	10	67	遺物包蔵地	浜原1遺跡	縄文早期	
23	聚落跡	厚真4遺跡	縄文中期、後期、統繩文期、近代		68	考古遺跡	鹿沼2遺跡	縄文時代	14
24	遺穴遺跡	厚真5遺跡	縄文期、統繩文期		69	遺物包蔵地	豊丘1遺跡	縄文前期	
25	聚落跡	厚真1遺跡	縄文早～後期、統繩文期、中・近世アイヌ期	I, 18, 30	70	聚落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
26	聚落跡	厚真7遺跡	縄文早・中期、統繩文期、擦文期、擦文期	9	71	島落跡	豊丘11遺跡	縄文中期・後期	15
27	聚落跡	厚真8遺跡	縄文早・中期、統繩文期	8	72	遺穴遺跡	浜原3遺跡	縄文早期	17
28	遺穴遺跡	美里2遺跡	縄文早・中期		73	遺物包蔵地	ニタコボリ1遺跡	縄文後・中期	
29	遺跡	厚真12遺跡	縄文早・後期、擦文期	I, 10	74	遺物包蔵地	鹿沼神社遺跡	縄文時代	
30	遺物包蔵地	上幌内1遺跡	縄文中期		75	遺物包蔵地	入鹿別沼遺跡	縄文中期	
31	遺物包蔵地	高丘4遺跡	縄文時代		76	遺穴遺跡	鶴居11遺跡	縄文時代	
32	遺物包蔵地	高丘5遺跡	縄文時代		77	遺物包蔵地	オニキシベ2遺跡	縄文中期・後期、統繩文期、中世アイヌ期	33
33	遺物包蔵地	高丘6遺跡	縄文時代		78	遺物包蔵地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
34	遺物包蔵地	高丘7遺跡	縄文中期		79	聚落跡	上幌内モイ1遺跡	田石器、縄文早・中期・後期、統繩文期、擦文期、中世アイヌ期	19, 21, 22, 24, 26, 27, 28
35	遺物包蔵地	高丘8遺跡	縄文時代		80	遺物包蔵地	一里沢遺跡	縄文時代、アイヌ期	4, 5, 21
36	遺物包蔵地	高丘9遺跡	統繩文期		81	聚落跡	シロロマ1遺跡	縄文前・後期、アイヌ期	
37	遺物包蔵地	厚里1遺跡	縄文中期・後期、アイヌ期	I	82	遺物包蔵地	東ニタコボリ1遺跡	縄文中期・後期	
38	遺物包蔵地	厚内4遺跡	縄文中期?		83	遺物包蔵地	東ニタコボリ2遺跡	縄文中期・後期	
39	遺物包蔵地	チコマナ1遺跡	縄文時代		84	遺物包蔵地	浜原3遺跡	縄文中期	
40	遺物包蔵地	紀里2遺跡	縄文中期		85	聚落跡	櫛沼3遺跡	縄文前～後期	20, 23, 25
41	遺物包蔵地	本郷1遺跡	縄文中期		86	遺物包蔵地	渡沼4遺跡	縄文後期	
42	遺物包蔵地	本郷2遺跡	縄文中期		87	遺物包蔵地	イタバンドユクチセ1遺跡	縄文後期	
43	遺物包蔵地	宇附1遺跡	擦文期	I, 16, 32	88	遺物包蔵地	厚根2遺跡	縄文前期	
44	遺物包蔵地	宇附2遺跡	縄文後期		89	遺物包蔵地	オニキシベ4遺跡	縄文早・中期・後期	
45	遺物包蔵地	美里1遺跡	縄文中期	I	90	遺物包蔵地	オニキシベ5遺跡	縄文中期・後期	36
					91	遺穴遺跡	上幌内2遺跡	縄文時代・擦文、アイヌ期	
					92	遺物包蔵地	シロロマ2遺跡	縄文中期・中期	
					93	遺穴遺跡	鶴居4遺跡	縄文時代	

表 I-5 厚真町内埋蔵文化財包藏地一覧表(2)

登載番号	種別	名 称	時 期	文獻等
94 集落跡	厚和8遺跡	縄文末・後期		
95 廃物包合地	厚和9遺跡	縄文中期		
96 廃物包合地	鹿沼6遺跡	縄文時代		
97 廃物包合地	豊川1遺跡	縄文期、撫文期		
98 廃物包合地	幌内6遺跡	縄文後期		
99 集落跡	荒沼7遺跡	縄文早~晩期		
100 チャン群	ヲチャラセナイ チャン跡	中世アイヌ期	35	
101 梶原跡	ヲチャラセナイ 遺跡	縄文早~晩期、純絶文 期、撫文期、中世アイヌ期	35	
102 廃物包合地	古賀1遺跡	縄文中期・晚期		
103 廃物包合地	幌内7遺跡	縄文統期、撫文期		
104 集落跡	ニタップナ4遺跡	縄文前~晩期、純絶文 期、撫文期、近世アイヌ期	29,32	
105 廃物包合地	平隣3遺跡	縄文中期		
106 廃物包合地	富里2遺跡	縄文後~絶期、撫文期、近 世アイヌ期	32	
107 廃物包合地	オコッコ1遺跡	縄文前~後期、撫文期		
108 廃物包合地	軽移3遺跡	縄文前期、純絶文期		
109 廃物包合地	豊沢5遺跡	縄文後期		
110 廃物包合地	厚和10遺跡	縄文早・中・後期		
111 廃物包合地	豊丘2遺跡	縄文早期		
112 廃物包合地	豊丘3遺跡	縄文中期		
113 廃物包合地	東丸2遺跡	縄文晚期		
114 廃物包合地	西原高5遺跡	縄文後期		
115 廃物包合地	豊沢6遺跡	縄文早・中期・後期		
116 廃物包合地	東和3遺跡	縄文早期		
117 廃物包合地	桜丘2遺跡	縄文中期		
118 廃物包合地	オニキシベ6遺跡	縄文後~中期、純絶文期、 撫文期		
119 清六遺跡	イクバンドユクチセ 2遺跡	縄文後期		
120 廃物包合地	イクバンドユクチセ 3遺跡	縄文早~後期、純絶文期		
121 廃物包合地	シヨ レマ3遺跡	純絶文期		
122 廃物包合地	シヨ レマ4遺跡	縄文時代		
123 廃物包合地	上幌内3遺跡	縄文早~後期、純絶文 期?		
124 廃物包合地	上幌内4遺跡	縄文中期		
125 清六遺跡	上幌内5遺跡	縄文時代		
126 廃物包合地	豊沢7遺跡	縄文早~後期		
127 廃物包合地	豊沢8遺跡	縄文後期		
128 廃物包合地	ツイカルマイ遺跡	純絶文期、撫文期、中~近 世アイヌ期、近代		37
129 廃物包合地	長沼1遺跡	縄文早期		
130 廃物包合地	長沼2遺跡	縄文中期		
131 廃物包合地	高辻13遺跡	縄文前期、撫文期		
132 廃物包合地	上野1遺跡	縄文中期		
133 廃物包合地	富里5遺跡	縄文早~中期		
134 廃物包合地	豊川3遺跡	縄文晚期		
135 廃物包合地	三ヶ月沼遺跡	縄文晚期		
136 廃物包合地	幌内8遺跡	縄文早~中期		

関連文献

- 厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』：2：亀井喜久太郎 1957「厚真出土の土偶」『先史時代』3：3：苦小牧市教育委員会 1974『苦小牧東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査報告書』：4：亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』：5：鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡分布報告』：6：亀井喜久太郎・池田実 1978『厚真の旧地名を尋ねて』：7：松浦武四郎(高倉新一郎校訂) 1985『戊午東西蝦夷山川地理政満日誌』：8：苦小牧市教育委員会 1986『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』：9：苦小牧市教育委員会 1987『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』：10：苦小牧市教育委員会 1990『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』：11：苦小牧市教育委員会 1992『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』：12：苦小牧市教育委員会 1995『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』：13：赤石慎三 1999『苦小牧地方の円筒上層式について』『苦小牧市埋蔵文化財調査センター所報』：14：厚真町教育委員会 2001『舞沼2遺跡』：15：厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』：16：鈴木 信 2001『IV-4 北海道の中世陶磁器』『千歳市ユカシボシC15遺跡(4)』：17：(財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町厚原3遺跡』：18：厚真町教育委員会 2004『厚原1遺跡』：19：厚真町教育委員会 2005『上幌内モイ遺跡発掘調査概要報告書』：20：厚真町教育委員会 2005『舞沼3遺跡』：21：翼島榮紀 2005『松浦武四郎の旅程からみた胆振東部・日高西部の古交通路』『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振)』日高1】
- 22：厚真町教育委員会 2006『上幌内モイ遺跡①』：23：厚真町教育委員会 2006『舞沼3遺跡②』：24：厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡②』：25：厚真町教育委員会 2008『舞沼モイ遺跡③』：26：出德雅実他 2008『論集忍足路子Ⅱ』：27：根岸達人 2008『平泉文化と北方交易2—撫文期の銅鏡をめぐって—』『平泉文化研究年報8』：28：厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡』『発掘調査報告書③』：29：厚真町教育委員会 2009『ニタップナ1遺跡①』：30：厚真町教育委員会 2010a『厚原1遺跡②・幌内7遺跡①』：31：北海道大学附属図書館H2P北方資料データベース：32：厚真町教育委員会 2010b『幌内5遺跡①・富里2遺跡・ニタップナ1遺跡②』：33：厚真町教育委員会 2011『オニキシベ2遺跡』：34：苦小牧民報社2011.3.3 新聞記事：35：厚真町教育委員会 2013a『ヲチャラセナイチャン跡・ヲチャラセナイ遺跡①』：36：厚真町教育委員会 2013b『オニキシベ5遺跡』：37：厚真町教育委員会 2013c『ツイカルマイ遺跡』

a. 厚真村郷土史研究会・埋蔵文化財の地域自主的研究（昭和 20 年代後半から 40 年代中頃）

元厚真村長で名誉町民の亀井喜久太郎氏の熱心な働きかけで昭和 27 年に八幡一郎氏、30 年に大場利夫氏等が來村し、町内の遺跡・遺物を実見している。また、亀井氏は昭和 28 年に厚真村郷土研究会を発足させ、遺物の収集や会報『郷土研究』で遺物の紹介を行い、昭和 31 年には『厚真村古代史』を刊行している（厚真村郷土研究会 1956）。現在、埋蔵文化財保護の基礎資料である埋蔵文化財包蔵地カードの「調査・文献」には「昭和 31 年 7 月 厚真村郷土研究会『厚真村古代史』や「昭和 47 年 12 月 厚真町郷土史研究会 踏査」の記載で始まるものが 32 遺跡もあり、厚真町の文化財保護・研究に大きな功績を残し、礎となっている。町内で初めての組織的な発掘調査は、昭和 37 年に厚真村郷土史研究会によって朝日遺跡と共和遺跡で行われた。調査に関する詳細は不明だが、縄文時代晚期初頭の土器片を中心とした出土遺物がコンテナにして 5 箱分、厚真町教育委員会に保管されている。また昭和 34 年に字隆地区公民館建設工事現場からの遺物出土の連絡を受け、道内で初めての出土となる愛知県常滑産と推定される 12 世紀中葉の広口壺を回収している。当初は、須恵器と判断されていたが、平成 23 年に常滑市民俗資料館 中野晴久氏によって確認された。

b. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター・大規模な行政発掘「苫東調査」（昭和 48 年から昭和 54 年）

昭和 48 年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、昭和 59 年までの 12 年間で厚真町域にかかるもので新規登載 14 遺跡、調査着手 11 遺跡があり、縄文時代早期～擦文化期までの資料が得られている。調査成果として、昭和 51 年調査の厚真 1 遺跡（苫小牧市教育委員会 1986）では、この地域で初めての T ピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真 1 式土器」（赤石 1999）の標識遺跡もある。厚真 7 遺跡では縄文時代中期末葉と後期前葉の住居跡 8 軒の検出と、石狩川中流域で数多く出土する「丸のみ形石斧」も出土している（苫小牧市教育委員会 1987）。また、共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文化期前期の堅穴式住居跡 2 軒が調査されている（苫小牧市教育委員会 1987）。これらの成果は苫小牧市教育委員会により『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』として報告書が刊行されている（苫小牧市教育委員会 1986・1987・1990・1992）。整理・報告後の出土遺物等は平成 13 年度に町教委へ返却・保管されている。

なお、厚真町域における道教委による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」は、昭和 54 年 9 月行われ、52 遺跡の包蔵地カードが作成されている。

c. 開発に伴う調査の増加と厚幌ダム・厚幌導水路事業の開始（平成 10 年以降）

近年は火山灰採取などの開発に伴う試掘調査や工事立会調査が増加し、道教委による豊川 1 遺跡（町教委 2001）、鰐沼 2 遺跡（町教委 2001）、鰐沼 3 遺跡（町教委 2005・2006b・2008）などの調査が行われた。高規格道路日高自動車道の建設に伴う（財）北海道埋蔵文化財センターによる浜厚真 3 遺跡の調査では、187 基の T ピットが検出されている（道埋文 2003）。これらの調査結果では、縄文時代中期後葉以前に T ピットが数多く構築されていることが分かり、周囲には比較的規模の大きい集落跡の存在が想定できる。

平成 12 年には北海道室蘭土木現業所（現北海道室蘭建設管理部）より厚幌ダム建設事業に係る埋蔵文化財保護の事前協議書が提出され所在踏査や試掘調査が開始された。発掘調査は平成 14 年から町教委により継続的に行われ、厚幌 1 遺跡（町教委 2004・印刷中）、上幌内モイ遺跡（町教委 2006・2007・2009）、オニキシベ 2 遺跡（町教委 2011）、オニキシベ 4 遺跡（印刷中）、オニキシベ 5 遺跡（町教委 2013）、オニキシベ 6 遺跡（本書）、ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャン跡（町教委 2013・

印刷中)の調査を行い、平成25年度までの12年間の調査終了面積は約113,180m²である。

平成15年には総延長24.5kmに及ぶ厚幌導水路建設事業の事前協議書が北海道開発局より提出され、所在確認踏査や試掘調査が行われている。試掘調査等は未了の箇所があるものの、現在11遺跡での要発掘・工事立会調査地点が確認され、平成19年度には厚真川中流域富里地区のニタップナイ遺跡(町教委2009-2010)、20年度は厚幌1遺跡と幌内7遺跡(町教委2010)、21年度は幌内5遺跡と富里2遺跡の発掘調査を行った(町教委2010)。これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成27年度まで継続される予定であったが、平成22年度に厚幌ダム事業の再検証が行われたため、厚幌導水路に係る発掘事業は一時中止となり当初計画からのずれ込みが危惧されている。

これらの厚幌ダム、導水路事業以外にも平成22・23年度には厚真川中流域において道道上幌内早来停車場線改良事業に伴うライカルマイ遺跡(町教委2013)や町宅地造成事業での豊沢6遺跡、民間業者の火山灰採取に伴う東和3遺跡の発掘調査が実施された。近年の傾向として全町的に埋蔵文化財の発掘調査が進みつつあり、先史時代における厚真川流域の様相が解明されつつある。

(3) 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』(松前1643)によると、「松前以東は阪川西は與依地迄人間往古する事、右大将賴朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、株部津輕より人多く此國に逃げ渡って居住す。」とあり12世紀末葉には東北北部の和人が厚真周辺域まで進出していた可能性がある。厚真町とほぼ特定できる最初の記述は1692年に書かれた『蝦夷記』(野澤1692)で、シャクシャインの戦い(1669年)に関連し「於多久具印住處阿津摩ニテ討取ル」とある。厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡との関連性が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査で梅前bテフラと生活硬化面との間に1~2cm程度黒色土が堆積し、より古い中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川上中流域のダムや導水路建設関連の発掘調査で多数の遺跡が確認されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録として、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2カ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津輕一統志』(相坂兵右衛門1731)の中で、「あつまへつ～川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについてなどの記述は見られない。1739年頃に成立した『蝦夷商賣聞書』には義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマト申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ～」や1785年の『三国通覧図説蝦夷国全図』に「アヅマ」と記載があり、注記に「鬼ヒンノ出処」と記されている(林子平1785)。しかし、寛政から文化年間(18世紀末～19世紀初)の『東蝦夷地道中記』(1791)や『蝦夷記行』(谷元旦1799)、『拾遺北日本地図全図蝦夷地出產交通略図』などの紀行文や古地図では僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所の産物として干鮭や椎茸、シナ繩、鹿皮が挙げられているが詳述はなく、以降の紀行文や測量日誌にも交通路であった勇払と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。なお本町の和人定住者としては明治3(1870)年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている(厚真村1956)。

内陸部までの詳述は、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』(松浦・吉田1962、松浦・秋葉他1985)で、1857(安政5)年6月に苦小牧市勇払から厚真川河口を経てトシニカ(現富里)にて3泊している。蝦夷地探検の6回目で、町内には5カ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の

大きいコタンでは、栗、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって畑地のほとんどが冠水したことも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。宿泊したトシニカコタンのイカシユ（乙名板藏）の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盥の七ツハツ、筐の式ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本もあるよし語りけるなり。」（松浦・秋葉他 1985）とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。上流域に関しては聞き取りによる記述で、3穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ（現一里沢遺跡）も記述されている。苦小牧駒澤大学 萩島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トニカコタンの記述や上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鶴川水系や夕張水系へのルートの存在について述べている（萩島 2005）。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌1遺跡、上幌内モイ遺跡、オニキシペ2遺跡などの他、試掘調査でも上幌内2遺跡、一里沢遺跡で確認されており、この他、厚幌導水路建設事業関連でのニタップナイ遺跡や幌内7遺跡、富里2遺跡がある。その他、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和1遺跡、幌内5遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。近年、発掘調査によってアイヌ文化期の遺跡が新たに発見されており、今後も資料の増加が期待される。

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873(明治6)年以降に開拓使苦小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町の行政単位としての始まりは1897(明治30)年に苦小牧外6ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が桜丘地区（現専厚寺境内）に設置されたことによる。内陸部の和人開拓は明治10年代からで、手掘りによる石油掘削も始められ、明治21年には開拓使から農事指導員が派遣され西老輕舞（現吉野）へ集住させられたアイヌ民族への勧農政策も実施されている。1892(明治25)年には鉄道室蘭本線が開通し、厚真的内陸部も開拓移住者が増加した。これは明治19年の国有未開地の開放で北海道開拓の促進を図る「北海道土地払下規則」が制定したことによる。以後、開拓移住者の増加が続き現在の農業の町厚真の礎が確立していく。（乾）

2. 遺跡の位置と周辺の環境

A 自然地理的環境

遺跡の周辺地域を厚幌ダム堤体建設予定地から厚真ダムまでの厚真川本流域とその支流域としたい。この地域は標高約150～400mの山地に囲まれ、その多くは200～300mの浸食が進んだ山稜を呈している。厚真川及び支流域は浸食開折した谷状地形を呈し、“線状”的地域となっている。遺跡群はこれらの流域に形成された河岸段丘上に立地している。急峻な山稜や河岸段丘の発達は、この地域の基盤層が新第三紀に形成された砂岩泥岩層（松野・石田 1960）の比較的軟弱な岩相であることに起因すると思われる。

本遺跡は厚真川河口から約30km地点で、厚真川本流に注ぎ込む鬼岸辺川合流点付近の標高約55mの自然堤防ないしは独立丘上に所在する。特により上流側のB地区は厚真川と鬼岸辺川との合流点に面し、100m下流側にA地区がある。鬼岸辺川は流路延長約9kmの小河川で、鶴川流域むかわ町穂別豊田地区との標高約250～300mの山稜付近に源流部を有し、通年、流水があるものの水量は極めて少ない。

厚真川は本遺跡周辺で東西430m、南北680mの範囲でS字状に大きく蛇行し、鬼岸辺川の開析谷との合流点でもあることから盆地状の地形を呈している。本流沿いには河岸段丘面（出穂 2006）が

発達し、下流からオニキシベ4遺跡（左岸T₁面）、オニキシベ2遺跡（左岸T₂面）、ヲチャラセナイ遺跡（右岸T₁・T₃面）、上幌内モイ遺跡（左岸T₁～T₄面）が所在し、本遺跡（左岸T₁面）はこれらの中間に位置しており、これらの遺跡への眺望が利く（図I-5）。隣接する遺跡として、南西約40mのほぼ同じ標高の河岸段丘面にオニキシベ4遺跡が立地している。

また、鬼岸辺川下流域右岸の段丘面にはオニキシベ1遺跡も立地しており、半径約500mの範囲に数多くの遺跡が密集している。また合流点に向かって標高150mの大きな山体が突出している。この地区のランドマーク的な存在であり、5,000分の1地形図には「天神山」と表記されており、山頂付近には国土地理院の四級基準点が設置されている。昭和40年代頃まで竜神を祀る神社が山頂にあり、身近な信仰対象として古くまで遡る可能性もある。

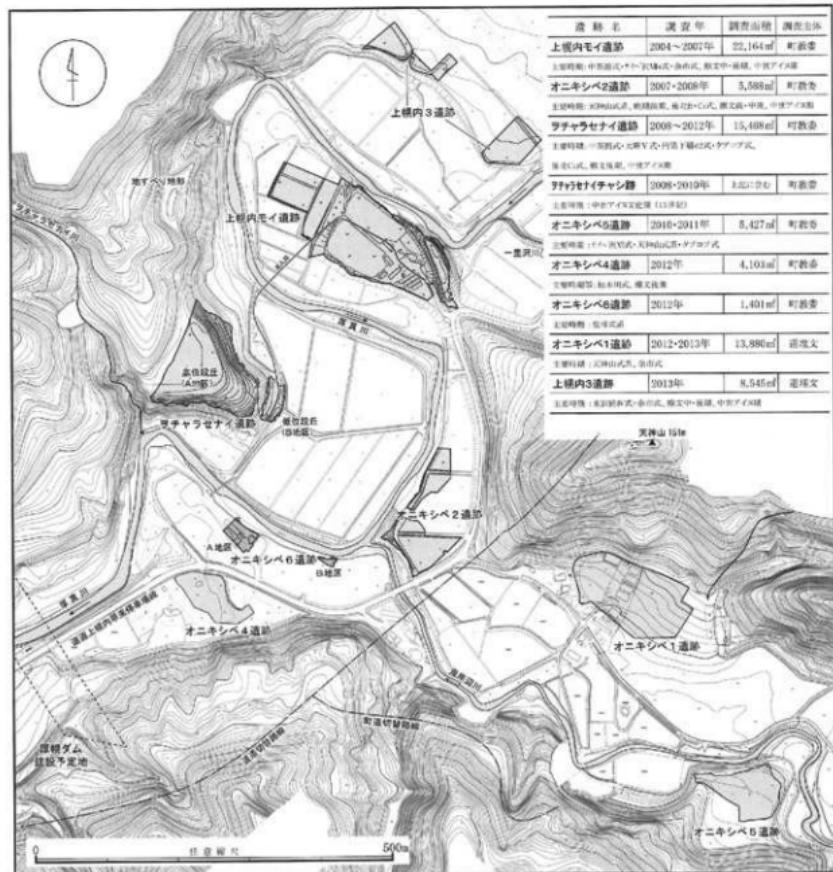


図 I-5 遺跡周辺の地形図

B 歴史的環境

この地区には、後期旧石器時代から中近世アイヌ文化期までの時期にわたる 22 遺跡が所在する。最上流のイクバンドユクチセ 2 遺跡 (J-13-119) は厚真川河口より約 33km の地点にあるが、地域住民の聞き取り調査から現在の厚真ダム堤体付近にも埋蔵文化財包蔵地が所在していたようである。遺跡群の時期的な特徴としては、縄文時代後期初頭の余市式土器群が各遺跡から出土しており、時期の偏りも見受けられる。これまでの発掘調査や試掘調査で住居跡などが検出されている。

この地区には本遺跡の主体時期である縄文時代後期末葉とほぼ同時期と考えられる遺跡はなく、この本町及び地区でまとまって出土したのは初例となる。

近現代については、明治 30 年頃から本遺跡周辺に福島県や青森県などの東北地方を主とした地域から農業開拓や林業、製炭業などの移住者が入植している。林業においては明治 39 年に永谷仙松が鬼岸辺牧場、上幌内地区に黒田牧場が開拓されている。また同年に幌内市街地に林業監督機関である「幌内監護員駐在所」も開設されており、明治後期に急速な発展を遂げている。製炭業はやや遅れて大正年間に盛況を期し、鬼岸辺川流域にも入植しており、オニキシベ 3 遺跡の試掘調査では、蹄鉄や鉄鍋、一升瓶などの開拓期の遺物が出土している。現在でも炭焼き窯跡数箇所を地表面にて確認することができ、オニキシベ 4 遺跡の発掘調査では、炭焼き窯跡や農耕馬の墓坑を検出調査している（町教委 印刷中）。本遺跡が所在する厚真川と鬼岸辺川との合流点付近は「開拓最前線」と表記されることもあり、大正 5 年には天神山山頂に龍神を奉る神社が建立され、同 9 年には合流点付近に商店も開かれている。山間部への開拓の歴史も残されている（厚真町幌内自治会 1997）。

C 松浦武四郎の記録と周辺のアイヌ語地名

この地区でのアイヌ文化に係る記録としては、江戸時代末期の安政 5(1857) 年に厚真を訪れた松浦武四郎の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（松浦・吉田 1962、松浦・高倉・秋葉 1985）が最も古い記録である。ヲチャラセナイやカニシユウ（現一里沢遺跡）、ヲニケレベ（現オニキシベ）、ショウロマ（現ショロマ）などが記載されている。厚真川下流からの左右岸の表記などからほぼ全ての位置が判明している（亀井・池田 1978）。厚真川上流域の厚幌地区には集落（コタン）、集落跡（フシココタン）の記述は無く、ヒグマやシカ、ワシタカ類の狩猟や植物採取に関する記述に留まる。

本遺跡が所在する「ヲニケレベ」は、「右の方同じく小沢也。此川すじ樅皮多く有るよし。よって号とかや。此辺え来りしや両岸峠々として本川すじは皆赤崩平のみ也。」と記されており、現在の地形とも符合している。オニキシベの語源として「入口で・木を・削り・つけている・もの」とあり、「シナの木（オヒヨウニレ）より樹皮を剥き採る場所」を意味するという（厚真村 1956）。

鬼岸辺川を遡り分水嶺を越えると鶴川水系のキナウス川筋（むかわ町豊田地区）に入る。この支流の 1 つに良樹ノ沢川がある。これは明治 29 年の地形図（図 1-6）では「ルマキナウシ」（道・入る・キナウシ-蒲・群生する・ところ）に相当する。この沢口となる豊田地区的鶴川対岸と泉地区にはルベシベ川（道・沿って下る・もの）があり、分水嶺を越えると沙流川流域の平取町荷負・長知内地区に至る。こ地区は沙流川流域で最大の支流である額平川との合流点で、さらには新冠美宇地区や新ひだか農屋地区などの日高中部への内陸ルートへと続くものと思われる。この他、大正年間に作成された「厚真村道計画路線図」には、鬼岸辺川流域にも村道計画路線があり、従来からの山越えルートが存在していたものと思われる。ほかにもこの地区には夕張川水系滝ノ上地区於兎牛沢川へ通り抜けるショロマ川やむかわ町穂別地区パンケオビラルカ沢川へ抜けるメルクンナイ

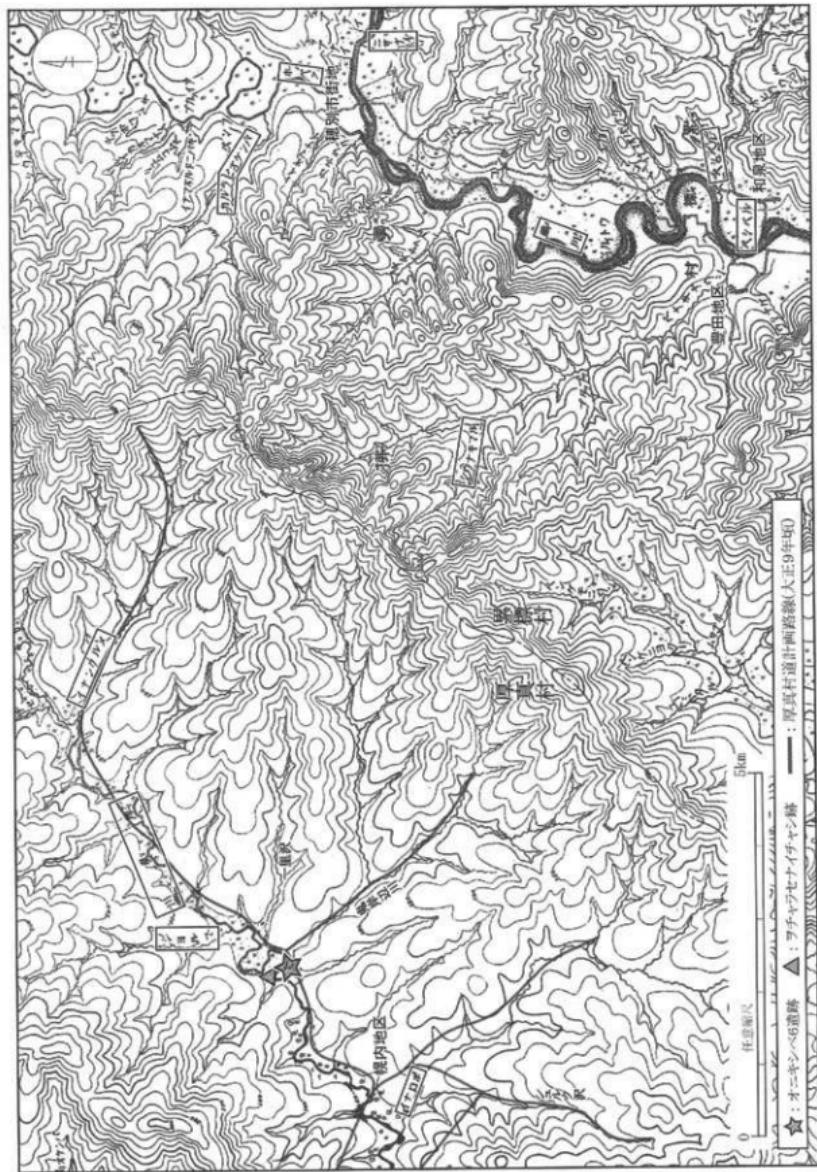


図 I-6 厚真川上流域と鶴川中流域の古地形図(明治29年発行 5万分の1「ライカルマイ」と「ルベシペ」の総合を50%縮小)

イ川、厚真川最上流域では穂別稻里地区ベンケオビラルカ沢川へ通り抜ける複数の山越えルートがある。これらのルートの全てが鬼岸辺川と厚真川本流との合流点で集約する。オニキシベの語源にある「入口」とは、低平な地形である石狩低地帯から、山間部における山越えルートへの「入口」で、ヒトやモノの流れにおいてこの地区が重要な位置にあったことも容易に想定できる。合流点対岸に突出した河岸段丘上のヲチャラセナイチャシ跡の立地は必然的とも思える。

(乾)

3. 調査区内の地形と地質

A. 地形

以下に本遺跡の主体であるA地区について記す。

本遺跡はV層上面の標高で54.0mを測る微高地に立地している。この微高地は厚真川と並行し、調査区外の北側へも続き、南北長軸約100m、東西短軸約30mの自然堤防状の地形を呈している。本遺跡の主体部はこの南端部付近となっている。頂部付近は現代の造成によって削平されているものの標高や火山灰等の堆積状態から段丘面T₁面に相当する。

厚真川は周辺地域でS字状に大きく蛇行し、隣接する厚真川が南東から北西へ流下する直線状の流路と並行している。現河床面との比高差は約3mあり、段丘崖は厚真川の浸食によって本地区基盤層の層理が発達した砂岩の露頭を見ることができる。流路方向からする直接の浸食攻撃面ではないが、増水時などには強い浸食作用の影響下となると思われる。基盤砂岩層は厚真川浸食面の東側ほど高く、背後の西側ほど低くなっている。

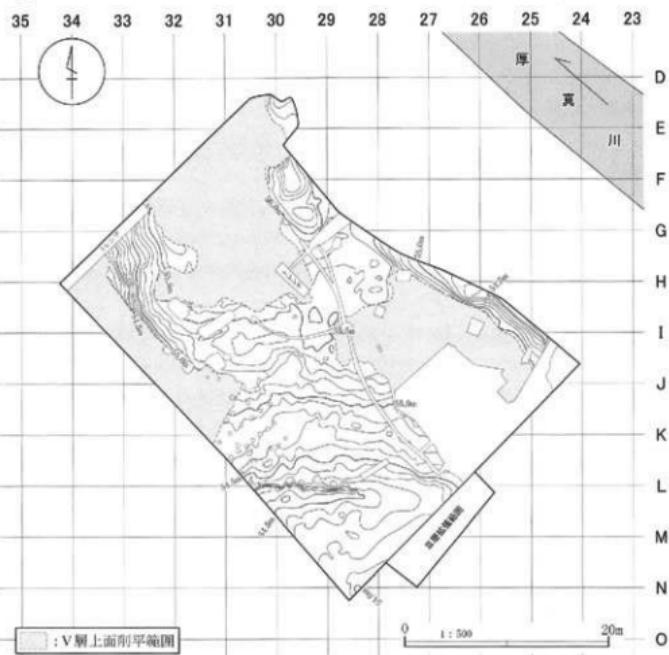
調査区内地形図は、遺跡形成年代の地形を反映するV層上面で記録し、標高は約54.0~56.4mで、高低差は最大で約2.4mあり、遺跡形成年代の縄文時代後期末葉には起伏に富む地形であったことが分かる。現地表面は盛土造成や洪水堆積シルト層などによって起伏が埋積されている。なお、調査区南西部に半島状に突出した微高地が調査区外へ続いているが、オニキシベ4遺跡の河岸段丘面へと接続、同一面となるかは不明である。

B. 地質

調査区内地形図は、遺跡形成年代の地形を反映するV層上面で記録し、標高は約54.0~56.4mで、高低差は最大で約2.4mあり、遺跡形成年代の縄文時代後期末葉には起伏に富む地形であったことが分かる。現地表面は盛土造成や洪水堆積シルト層などによって起伏が埋積されている。なお、調査区南西部に半島状に突出した微高地が調査区外へ続いているが、オニキシベ4遺跡の河岸段丘面へと接続、同一面となるかは不明である。

また、樽前cテフラより上層の黒色土においても最大約60cmの洪水シルト層の堆積が見られ、厚真川本流から取り残された旧河道から湿地状の環境下にあったものと思われる。最終的に本調査区全面が離水したのは黒色土の堆積状態からIIIb層中の中世アイヌ文化期の頃と思われ、樽前bテフラ(1667年降下)は調査区で確認できた範囲において全てフォールユニットでの堆積状態を示していた。耕作・搅乱を免れた範囲においては、駒ヶ岳c2テフラ(1694年降下)や樽前aテフラ(1739年降下)が一定の層厚で堆積している部分も確認できた。

A地区



B地区

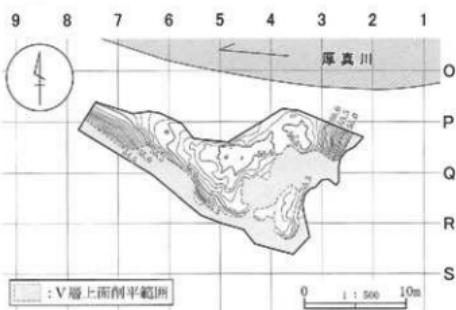


図 I-7 発掘調査区内の地形図

C. 微地形区分

上記の地形や堆積状態から下記の5面に調査区内の地形面を細分することが可能と思われる。

①面 調査区内最高部（自然堤防最頂部）

この地形面は厚真川と並行し、幅約4mの帯状に発達している。①a面と①b面に細分したが、a面はほぼ本来の地形等高線を示しているものと思われる。隣接部分は削平されていることから厳密なデータは不明であるものの、地形図から読み取れる比高差は0.4m程度である。①b面は削平されているが、削平面にてシルト岩、砂岩の角礫・亜角礫で構成される混土礫層が露出していた。

②面 調査区内低位面（旧河道→後背湿地）

標高54.0~54.2m以下の範囲で、東西2面に分かれる。確認できた最下層は河床堆積物の砂礫層で、長軸10cm前後のやや大型の礫を多く含むことから水流の強い流れによって残された堆積物と思われ、厚真川本流の旧河道と判断できる。南側の②a面は粘土質シルトのVa層と樽前cテフラの堆積が認められ、Va層段階から一時期的な離水乾燥状態にあり、後述する②b面より早い時期に陸化しているものと思われる。②b面は樽前cテフラを浸食し、シルト岩混じりの樽前cテフラ再堆積層が発達している。一部には砂層との互層堆積が発達しており、速度を保つ流水環境で残された可能性もある。なお、この面は掘削検出直後からの湧水により水没しており、地形図作成も足元が水面下での作業となった。

少なくともこれらの低地面は上幌内モイ遺跡で確認されている地震起因の地すべりによって発生した厚真川の洪水氾濫の影響を受けていると思われるが、今回は明確な確認作業を行うに至らなかった。

③面 段丘崖根の溝状地形

②a面の西側で調査区外へ続く延長約10m、最大幅約0.3m、最も深い部分で深さ約0.3mの溝状地形を③面と区分した。厳密には②a面の地形形成最終過程とも言えるが、特徴的かつ局所的であることから別に記載する。なお、地形図には特徴的に表れているものの水没のため堆積状態の確認ができず、他の堆積環境等からの推察の域を出ないことを予め断っておく。

②a面はVa層の発達もあり比較的安定した環境下にあったものと思われる。そのような中での深い溝状の微地形は湧水等による水の浸食が想定される。また、溝状地形の底部は旧河道の下流方向へと傾斜していることも流水起因による推定の論拠の1つでもある。

④面 小分流跡

調査区中央部付近の自然堤防上で標高55.0mラインが約6mの間隔で2条現れ、この間が緩い溝状の地形を呈していた。I-30区ではV層中に2層の洪水シルトの堆積も確認でき、離水後も大規模な洪水が発生する度に流路となっていたものと思われる。この洪水シルト層の下層のVc層より縄文式土器片が数点出土しており、縄文時代前期前葉には自然堤防上の地形面がやや安定していたことが伺える。

④a面と④b面に細分した。④a面は標高55.3mラインを底面とし、削平部分でも2条1対での溝状の等高線を示し、段丘崖等高線へと接続することから厚真川本流へ続く小分流と思われる。削平面でも部分的に自然堤防を構成する礫層が露出しており、この間が分流開口部と思われる。

④b面は極めて浅いものの、削平を免れている底面で等高線が現れており、流出物が④a面を被覆し狭小化している等高線となっている。

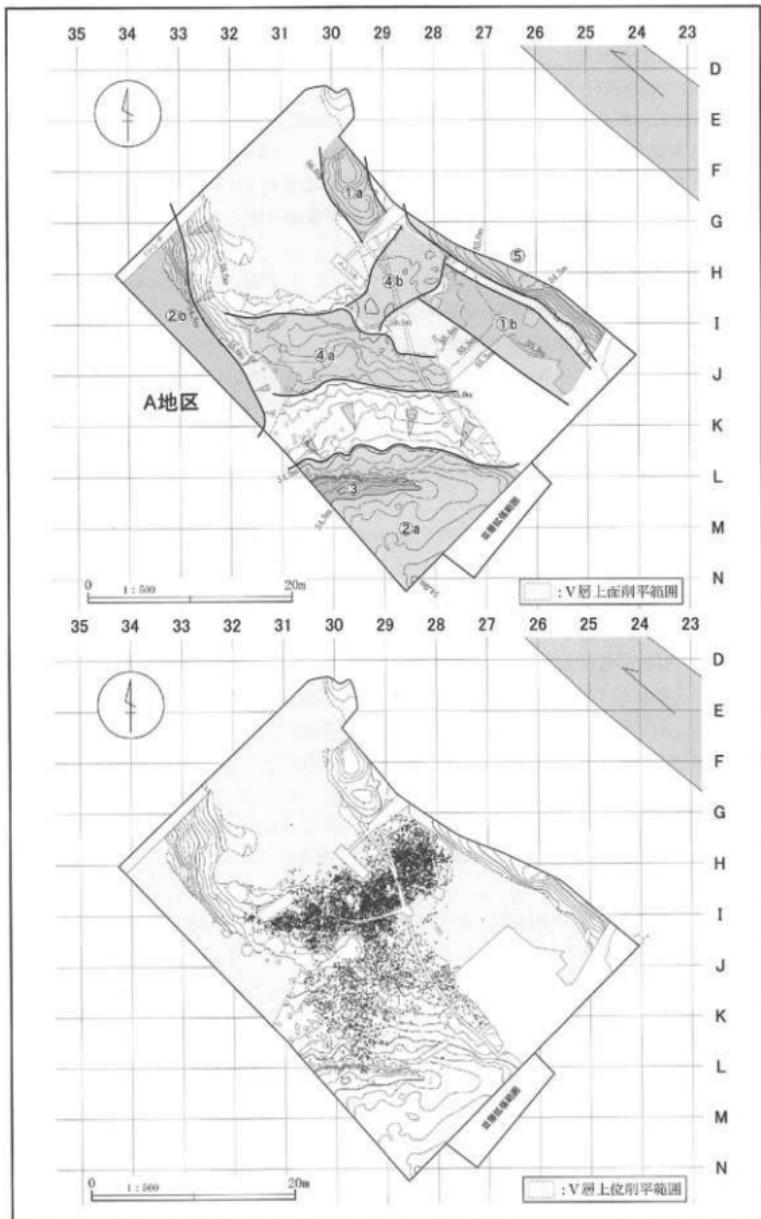


図 I - 8 地形面区分及びIV群土器分布図

⑤面 自然堤防本流側縁辺部

この面はV_a層が残存しており、厚真川河床面への段丘崖の上方となる。調査区境界付近ではほとんど遺物が出土しておらず、利用対象外であったものと思われる。本遺跡はV_a層中の生活層であり、比較的短時間のうちに樽前cテフラにパックされる環境であり、全てが段丘崖斜面下方へ流出したとは考えにくいことも、遺物の有無と係り重要な要素である。

上記の他、南向き斜面ではV層上面で楕円形に10~20cm程度、窪む地点が数ヶ所あった。土坑の可能性があったことから半裁し、坑底面や堆積状態を観察したが、いずれもV_b層中のはい黄褐色の洪水堆積シルト層を切っていたものの、シルト層上面での黒褐色土落ち込みの輪郭が不明瞭であった。また、坑底面から壁面への立ち上がりが不明瞭で、坑底面が不整形を成すものもあった。遺物や炭化物等の出土もなく、人為的要素が殆どないことから樹木の根腐れ等の自然營力によるくぼみと判断したものがあった。

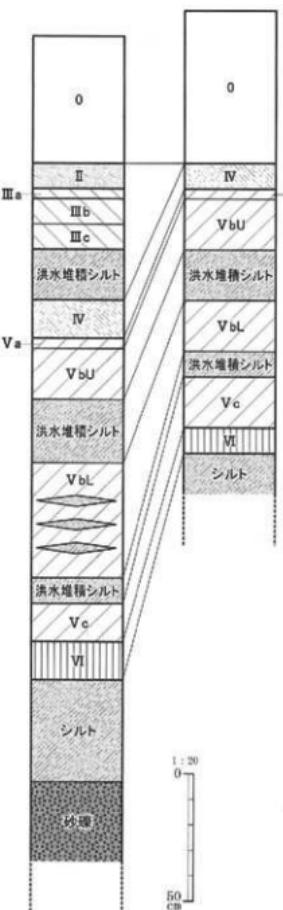
上記より、本遺跡の主体時期である縄文後期末葉の三ツ谷式期の地形環境について記す。まず、出土遺物との関係を記すにあたり、出土遺物の原位置については樽前cテフラ降下堆積により、流出等の二次的な移動は少ないものと思われる。しかし本遺跡が立地する自然堤防上の多くは削平されており、限られた情報であるものの本遺跡を残した人々の活動の主体は④面と④b面の西部にかけてである。その下部の②a面にはシルト層が堆積する低湿地状態であり、南斜面裾には③面の湧水が存在していた可能性がある。出土遺物の分布も④面の小分流の弛みから③面の溝状地形へかけて帶状に分布していることからも、同時期性や何らかの関連性があるものと思われる。一方、②b面へも遺物分布が広がるが、自然堤防上にはほぼつまり、旧河道への遺物分布はほとんど見られない。②b面の当時の環境としては転運床が露出していたものと思われ、調査区内全面に降下堆積したはずの樽前cテフラも浸食流出していることから、厚真川本流の分流が存在していた可能性も十分にある。また、⑤面の厚真川漫食崖上面で遺物が全く出土していないことから、この面での活動の頻度はほとんど無かったものと思われる。

微地形と遺物出土の関係から、オニキシベ6遺跡を形成した縄文時代後期末葉の人々は低湿地や湧水地点？と思われる調査区内南部の地形を意識した活動の結果残された遺跡である可能性が見えてきた。

本厚幌地区内の遺跡立地においては現地形での周辺環境などから推察することが可能と思われるが、遺跡内においては遺構配置は遺物出土位置や層位、微地形からの判断で、遺跡ごとの各時期における具体的な活動を推察していくことが各遺跡において必要と思われる。

(乾)

〔A地区旧河道部〕 〔A地区高位部〕

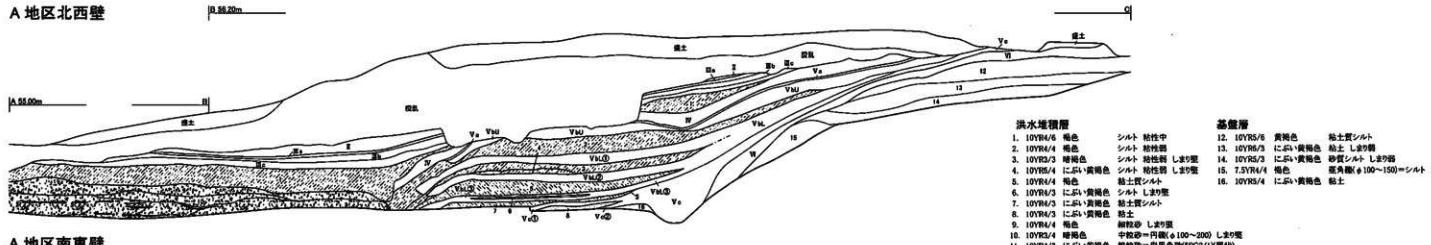


〔B地区〕

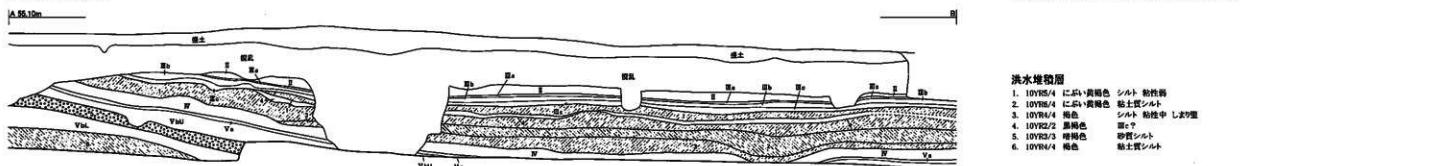
0 層：搅乱・耕作土
 I 層：表土 7.5YR2/1 黒色
 II 層：博前 b テフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 浅黄色
 1667年降下。層厚20cm前後。
 III層：黒色腐植土
 a ; 砂質シルト 7.5YR2/1 黒色
 II 層を斑状に含む。層厚1cm前後。
 やや赤みあり。近世初頭遺物包含層。
 b ; シルト 10YR1.7/1 黒色
 やや粘性あり。層厚10~15cm。
 上位から中位が中世アイヌ文化期遺物
 包含層。下位が縄文文化期包含層。
 III b層とIII c層との層境に白頭山-苔小牧
 火山灰 (B-Tm) シルト質降下火山灰
 10c前半~中頃) が部分的に堆積する。
 c ; 砂質シルト 10YR2/2 黒褐色
 層厚10cm前後。続縄文~縄文晚期後葉の
 包含層。
 IV層：博前 c テフラ (Ta-c) 10YR6/6 明黄褐色
 B.P.2,500~3,000年降下。層厚15cm前後。
 V層：黒色腐植土
 a ; シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚3cm前後。
 縄文晚期遺物包含層。
 b ; シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚はA地区
 高位部で40cm前後、旧河道部で70cm前後、
 層中に洪水堆積層を挟む。B地区では
 層厚20cm前後。縄文中・後期遺物包含層。
 c ; シルト 10YR2/3 黑褐色 層厚はA地区で
 15~20cm、B地区で10cm前後。縄文前・
 中期遺物包含層。
 VI層：漸移層 2.5YR4/6 暗褐色 墓地シルト。
 層厚10~15cm。縄文早期の遺物包含層。

図 I-9 基本土層柱状図

A 地区北西壁



A 地区南東壁



A 地区 28 ライン



B 地区

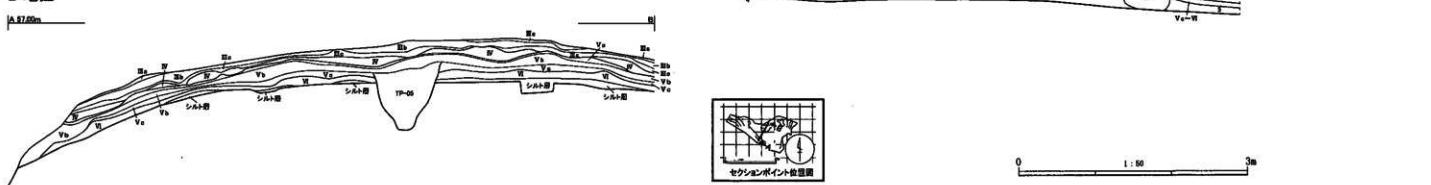


図 I-10 包含層土層断面図

第II章 掘文・続縄文文化期の調査

当初、搅乱によりIII層は残存していないと考えていたが、A地区では旧河道部に、B地区では丘頂部及び西側部分に残存していることを確認した。

A地区III層からは20点の土器片が出土した。調査区南東壁清掃中、数点の続縄文土器が出土したため、旧河道部を約12×3m拡張したところ、L-26区上位1層(図I-7)からVI群B1類の同一個体片がまとまって出土した。これ以外には搅乱からVI群B1類が2点出土している。

B地区では、搅乱土除去中、擦文土器片が1点出土し、また、西側部分で厚さ5cm前後のTa-b火山灰(II層)が確認されたため、III層上面までジョレンを用いた人力による清掃作業を行った。遺物出土点数は211点で、続縄文土器62点、擦文土器10点、剥片石器5点、礫石器4点、剥片10点、礫120点である。続縄文土器はVI群C2~C4・D類が出土した。VI群C4類が最も多く51点、VI群C3類が9点、VI群C2類が1点、VI群D類が1点である。VI群C3類がP-4区丘頂部平坦面から出土した以外は、0・P-6・7区西側斜面からの出土である。擦文土器は西端0-7区斜面からVII群B1類aの土器片8点が出土している。また、VII群A類・B1類aが各1点搅乱から出土している。

B地区からは、石器類や礫も出土している。出土傾向としては、石器類は丘頂部平坦面から、礫はIII層残存部全域からの出土で、土器のように偏った傾向は認められない。器種に関しては、ボイント1点、スクレーパー2点、RF・UF各1点、たたき石1点、砥石1点、石皿2点である。礫の中には棒状礫も含まれるが、全体の1割程度であり、その出土傾向に偏りは認められない。

A・B両地区ともIII層にかかる遺構は検出されていない。

(岩橋)

表II-1 III層地区別検出遺物一覧表

項目	A地区	B地区	搅乱他	合計	備考
土器	20	69	7	96	
剥片石器	0	5	0	5	
礫石器	0	4	0	4	
剥片	0	10	0	10	
礫	0	120	0	120	
遺物総点数	20	208	7	235	

第1節 包含層出土遺物

土器(図II-1-1~8 図版8-1-1~8)

VI群B1類a種土器(1・2)

アヨロ2類a並行の土器である。出土点数は21点で、19点がA地区から出土した。

1・2は深鉢形土器の同一個体片で、1は口縁～胴部片、2は底部片である。口唇外面には棒状工具による刻みがやや斜めに施文されている。地文はLR縦走縄文で、施文後ナデ調整が施される。口唇部形態は角状で、口縁部内面には稜が形成されていることからアヨロ2類a並行の土器と考えた。底部は上げ底状を呈する。

VI群C2類土器(3)

後北B式土器である。出土点数は1点で、B地区からの出土である。

3は深鉢形土器の底部片である。底径62mm、形状は上げ底で、急角度で立ち上がったのち外反する。RL縦走縄文が地文として施される。

VI群C3類土器(4)

後北C₁式土器である。出土点数は9点で、全てB地区からの出土である。

4は深鉢形土器の口縁～胴部片である。口唇にはヘラ状工具での横からの刺突による刻みが施される。

VI群C4類土器(5)

後北C₂-D式土器である。出土点数は27点で、全てB地区からの出土である。

5は胴部片で、微隆起線文・三角列点文・帶縄文が施される。

VI群D類土器(6)

後北C₁式土器前後に並行する弥生系土器である。6は口縁部片で、口縁部は外反し小突起が設けられる。4条の平行沈線文が施され、その間に三角列点状の刺突文が施されている。この下縁には浅い連続山形文が描かれる。口唇にRL縦文が施され、器表面はRL帶縄文が施文されている。

VII群A類土器(7)

擦文化期初頭に位置づけられるもので、十勝茂寄式及び北大III式に相当する土器である。出土点数は1点で、B地区からの出土である。

7は甕形土器の口縁部片である。口唇は角状に成形される。器表面には反時計回りにヘラナデが入れられ、棒状工具による円形刺突文が施文される。

VII群B1類a種土器(8)

8は甕形土器の口縁～胴部片である。口唇やや内側寄りに浅い凹線が引かれ、口縁部及び胴部には数条の段状沈線文が施文されている。

(岩橋)

石器(図II-1-9 図版8-1-9)

III層からは剥片石器が4点出土している。9は黒曜石製の石鏃で、A2類に分類される。長軸43.3mmで、B類に分類される長さではあるが、無柄であること、両面に入念な調整が施されていること、薄く鋭いことから石鏃と判断した。

(服部)

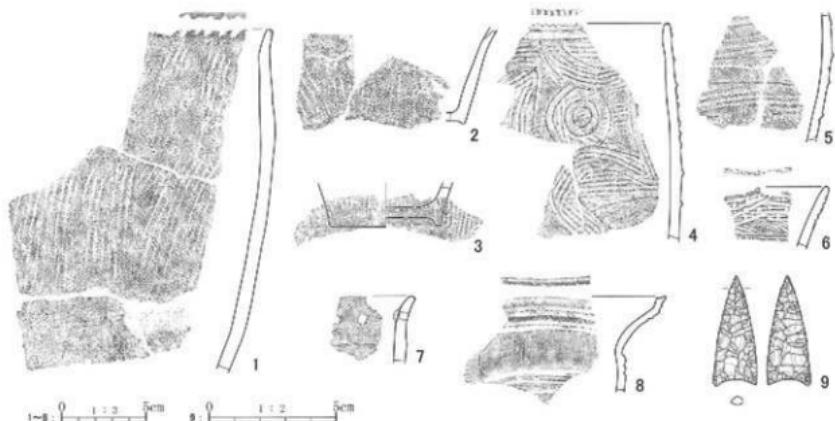


図 II-1 続縄文・擦文文化期包含層出土遺物

表 II-2 続縄文文化期包含層出土土器属性表

排岡番号	図版番号	個体名稱	分類	グリッド	層位	点数	部位	器形等		文様		胎土	備考
								口縁	平縁・直立・隅丸角状・外傾	口唇-口唇/胸部/底側面-変換点-底面	口唇-口唇-内面/胸部-内面/底側面-底面-内面		
II-1-1	8-1-1	ZP001A VIB1	L-26	IIIeL	4	口縁	平縁・直立・隅丸角状・外傾			刻み-LR継走縄文		砂粒中量	
II-1-2	8-1-2	ZP001D VIB1	A地区	IIIeL	2	底部	外傾-隅丸角状-上:円底	LR継走縄文				砂粒中量	
II-1-3	8-1-3	ZP005A VIC2	P-6	IIIc	2	底部	外傾-隅丸角状-上:円底	RL継走縄文				砂粒少量	
II-1-4	8-1-4	ZP002A VIC3	P-4	IIIc	2	口縁	平縁・直立・隅丸角状・外傾	刻み-微隆起線文/RL	継走縄文	微隆起線文		極少量	
II-1-5	8-1-5	ZP003A VIC4	O-6 P-6	IIIc	1 2	胸部	やや内湾			RL継走縄文・微隆起線文・列点		砂粒 極少量	
II-1-6	8-1-6	ZP004A VIIJ	P-6	IIIe	1	口縁	突起・外反・丸状・外傾			RL継文-沈線文・刺突文/連続山形文・RL帶		砂粒 極少量	

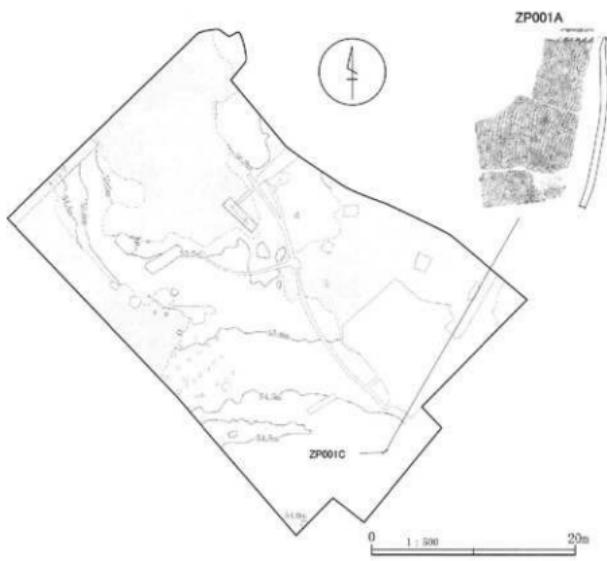
表 II-3 擦文文化期包含層出土土器属性表

排岡番号	図版番号	個体名稱	分類	グリッド	層位	点数	器種	部位	器面調整		備考
									内側	外側	
II-1-7	8-1-7	SP001A VIIA	B地区	表探	1	1	壺	口縁部	ヘラナデ	ヘラナデ・円形刺突文	
II-1-8	8-1-8	SP002A VIIBia	O-7	IIIbl	1	1	壺	口縁～胸部	ヘラナデ(粗い)	ヘラナデ	口唇に凹線

表 II-4 続縄文文化期包含層出土剥片石器属性表

排岡番号	図版番号	個体名稱	遺物番号	遺物名	分類	グリッド	層位	計測値(mm)			材質	備考
								長軸	短軸	厚さ		
II-1-9	8-1-9	-	4787	ポイント	A2	P-5	IIIc	43.3	17.0	4.1	2.7	Obs.

A地区



B地区

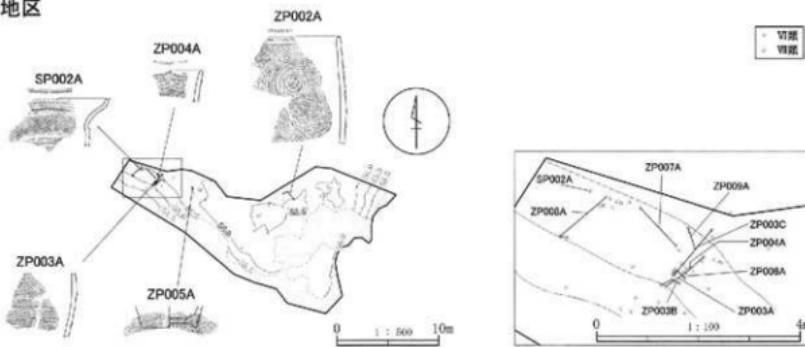


図 II-2 繩縄文・擦文文化期土器接合関係図

第Ⅲ章 縄文時代の調査

V層の調査は、A地区では重機による搅乱土・Ta-c 火山灰(IV層)の除去を行ったが、V層上面から多数の遺物が出土したためIV層を3cm前後残し、V層上面まではジョレンを用いた人力による清掃作業を行った。遺物取り上げは、土器、石器は全点出土地点記録とし、フレイク・チップ、礫に関しては出土地点記録を行わず4分割の中グリッド及び層位単位での取り上げを行った。B地区ではⅢ層調査終了後、人力によるIV層除去作業を行いV層の遺構遺物調査を行った。

検出した遺構はTピット7基、土坑3基、遺物集中が10カ所である。このうち、Tピット2基、土坑1基がB地区からで、残りはA地区で検出された。

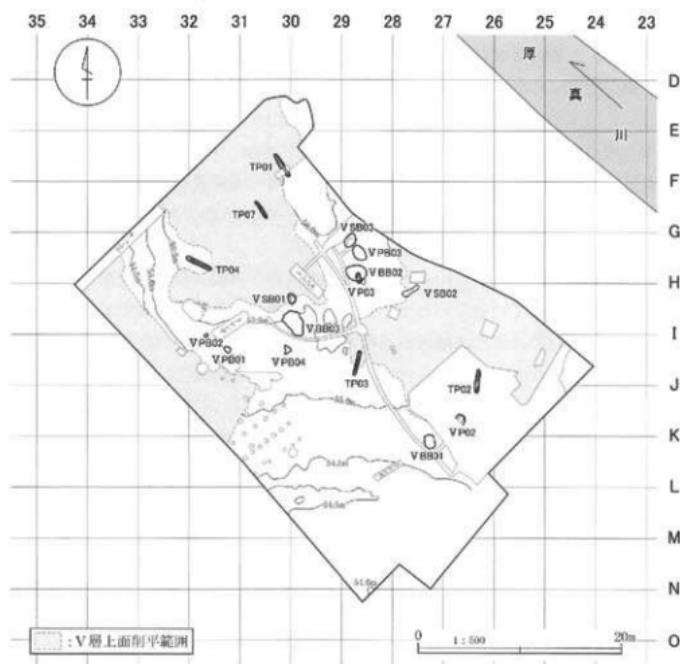
遺物はほとんどがA地区からの出土である。A地区からは縄文早期～晚期、B地区からは縄文中期～晚期の土器が出土しているが、ともにその主体は縄文時代後期末葉である。石器は黒曜石製の石鏃が多く出土している。またA地区的遺物密集区域では焼骨片が散在し、特に密度の濃い範囲を焼骨片集中とし土壤サンプルの採取を行った。それ以外の各調査区においても、随時サンプルの採取を行った。フローテーション処理の結果、イノシシの焼骨片(G-28区Vb層上位)やクリ子葉(1-30区Vb層上位)などの野生種炭化種子が確認された(第Ⅳ章第3節、第4節参照)。

(岩橋)

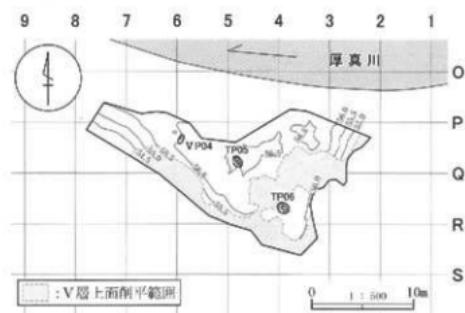
表Ⅲ-1 V層地区別検出遺構・遺物一覧表

項目	A地区	B地区	搅乱他	合計	備考
遺構					
Tピット	5	2	-	7	
土坑	2	1	-	3	
土器集中	4	0	-	4	
石器集中	3	0	-	3	
焼骨集中	3	0	-	3	
遺物					
土器	16,374	278	425	17,077	
剥片石器	826	11	72	909	
黒曜石器	241	17	5	263	
土製品	7	0	0	7	
石製品	0	1	0	1	
骨角器	2	0	1	3	
剥片	18,774	86	19	18,879	
礫	3,805	142	81	4,028	
遺物総点数	40,029	535	603	41,167	

A地区



B地区



図III-1 縄文時代遺構配置図

第1節 Tピット（図III-2・3 図版3～4-1・2）

A地区で5基、B地区で2基の合計7基を検出した。ここでは形態、堆積状況、分布と配列等について項目ごとにまとめて記載を行い、個別の記載は特筆すべき例を除き行わないので、個々の図・表を参照されたい。

検出及び調査

Tピットの検出は、VI層もしくはシルト層上面において黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。調査は検出面長軸の中間付近で、長軸に直交する位置にセクションラインを設定し、半截後、堆積状態の撮影・実測を行った。実測終了後残り半分を調査し、完掘平面形の撮影・実測及びエレベーションの実測を行った。また、坑底面で杭穴を検出したものは同様の手順で調査を行っている。

形態分類

Tピットの形態分類は、坑底面平面形の長短比及び杭穴の有無を基準とする『苫小牧東部工業地帯の遺跡群II』（苫小牧埋蔵文化財調査センター 1987）での分類案を基に、長短比数値に若干の変更を加えた厚幌1遺跡（厚真町教育委員会 2004）での分類に従い、細分を含め7タイプに分けた。

A型：長短比が8以上で、長さに比して幅が狭い溝状のタイプ。

A1型 長軸が2m以上のもの A2型 長軸が2m未満のもの

B型：長短比が4以上、8未満のもので、長楕円のタイプ

B1型 杭穴がないもの B2型 杭穴があるもの

C型：長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近いタイプ。

C1型 杭穴がないもの C2型 杭穴があるもの

D型：長さ1m、幅0.2m前後で、かつ深さが0.5m以下のタイプ

形態

Tピットの形態はA地区とB地区で大きな違いがある。A地区ではA1型4基、A2型1基と5基全てがA型であったが、B地区では検出された2基ともC2型であった。この差については構築時期が異なるという時期差が考えられる。

堆積状況

Tピットの堆積状況は、基本的に覆土上位にV層の自然堆積層、覆土中位～下位にTピット壁面の崩落層が堆積しており、多くの例で坑底部に厚さ数cmの黒色土の堆積を確認した。今回調査したTピット中、TP-06のみ洪水堆積シルトが覆土上位に確認されたが、B地区ではこの付近以外に洪水シルト層は検出されず、A地区で検出された洪水シルト層との時期に対応するかは不明である。

分布と配列

検出数が7基と少ないため、明確に列をなすとは言い難いが、A地区北西側にTP-01・07・04が、東側にTP-03・02が長軸方向を揃えて並んでいるように見える。これらは、等高線に直交するようにも見えるが、旧河道に並行しているとも考えられる。

新旧関係

今回検出したTピットで重複関係のものはないため、形態変遷を類推する新旧関係や構築時期を推察するデータは得られていない。

個別記載

TP-02(A1型) (図III-2 図版3-3・4)

グリッド：I・J-24区 検出層位：VI層 平面形：長楕円形

確認面規模：(233)×(52)cm 坑底面規模：220×18cm 深さ：73cm 長軸方向：N-5° E

旧住宅基礎の搅乱層除去後、VI層上面において溝状のV層落ち込みを検出した。遺構上部及び東側は搅乱により大きく欠損しているものと考えられる。

TP-03(A1型) (図III-2 図版3-5・6)

グリッド：I-28区 検出層位：VI層 平面形：長楕円形

確認面規模：246×35cm 坑底面規模：233×18cm 深さ：(44)cm 長軸方向：N-2° E

深さが44cmと浅い。これは宅地造成もしくは畜舎建築に係る工事の結果、遺構上部が削平されたものと考えられる。

表III-2 Tピット計測一覧表

探査番号	図版番号	造構名	分類	平面形		グリッド	調査面層位	調査面規模(cm) 坑底面規模(cm)				深さ(cm)	長軸方向	杭跡	重複	長調査面比	長坑底比面
				調査面	坑底面			長軸	短軸	長軸	短軸						
III-2	3-1-2	TP-01	A1	長楕円形/ 長楕円形		E-30	VI	265	(51)	240	18	105	N-33°W	-	-	(5.19)	13.33
III-2	3-3-4	TP-02	A1	長楕円形/ 長楕円形		I-J-24	VI	(233)	(52)	220	18	73	N-5°E	-	-	(4.48)	12.22
III-2	3-5-6	TP-03	A1	長楕円形/ 長楕円形		I-28	VI	246	35	233	18	(44)	N-2°E	-	-	7.02	12.94
III-2	3-7-8	TP-04	A1	長楕円形/ 長楕円形		G-31- 32	VI	279	46	226	18	98	N-63°W	-	-	6.06	12.56
III-3	3-9- 10	TP-05	C2	楕円形/ 長楕円形		P-4	VI	116	80	90	25	75	N-34°W	2	-	1.45	3.60
III-3	3-11- 12	TP-06	C2	楕円形/ 楕円形		Q-3-4	VI	122	101	66	32	117	N-55°W	3	-	1.21	2.06
III-3	4-1-2	TP-07	A2	長楕円形/ 長楕円形		F-30	VI	200	37	192	16	65	N-34°W	-	-	5.41	12.00

表III-3 Tピット逆茂木跡属性表

探査番号	図版番号	造構名	グリッド	平面形		規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				調査面	坑底	上端	下端	深さ			
III-3	-	TP-05	KP01	P-4	円形/-	8	1	22	6	打込み	
			KP02	P-4	円形/-	7	1	19	20	打込み	
III-3	-	TP-06	KP01	Q-3	円形/-	3	1	12	2	打込み	
			KP02	Q-3	円形/-	4	1	14	7	打込み	
			KP03	Q-3	円形/-	4	1	19	5	打込み	

TP-05(C2型) (図版3-9・10)

グリッド:P-4区 検出層位: VI層上面 平面形: 楕円形

確認面規模: 116×80cm 坑底面規模: 90×25cm 深さ: 75cm 長軸方向: N-34° W

B地区土層断面トレンチ掘削中、VI層上面で半円形のV層の落ち込みを検出した。その形状からTピットと判断し、B地区土層断面に沿ってトレンチを掘削したところ、Vb層を構築面とするTピットであると確認した。その後完掘したところ、坑底面に2ヵ所の逆茂木跡を検出、トレンチを掘削し杭跡先端も含めた状態での堆積状態確認を行った。

出土遺物(図版3-4-1・2 図版8-2-10・11): 土器4点、フレイク・チップ3点、礫2点が出土した。土器片2点を掲載した。1・2はIV群A1類a種の深鉢形土器の同一個体片である。1はQ-4区出土、2はP-4区出土土器片と接合した。底径110mm、平底で器厚が8~12mmと厚く、地文にRL斜行縄文が施される。胎土に砂粒及び石英結晶を多量、微量の雲母を含むことから富良野盆地系土器と考えられる。富良野市市内の出土土器にも多く見られる特徴であるが、砂粒を極多量に含むため器表面はクラックが生じ、摩滅していく特徴も共通している。P・Q-4・5区からは同一個体片が16点出土している。

TP-06(C2型) (図版3-11・12)

グリッド: Q-3・4区 検出層位: VI層上面 平面形: 楕円形

確認面規模: 122×101cm 坑底面規模: 66×32cm 深さ: 117cm 長軸方向: N-55° W

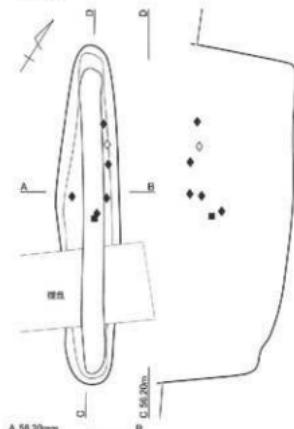
B地区南東部には、他の部分では認められない洪水堆積シルト層が、V層の上位に存在していた。この範囲を調査中VI層上位において、V層と洪水シルト層が同心円状になった楕円形の落ち込みを検出した。坑底面からは逆茂木跡が3ヵ所検出され、これらは、粘土質シルトを穿ち下位にある礫層上部まで打ち込まれていた。

出土遺物(図版3-4-3~6 図版8-2-12~15): 土器26点、ポイント類2点、RF1点、石斧3点、フレイク・チップ18点、礫4点が出土した。土器片2点、ポイント類1点、石斧1点を掲載した。3・4はIII群B3類a種の同一個体片で、胎土には砂粒と微量の繊維を含む。3は口縁部が断面三角形状に肥厚し、口唇直下に半截竹管状工具による浅い押引文が施文されている。肥厚帯下には棒状工具による円形刺突文が施文されている。4は無節Rの斜行縄文が施されている。

5は黒曜石製の石槍で、基端部がやや丸みを帯びており、最大径は長軸ほぼ中央部にある。縁辺部に微細剥離がみられず、二次的な調整は施されていない。6は緑色泥岩製の石斧未完成品で、Q-3区出土破片と接合した。転礫面を多く残し、研磨調整痕はみられない。左側面に剥離調整後の敲打調整がほぼ全面にわたって施され、右側縁には素材礫の棱の一部に敲打痕が残る。やや幅広の棒状礫を素材とし、石斧形状の角柱ないしは短冊形を石斧完成の最終形態として剥離・敲打調整が施されていたと思われる。

(岩橋 服部: 石器・TP-05・TP-06)

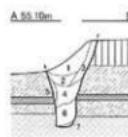
TP-01



TP-01

1. 16Y94/4 棕色 シルト-Vb(厚状 φ5.1) +
2. 16Y92/7 黒褐色 Vb=シルト(厚状 φ10.1)
3. 16Y94/2 にぶい黄褐色 シルト-Vb(厚状 φ10.1)
4. 16Y93/3 暗褐色 Vb=シルト(厚状 φ30.1)=粘土(厚状 φ8.1)
5. 16Y92/2 黒褐色
6. 16Y93/2 暗褐色 Vb=粘土(厚状 φ20.1)
7. 16Y96/3 にぶい黄褐色 シルト=粘土(厚状 φ10.1)=シルト(厚状 φ30)
8. 16Y95/2 黄褐色 シルト=粘土質シルト(厚状 φ20.1)=Vb(厚状 φ5)
9. 16Y93/2 黄褐色
10. 16Y93/2 黑褐色 Vb=粘土質シルト(厚状 φ20.1)=シルト(厚状 φ10.1)

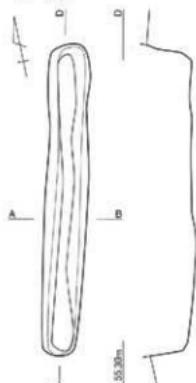
TP-02



TP-02

1. 16Y95/4 にぶい黄褐色 Vb+シルト(厚状 φ20~40)
=Vb(厚状 φ10.1)
2. 16Y92/2 黒褐色 Vb=Vc(厚状 φ50.1)
3. 7.5Y94/6 棕色 シルト-Vb(厚状 φ30.1)
4. 16Y92/3 暗褐色 シルト-Vc(厚)-
5. 16Y91/3 にぶい黄褐色 シルト-Vc(厚状 φ5.1)
シルト=粘土(厚状 φ20.1)
6. 16Y91/4 棕色
7. 16Y94/2 黄褐色 粘土=砂質シルト(厚)-

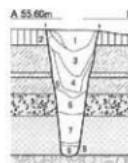
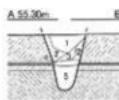
TP-03



TP-03

1. 16Y92/2 黒褐色 Vb=上位シルト(厚)-
2. 16Y93/4 にぶい黄褐色 上位シルト-Vb(厚状 φ30.1)
3. 16Y93/3 暗褐色 Vb=上位シルト(厚)-
4. 16Y92/2 黑褐色 Vb=上位シルト(厚状 φ30.1)
5. 16Y95/4 にぶい黄褐色 シルト-Vb(厚状 φ10.1)
=Vb(厚状 φ10.1)

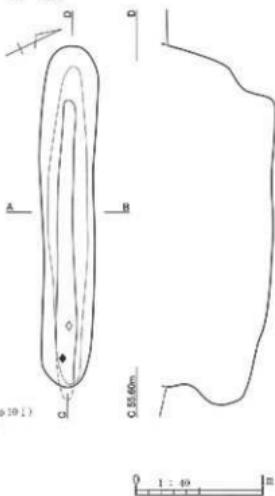
※下位シルトは上位シルトと同質だが色調がぬい。



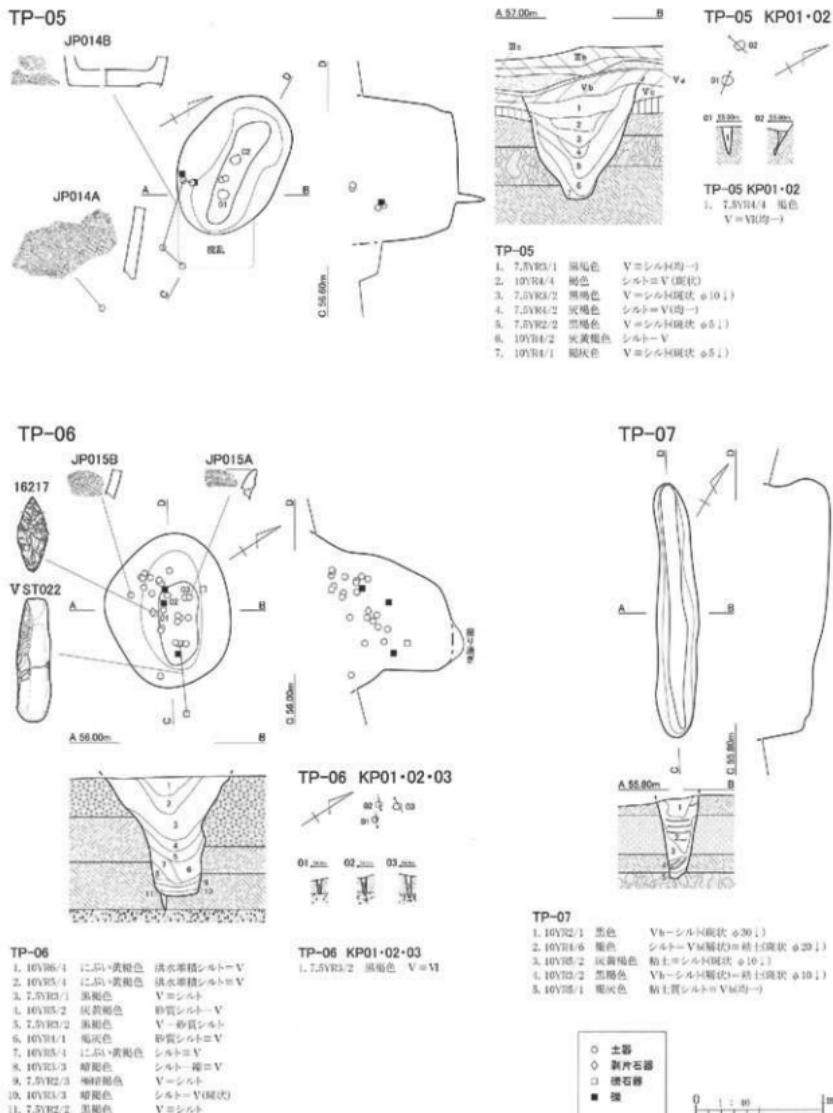
TP-04

1. 16Y92/1 棕色 Vb=シルト(厚状 φ20.1)
2. 16Y93/2 黒褐色 Vb=シルト(厚)-
3. 16Y93/3 暗褐色 シルト=Vc(厚)-
4. 16Y95/3 にぶい黄褐色 シルト=Vb(厚状 φ40.1)
シルト=粘土(厚状 φ10.1)
5. 16Y96/4 にぶい黄褐色
6. 16Y91/3 にぶい黄褐色 粘土=粘土(厚)=シルト(厚状 φ10.1)
7. 16Y93/4 暗褐色
8. 16Y95/2 黄褐色 粘土=Vb(厚状 φ10.1)
9. 16Y93/2 黑褐色
※=粘土(厚状 φ20.1)

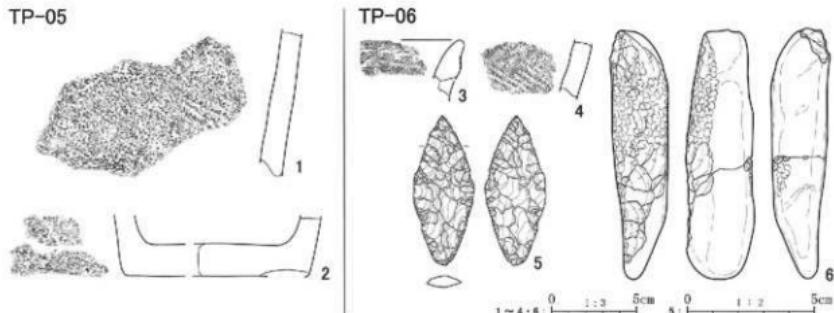
TP-04



図III-2 TP-01 ~ 04 平面及び断面図



図III-3 TP-05～07 平面及び断面図



図III-4 TP-05・06出土遺物

表III-4 TP-05・06出土土器属性表

査区番号	団版番号	調査体名称	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	部位	器形等		文様	埴土	備考
								口縁-口唇-肩部/底側面-愛換点-底面	肩部-口唇-内面/肩部-内面/底側面-底面-内面			
III-4-1	8-2-10	JP014A	IVAla	Q-4	VbU	1	肩部	外傾		PL斜行繩文	砂粒中量 石英多量	富良野盆地系
III-4-2	8-2-11	JP014B	IVAla	TP-05 P-4	1 VbU	2	底部	直立-隅丸角状-平底		摩耗著しい	砂礫中量	富良野盆地系
III-4-3	8-2-12	JP015A	IIIB3a	TP-06	1	1	口縁部	平縁-直立-丸状		ヘラ状工具による浅い 押引文(横)-棒状工具による円形刺突文	砂礫中量 繊維微量	内面摩耗著しい
III-4-4	8-2-13	JP015B	IIIB3a	TP-06	1	1	肩部下部	外傾		R斜行繩文	砂礫中量	繊維微量

表III-5 TP-06出土石器属性表

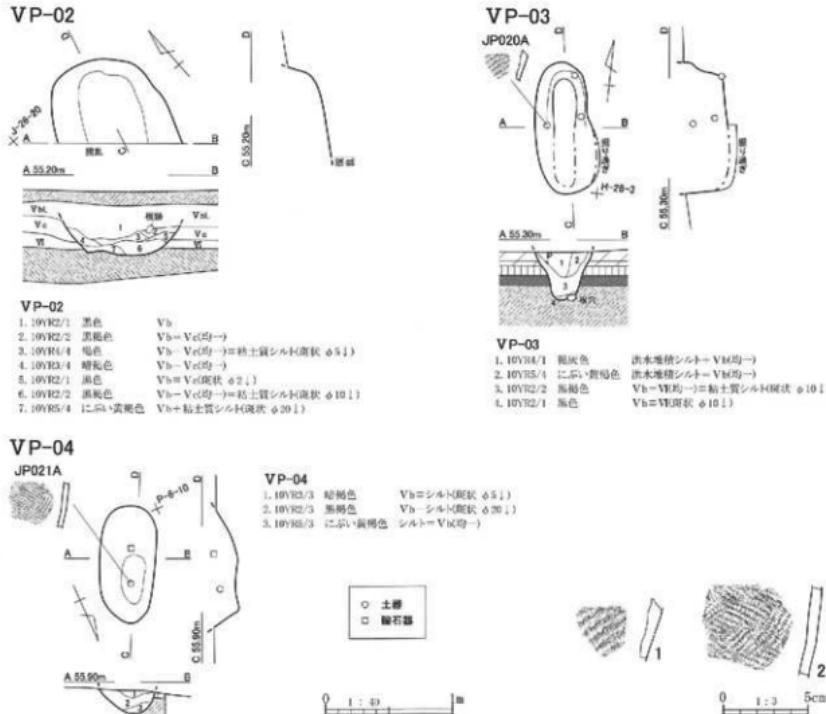
査区番号	団版番号	調査体名称	遺物番号	遺物名	分類	遺構名/グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-4-5	8-2-14	-	16217	ポイント	B2	TP-06	1	58.4	24.3	6.2	7.4	Obs.	
III-4-6	8-2-15	VST022 /9480	16214 石斧	B	TP-06/ Q-3	5/ VbU	146.0	42.5	36.0	310.0	Gr-Mtd.	未成品	

第2節 土坑

A地区から2基、B地区から1基の計3基を検出した。以下で個別に記載する。なおVP-01は精査の結果、風倒木痕であると判断し、欠番とした。

表III-6 繩文時代土坑属性表

査区番号	団版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形		調査面規塊(cm)/坑底面規塊(cm)				深さ(cm)	長軸	長軸 方向	長軸 短軸 比率	長坑 底面 比率	出土 遺物	備考
					調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸	長軸							
III-5 4-4-5	VP-02	J-26	Vc	-		(92)	(71)	(63)	(26)	34	N-48°E	-	-	-	-		
III-5 4-6-7	VP-03	G-28	Vb	長椭円形/構造	104	49	(84)	19	35	N-13°W	2.1	(4.4)	IVAla				
III-5 4-8-9	VP-04	P-5	V1	椭円形/構造	93	45	38	19	19	N-27°E	2.1	2.0	IVD1				



図III-5 VP-02～04 平面及び断面図・出土遺物

表III-7 VP-03・04出土器属性表

探査番号	図版番号	調査名	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	部位	器形等		文様	胎土	備考
								口縁	口縁・脇部/底側面・変換点・底面			
III-5-1	8-2-16	JP020A	IVa1a	VP-03	3	1	脇部	外傾	LR斜行網文	砂粒中量	内面剥落	
III-5-2	8-2-17	JP021A	IVD1	VP-04	1	1	脇部	外傾	2段異原体羽状網文-ヘラミガキ(横)	砂粒少量		

VP-02 (図III-5 図版4-4・5)

A地区J-26区で検出した。旧住宅基礎の搅乱土除去後、壁面にてV層の落ち込みを確認した。このため、Vb層下位の調査後Vc層上面を精査したところ、半円形の黒色土の落ち込みを検出した。搅乱により南西側が大きく欠損しているが、平面形は隅丸方形もしくは橢円形を呈し、壁面は短軸方向では緩やかに、長軸方向では急角度で立ち上がる。遺物は出土していない。

VP-03 (図III-5 図版4-6・7)

A地区のG-28区で検出した。VBB-02調査終了後、Vb層精査中に長円形の黄褐色の洪水シルトの落ち込みを確認した。落ち込み中央を短軸方向で半截したところ、壁面は上部で開くが直線的に急角度で立ち上がり、坑底面も平坦であることから土坑と判断した。平面形は確認面では長楕円形だが、坑底面は溝状である。堆積状態の観察から開口部付近、壁面上位の崩落により、確認面の幅が広がったと考えられ、本来は溝状の遺構であった可能性が高い。

出土遺物(図III-5-1 図版8-2-16)：土器3点が出土した。土器片1点を掲載した。1はIV群A1類a種土器の胴部片である。LR斜行繩文が施文され、内面は剥落している。胎土は砂粒を多量に含む。出土状況から流れ込みと考えられる。未掲載の2点はIII群B2類の土器片である。壁面崩落時に落ち込んだものと考えられる。

VP-04 (図III-5 図版4-8・9)

B地区のP-5区で検出した。VI層上面で楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。中央部を短軸方向で半截したところ、壁の立ち上がりを確認したので、人為的なものである可能性を考え、半截面に合わせて北東側にトレンチを設けた。地山と覆土の境界が明瞭であることから土坑と判断した。

出土遺物(図III-5-2 図版8-2-17)：土器1点、礫1点が出土した。2はIV群D1類土器の胴部片である。羽状繩文が施文され、内面は横方向のミガキ調整が認められる。

(岩橋 服部：石器)

第3節 集中遺物**1. 土器集中**

土器集中は4ヵ所検出された。全てA地区V層からである。III群B1類が2ヵ所(VPB-03・04)、IV群D1類が2ヵ所(VPB-01・02)である。

VPB-01 (図III-6 図版5-1)

位置：I-31区 層位：Vb層上位

平面形：不整形 規模：64×58cm 出土点数：20点

確認・調査：Vb層上位調査中に土器のまとまりを確認したため、土器を残し周りを洪水シルト層上面まで下げた。この時点で撮影・微細図の作成を行った。3個体の土器片から構成されている。

出土遺物(図III-7-1・2 図版8-3-18・19)：1・2はIV群D1類の深鉢土器である。口縁は小波状を呈し、RL斜行繩文施文後にIO突瘤文が施される。未掲載の個体も含め3個体出土しており、いずれも三ツ谷式土器に相当する。

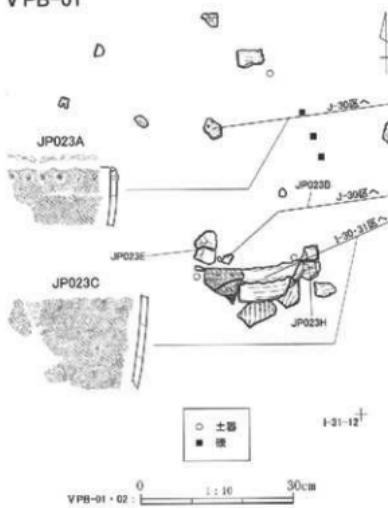
VPB-02 (図III-6 図版5-2)

位置：H-I-31区 層位：Vb層上位

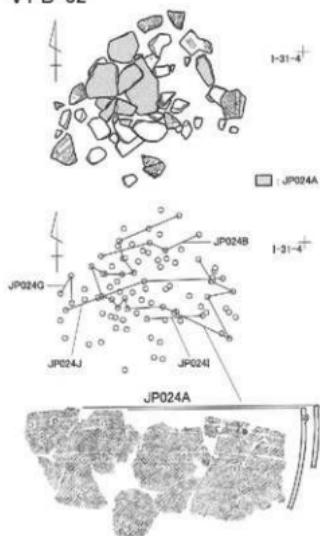
平面形：不整形 規模：38×30cm 出土点数：102点

確認・調査：Vb層上位調査中に土器のまとまりを確認した。土器片を残し周りを洪水シルト層上面まで下げ、範囲確認後に撮影・微細図の作成を行った。土器片は全て同一個体片で構成されている。

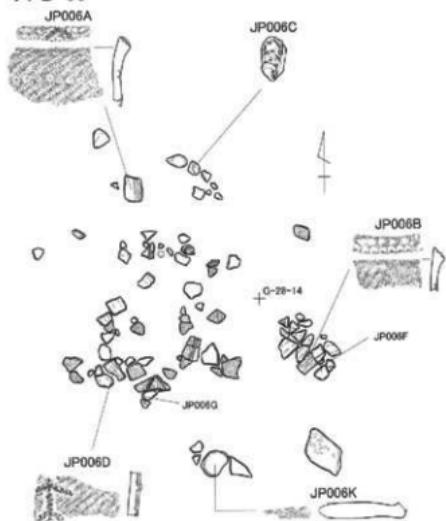
VPB-01



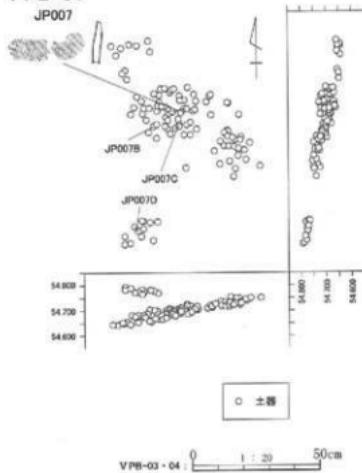
VPB-02



VPB-03



VPB-04



図III-6 VPB-01～04 平面図

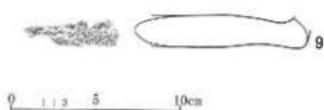
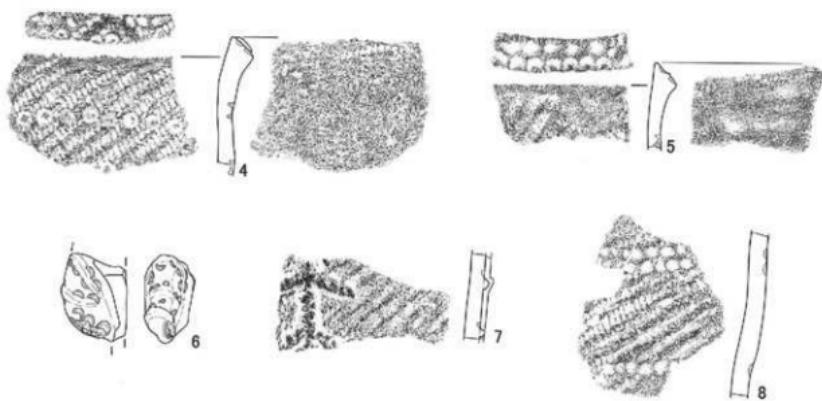
VPB-01



VPB-02



VPB-03



VPB-04



図III-7 VPB 出土遺物

出土遺物（図III-7-3 図版8-3-20）：3はIV群D1類の深鉢土器である。口縁は平縁で小突起が作り出され、その頂部に棒状工具による刻みが施される。接合した小突起片は1点であるが、他に2点出土しており、復元の結果、小突起は6ヵ所であると推定した。LR斜行繩文の上から浅い横走沈線が4条描かれ、IO突瘤文が施される。三ツ谷式土器に相当する。

VPB-03 (図III-6 図版5-3)

位置: G-28 区 層位: Vb層下位

平面形: 不整形 規模: 165×111cm 出土点数: 83点

確認・調査: Vb層下位調査中に土器のまとまりを確認したため、土器を残し調査を進め、範囲が確定した段階で撮影・微細図の作成を行った。土器片は全て同一個体片で構成されている。

出土遺物（図III-7-4～9 図版9-1-1～6）：4～9は同一個体でIII群B1類の深鉢土器である。口縁は緩やかな波状を呈すると考えられる。口唇は断面三角形状に肥厚し、器面側に竹管文を半円形状に刺突施し、内面側に竹管状工具による押引文が施される。半截竹管による刺突文で縁取られた弧状の貼付文がある。これは7に見られる垂下する貼付においても同様である。外面にはLR斜行繩文が地文として施され、竹管状工具による円形刺突文が2条(4)、左側からの押引文が3条横走する(8)。内面にも口唇直下にLR横走繩文が施される。6はやや太い垂下する貼付帯で、半截竹管による刺突文が施される。底面は平底である。胎土は砂粒を多く混入し、器表面の摩耗が著しい。

表III-8 VPB出土土器属性表

探査番号	図版番号	個体名	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	部位	器形等		文様	胎土	備考
								口縁	口唇/胴部/底側面	底側面-変換点-底面		
III-7-1	8-3-18	JP023A	IVD1	VPB-01	VbU	1	口縁部	波状・直立・丸状	口縁-口縁-内面/胴部-内面/底側面-底面-内面	刻み-RL斜行繩文+IO突瘤-ミガキ(横)	砂粒少量	
				I-30	搅乱	1						
III-7-2	8-3-19	JP023C	IVD1	VPB-01	VbU	1	胴部	外傾	RL斜行繩文-ミガキ(横)	砂粒中量		
				J-30	搅乱	1						
III-7-3	8-3-20	JP024A	IVD1	VPB-02	VbU	18	口縁 ～胴部	平縁・突起・直立・隅丸 角状・外傾	ミガキ・刻み(突起部)- LR斜行繩文・横走沈線 文+IO突瘤-ミガキ(横)/LR斜行繩文	砂粒少量	補修孔	
				I-31		1						
III-7-4	9-1-1	JP006A	III B1	VPB-03	VbL	1	口縁 ～胴部	平縁・突起・外反-断面 三角状に肥厚/やや内 傾	半円形貼付・竹管状工 具による押引文(横)・竹 管文・半截竹管文-LR 斜行繩文・竹管文-LR 横行繩文/LR斜行繩文	砂粒多量		
III-7-5	9-1-2	JP006B	III B1	VPB-03	VbL	1	口縁部	波状?-・突起・外反- 断面三角状に肥厚	竹管状工具による押 引文(横)・竹管文-LR 斜行繩文・竹管文-LR 横行繩文	砂粒多量		
III-7-6	9-1-3	JP006C	III B1	G-28	VbL	1	貼付	直立	半截竹管文	砂粒多量		
III-7-7	9-1-4	JP006D	III B1	VPB-03	VbL	1	胴部	やや外傾	LR斜行繩文・貼付・ 半截竹管文	砂粒多量		
III-7-8	9-1-5	JP006E	III B1	G-28	VbL	1	胴部	やや外傾	LR斜行繩文・竹管状工 具による押引文(横)	砂粒多量		
III-7-9	9-1-6	JP006K	III B1	VPB-03	VbL	1	底部	外傾-丸状-平底	摩耗著しい	砂粒多量		
III-7-10	9-1-7	JP007A	III B1	VPB-04	Vc	2	胴部	やや外傾	RL斜行繩文-ミガキ	砂粒多量		

VPB-04 (図III-6 図版5-4)

位置 : I-30 区 層位 : Vc層

平面形 : 不整形 規模:76×84cm 出土点数 : 173点

確認・調査:洪水シルト層直下のVc層調査中に土器のまとまりを確認した。洪水時期の特定を図るために、ベルトを残しトレンチを基盤シルト層まで入れ調査を始めた。周囲を広く下げ終わった時点で、撮影を行い、遺物が小片の為微細図は作成せず遺物取り上げを行った。検出地点は高位部にある浅い流路内の南岸付近に存するため、北西側に流れ込んだ状況で出土した。土器片は全て同一個体片で構成されている。

出土遺物 (図III-7-10 図版9-1-7) : 10はⅢ群B1類深鉢土器の胴部片である。RL斜行縄文が施され、内面にはミガキ調整が施される。胎土には纖維が多く混入し、やや脆く崩れやすい。

(岩橋)

2. 磚集中

磚集中は3ヵ所検出された。全てA地区V層からである。

VSB-01 (図III-8 図版5-5・6)

位置 : H-29・30 区 層位 : Vb層上位

平面形 : 不整形 規模:98×88cm 出土点数 : 167点

確認・調査:Vb層上位調査中に、被熱磚のまとまりを確認し、調査を進めたところ、被熱磚の周囲に僅かに色調の異なる土層の落ち込みを確認した。この時点での撮影・微細図作成を行った。また、土坑である可能性も想定し東側を半截し土層断面を確認したところ、皿状にくぼんではいるが、洪水シルト層を掘り込みます壁面の境界も不明瞭であることから土坑ではないと判断した。

出土遺物 (図III-9-1~3 図版9-2-8~10) : 出土点数は167点、内訳は土器56点、剥片石器3点、磚石器17点、フレイク・チップ43点、磚48点である。土器は全てIV群D1類のものである。また被熱したものは磚石器7点、フレイク・チップ1点、磚19点であった。1は黒曜石製の石鏃で、細かい剥離が連続しており、精緻な造りである。球果が多く入り赤井川産黒曜石と考えられる。2はたたき石で、弱い敲打がなされる。810.0gとやや重いにもかかわらず敲打が弱いため、台石として使用された可能性がある。3は砂岩製の7kgを超す大型の石皿で、被熱している。節理面に沿って直線状に割れており、8点が接合する。使用面は素材磚の形状からほとんど変化しておらず、皮や植物など柔らかい有機質物質が対象であったと推定される。

VSB-02 (図III-8 図版5-7)

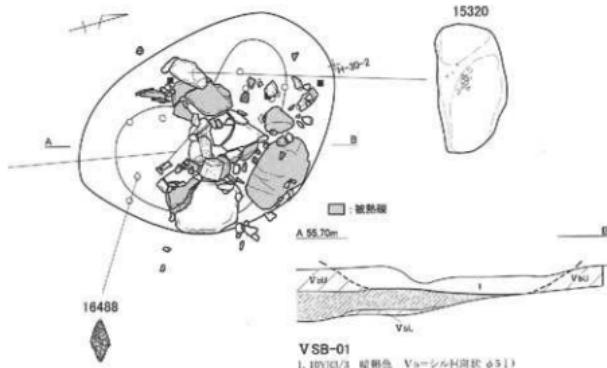
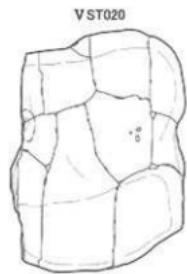
位置 : H-27 区 層位 : Vb層下位

平面形 : 不整形 規模:174×57cm 出土点数 : 100点

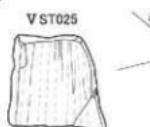
確認・調査:Vb層下位調査中に、被熱磚のまとまりを確認したため、洪水シルト層まで周りを掘り下げ範囲確認を行った。この時点での撮影・微細図作成を行った。

出土遺物 (図III-9-4 図版9-2-11) : 出土点数は100点、内訳は磚石器3点、磚97点、その内被熱したものは磚石器1点、磚87点である。4は砂岩製の砥石で、片面のみの使用である。VSB-03

VSB-01



VSB-02

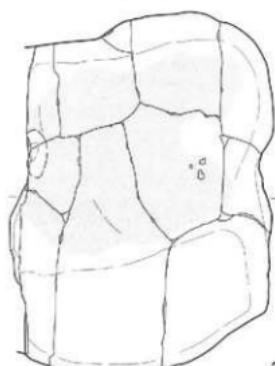
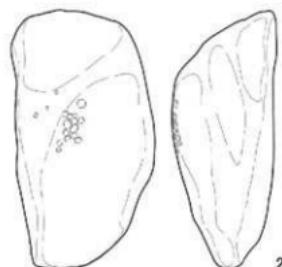
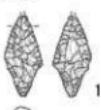


VSB-03

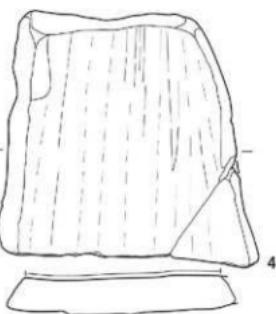


図III-8 VSB-01～03 平面及び断面図

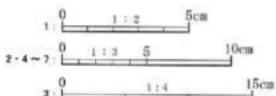
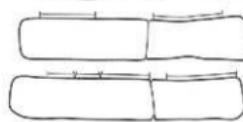
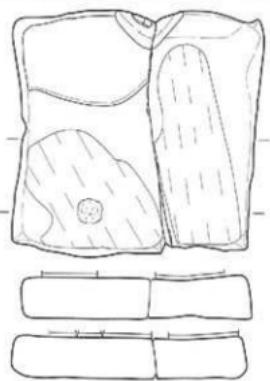
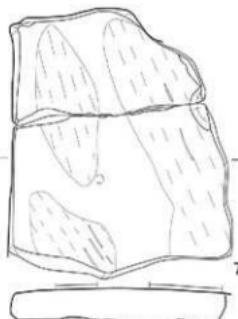
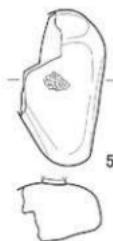
V SB-01



V SB-02



V SB-03



図III-9 V SB 出土遺物

出土の砥石と接合することから、この両遺構は同時期に形成された可能性が高い。それぞれの性格は不明であるが、VSB-02は被熱した礫が多く、VSB-03出土の遺物には被熱が認められず、また砥石が多いことから何らかの作業分担などがなされていたと思われる。

VSB-03 (図III-8 図版5-8)

位置: G-28 区 層位: Vb 層下位

平面形: 不整形 規模: 142×104cm 出土点数: 16点

確認・調査: Vb 層下位調査中に、礫石器のまとまりを確認したため洪水シルト層まで周りを掘り下げ範囲確認を行った。この時点で、撮影・微細図作成を行った。

出土遺物 (図III-9-5~7 図版9-2-12~14): 出土点数は16点、内訳は礫石器4点、礫12点である。被熱したものは認められなかった。5はたたき石の欠損品である。中央部に浅い敲打痕が見られる。6・7は砥石で、両者ともほぼ同じ大きさの板状礫であり、複数の砥面がある。礫素材にしては柔らかく、廃棄時ではなく後世に加えられた圧力で破断されたと考えられる点でも共通している。

(岩橋 服部: 石器)

表III-9 VSB出土石器属性表

発掘 番号	区段 番号	鉢体 名称	遺物番号	遺物名	分類	遺構名/ グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-9-1	9-2-8	-	16488	ポイント	A3	VSB-01	VbU	(31.6)	14.5	4.9	(1.6)	Obs.	
III-9-2	9-2-9	-	15320	たたき石	II	VSB-01	VbU	151.5	88.0	59.5	810.0	Sa.	
III-9-3	9-2-10	VST020	15323他	石皿	II	VSB-01	VbU	281.0	207.0	88.0	7,356.0	Sa.	接
III-9-4	9-2-11	VST025	16805他	砥石	Ia	VSB-02	VbL	156.0	119.0	26.0	740.0	Sa.	接
III-9-5	9-2-12	-	18115	たたき石	IB1	VSB-03	VbL	91.0	(46.0)	36.0	(174.0)	Sa.	
III-9-6	9-2-13	-	18117	砥石	Ia	VSB-03	VbL	150.0	150.0	32.0	863.0	Sa.	
III-9-7	9-2-14	-	18121	砥石	Ia	VSB-03	VbL	159.0	133.0	26.0	611.0	Sa.	

3. 焼骨片集中

焼骨片集中は3ヵ所で全てA地区V層からである。A地区では調査区のほぼ全面に焼骨片が散在している状況で、特に集中度の高い範囲を焼骨片集中とした。また、焼骨片以外の遺物も同様に調査区全面に散在しており、焼骨片集中とした範囲内から出土した遺物は全て焼骨片集中出土遺物として取り扱った。全て土壤サンプルを回収し、フローテーション作業を行っている。

VBB-01 (図III-10 図版6-1・2)

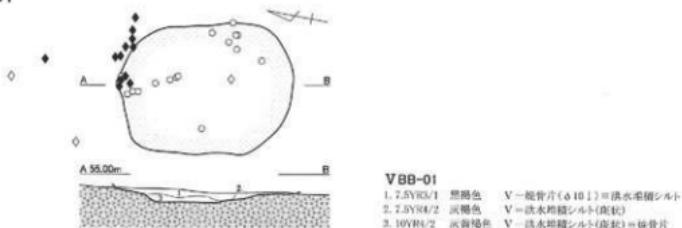
位置: J-K-27 区 層位: Vb 層上位

平面形: 楕円形 規模: 140×104cm 出土遺物点数: 225点

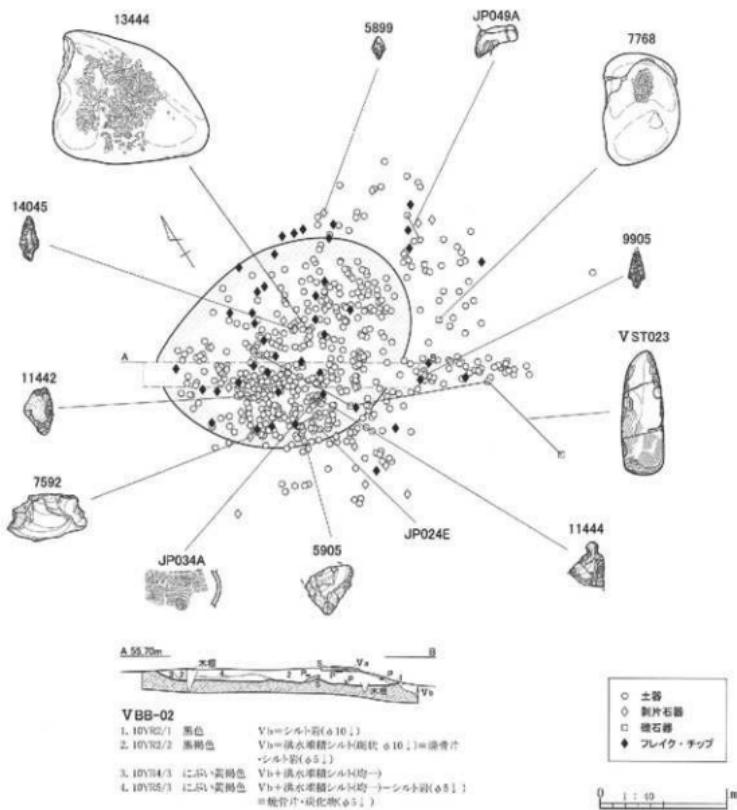
確認・調査: Vb 層上位調査中に、焼骨片の集中を確認した。また、この部分の色調が周囲より暗かったため、土坑の可能性を想定し長軸方向にトレントを設け調査を進めた。土層断面を観察した結果、浅く皿状にくぼんでいるが、壁の立ち上がりはなく、境界も不明瞭であることから土坑ではないと判断した。

出土遺物(図III-12-1 図版10-1): 焼骨片 130.29gが採取された。全て陸棲哺乳綱のものである。他に、土器28点、剥片石器5点、フレイク・チップ192点が出土している。土器は全てIV群D1類

VBB-01



VBB-02



図III-10 VBB-01・02 平面及び断面図

である。またフレイク・チップのうち 18 点が被熱している。1 はメノウ製の石鏃で、基部が不明瞭なことから A4 類に分類した。硬い石材のため左右非対称であるが、連続した剥離が施されており、入念に調整されたことがうかがえる。

VBB-02 (図III-10 図版 6-3~5)

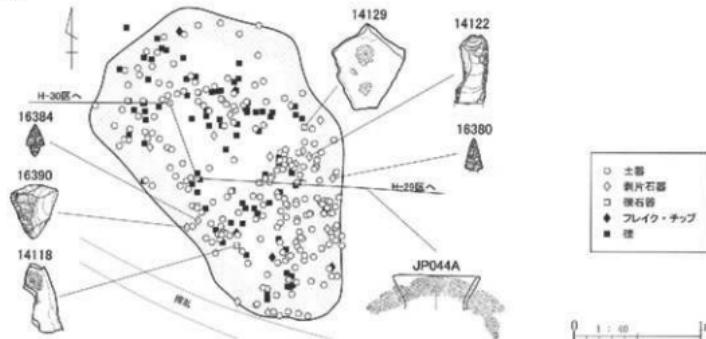
位置: G-28 区 層位: Vb 層上位

平面形: 楕円形 規模: 205×157cm 出土遺物点数: 3,954 点

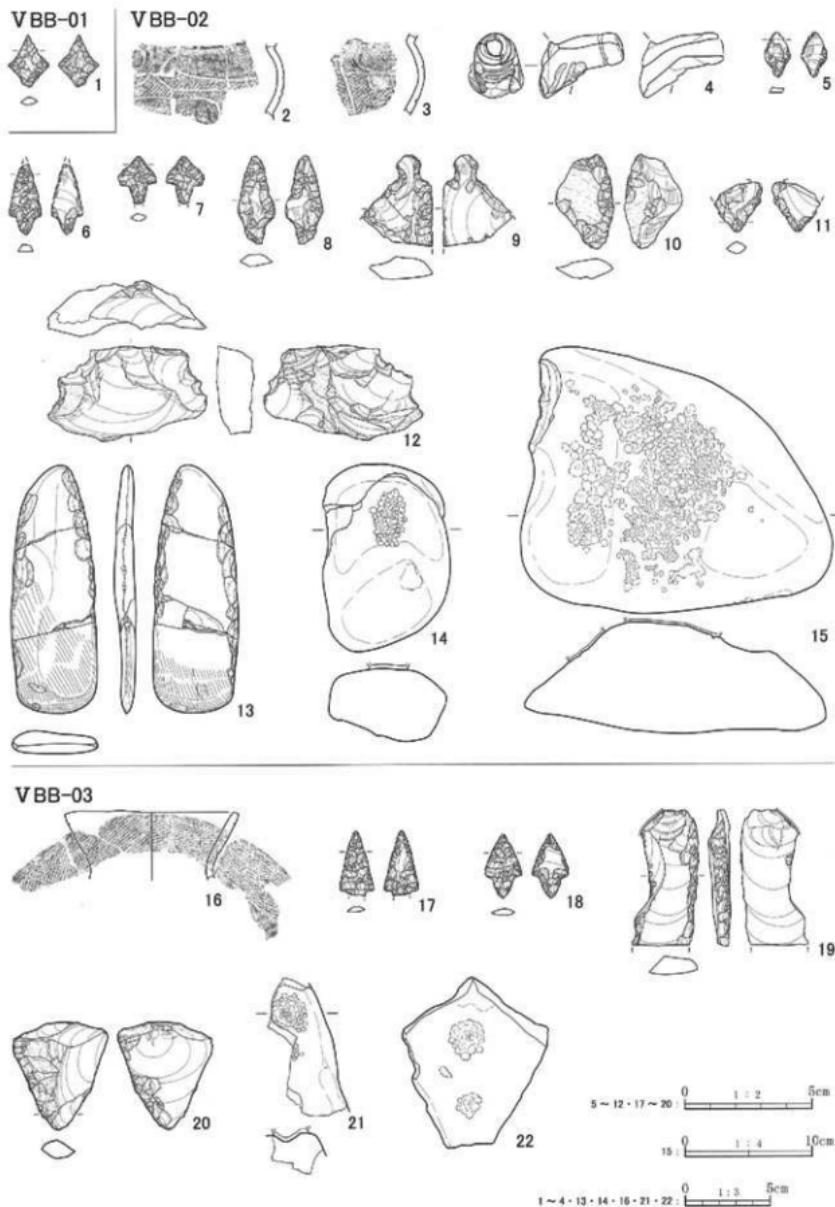
確認・調査: Vb 層上位調査中に、焼骨片の集中を確認した。また、この部分の色調が周囲より暗かったため、土坑の可能性を想定し長軸方向にトレンチを入れ調査を進めた。土層断面を観察した結果、浅い皿状にくぼんでいるが、壁の立ち上がりではなく、境界も不明瞭であることから土坑ではないと判断した。

出土遺物 (図III-12-2~15 図版 10-2~15): 焼骨片 264.24 g が採取された。全て哺乳綱のものである。他に土器片 575 点、剥片石器 57 点、礫石器 6 点、土製品 1 点、フレイク・チップ 3,043 点、礫 272 点が出土している。土器は全て IV 群 D1 類である。また、剥片石器 6 点、礫石器 3 点、フレイク・チップ 118 点、礫 107 点が被熱している。2~4 は IV 群 D1 類の土器片である。2・3 は同一個体片で、壺形土器の胴部片である。ともに H-28 区出土の土器片と接合した。LR 斜行縄文が施され、一部 RL 縄文と羽状構成となっている。沈線文で区画され磨消しが施される。4 は注口部である。先端・中央・基部の 3 つの部分からなる。外面には粗いミガキが施され、貼瘤文がつけられた後、沈線文が描かれている。貼瘤文は正面に向かって左側の 1 カ所しか残存していないが、同様のものが正面に向かって右側に 1 カ所、基部下縁には大きなものが 1 カ所の合計 3 カ所あったと推測される。先端部に描かれる沈線は、下半分に施した後、上半分をかぶせるように描いている。掲載土器は三ツ谷式土器に相当する。石器類は 5~11 は黒曜石製で 12・13 は頁岩製、14・15 は砂岩製である。5~8 は石鏃で明瞭な茎部を持つ。5 は完形の石鏃の中で最も軽く、小さな素材剥片の縁辺の一部に調整を施している。6 は片面調整の完形の石鏃である。7 は鏃身部の角度が鈍角で、相対的に茎部が長く

VBB-03



図III-11 VBB-03 平面図



図III-12 VBB 出土遺物

全長の半分ほどになる。8は調整もかえしの形成も不明瞭な未製品である。作成途中で放棄されたと考えられる。9は片面調整のつまみ付きナイフの欠損品。10はサイド・スクレイバーで、岩碎面が残るが、片面の周縁が調整されている。11はナイフで先端が尖る。両面とも周縁部のみが調整されている。12は厚真川産頁岩の石核。13は石斧で薄い鏃を利用し、先端を研磨したほぼ完形の石斧である。基部の1片が被熱している。14はたたき石で被熱による割れが生じている。敲打痕は浅い。15は台石で、片面に広範囲かつ深い敲打痕がある。

VBB-03 (図III-11 図版7-1-2)

位置: H-29-H-I-30 区 層位: Vb 層上位

平面形: 不整形 模様: 268×173cm 出土遺物点数: 901点

確認・調査: Vb 層上位調査中に、焼骨片の集中を確認した。

表III-10 VBB出土器属性表

種別番号	図版番号	個体名	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	部位	器形等		文様	胎土	備考
								口縁-一口唇/胸部/底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胸部-内面/底側面-底面-内面			
III-12-2	10-2	JP034A	IVD1	H-28 VBB-02	VbU	1 2	胸部	内湾		LR斜行縦文・沈縫文・磨消しミガキ(粗い)	砂礫中量	壺形
III-12-3	10-3	JP034B	IVD1	H-28	VbU	1	胸部	内湾		LR斜行縦文(一部重複により羽状構成)・沈縫文・磨消しミガキ(粗い)	砂礫中量	壺形
III-12-4	10-4	JP049A	IVD1	VBB-02	VbU	2	注口部	—		ミガキ(粗い)・沈縫文・貼縫文	砂粒少量	
III-12-16	10-16	JP044A	IVD1	VBB-03 H-29 H-30	VbU	2 2 2	口縁～平縁・外傾・満丸角状/胸部/内傾			ミガキ・LR斜行縦文・横走沈縫文・ミガキ(横)/ミガキ(横)	砂粒少量	

表III-11 VBB出土石器属性表

種別番号	図版番号	個体名	遺物番号	遺物名	分類	遺構名/グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-12-1	10-1	-	24802	ポイント	A4	VBB-01	VbU	20.0	15.7	3.8	0.9	Aga.	
III-12-5	10-5	-	5899	ポイント	A3	VBB-02	VbU	17.9	9.6	2.5	0.4	Obs.	
III-12-6	10-6	-	9905	ポイント	A3	VBB-02	VbU	(27.5)	12.4	3.6	(1.1)	Obs.	
III-12-7	10-7	-	33130	ポイント	A3	VBB-02	VbU	(18.6)	14.9	3.8	(0.7)	Obs.	
III-12-8	10-8	-	14045	ポイント	C	VBB-02	VbU	(35.0)	9.6	5.3	(2.1)	Obs.	
III-12-9	10-9	-	11444	ナガツバスルブレーブ	A2	VBB-02	VbU	(34.6)	29.8	9.0	(7.8)	Obs.	
III-12-10	10-10	-	11442	ナガツバスルブレーブ	C1	VBB-02	VbU	37.0	22.9	7.1	4.8	Obs.	
III-12-11	10-11	-	5905	ナガツバスルブレーブ	C4	VBB-02	VbU	(21.1)	16.1	7.1	(2.0)	Obs.	
III-12-12	10-12	-	7592	石核	-	VBB-02	VbU	62.4	36.7	22.6	31.6	Sh.	
III-12-13	10-13	VST023	7088他	石斧	A	VBB-02	VbU	146.0	50.0	13.0	132.0	Gr-Mud	一部被熱 接
III-12-14	10-14	-	7768	たたき石	II B1	VBB-02	VbU	109.5	77.5	45.5	380.0	Sa.	被熱
III-12-15	10-15	-	13444	台石	II	VBB-02	VbU	252.0	197.0	90.0	5,350.0	Sa.	
III-12-17	10-17	-	16380	ポイント	A3	VBB-03	VbU	(25.8)	13.5	4.0	(1.0)	Obs.	
III-12-18	10-18	-	16384	ポイント	A3	VBB-03	VbU	25.6	14.6	2.8	0.7	Obs.	
III-12-19	10-19	-	14122	ナガツバスルブレーブ	C1	VBB-03	VbU	(54.7)	23.5	7.9	(11.3)	Obs.	
III-12-20	10-20	-	16390	ナガツバスルブレーブ	C4	VBB-03	VbU	41.6	36.8	13.8	4.5	珪化岩	
III-12-21	10-21	-	14118	たたき石	IV	VBB-03	VbU	(84.0)	(34.5)	(30.0)	(81.0)	Sa.	
III-12-22	10-22	-	14129	たたき石	IV	VBB-03	VbU	92.0	81.5	19.5	141.0	Sa.	被熱

出土遺物(図III-12~16-22 図版10~16-22) : 焼骨片39.52gが採取された。全て哺乳綱のものだが、中にイヌ科の末節骨と思われるもの、シカの中手骨と思われるものがそれぞれ1点確認された。他に土器374点、剥片石器24点、礫石器3点、フレイク・チップ395点、礫105点が出土している。土器は全てIV群D1類である。礫石器2点、フレイク・チップ22点、礫43点が被熱している。16はIV群D1類の壺形土器の口縁～胴部である。口径101mmで平縁、口唇は隅丸角状である。LR斜行縄文を地文とし、口唇直下とくびれ直上に横走沈線文が描かれる。17・18は黒曜石製の有茎石鏃である。鏃身部が高さのある二等辺三角形のもので、このタイプのものはオニキシベ6遺跡で最も出土数が多い。19は片面調整のサイドスクレイパーで、黒曜石製である。20は珪化岩製のナイフで、両端から加工を施し先端を尖らせたものである。21・22は砂岩製のたたき石で、21には深い敲打痕がある。22は完形で礫片を利用したもの。

(岩橋 服部:石器)

第4節 包含層出土遺物

1. 土器(図III-13~15-52 図版11~13-52)・土製品(図III-15-53・54 図版13-53・54)

土器は遺構出土のものも含めて17,032点、時期は縄文時代早期～晚期中葉のものが出土している。分布傾向は、A地区では高位部平坦面から南向き緩斜面にかけての出土が多い。B地区では、Ⅲ群が南東斜面から、IV群が調査区全域、V群が北東の平坦面から出土している。

各分類の記載は概略に留め、掲載土器の個別の詳細は表III-12~14を参照されたい。

I群 B3類土器(1)

早期後半の中茶路式土器に相当するもの。出土点数は5点で、全てA地区からの出土である。

1は深鉢の胴部である。微隆起線文は高さも低く、幅も狭い。

I群 B4類土器(2)

早期末葉の東釧路IV式に相当するもの。出土点数は3点で、全てA地区からの出土である。

2は深鉢の口縁～胴部である。口唇は隅丸角状で、縄の側面による刻みが施される。口唇直下には縄端圧痕文が2段施され、2条1対の撚糸文が施される。

II群 A1類土器(3・4)

前期前葉の美々7式、綱文式に相当するもの。出土点数は43点で、全てA地区からの出土である。

3は鉢の口縁部である。口唇直下に条が太い横走する縄文を施し、その下にはRL斜行縄文が認められる。小片のため羽状縄文は確認できないが、美々7式土器に相当するものと考えられる。4は綱文式土器の胴部である。3・4とも胎土に多量の纖維が混入する。

II群 A2類b種土器(5)

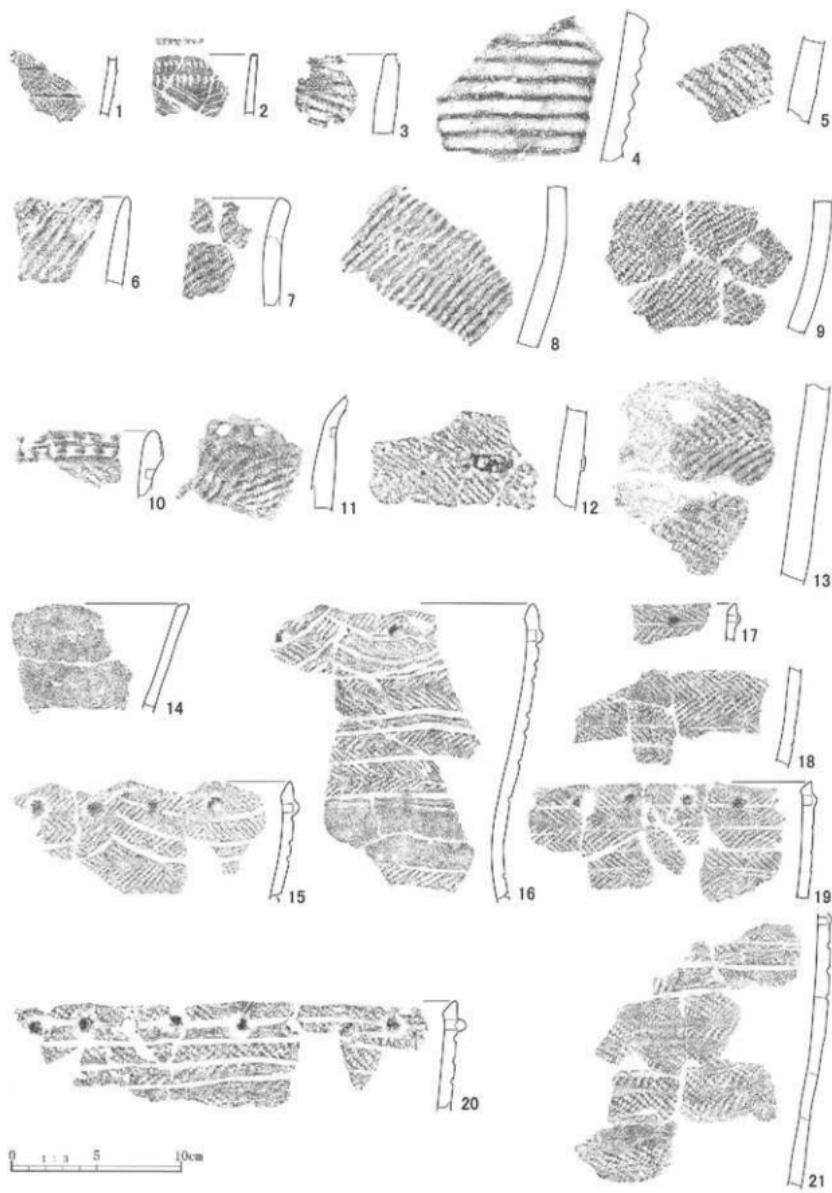
前期前半のトビノ式、静内中野式に相当するもの。出土点数は3点で、全てA地区からの出土。

5はRL斜行縄文が施され、胎土には多量の纖維が混入する。

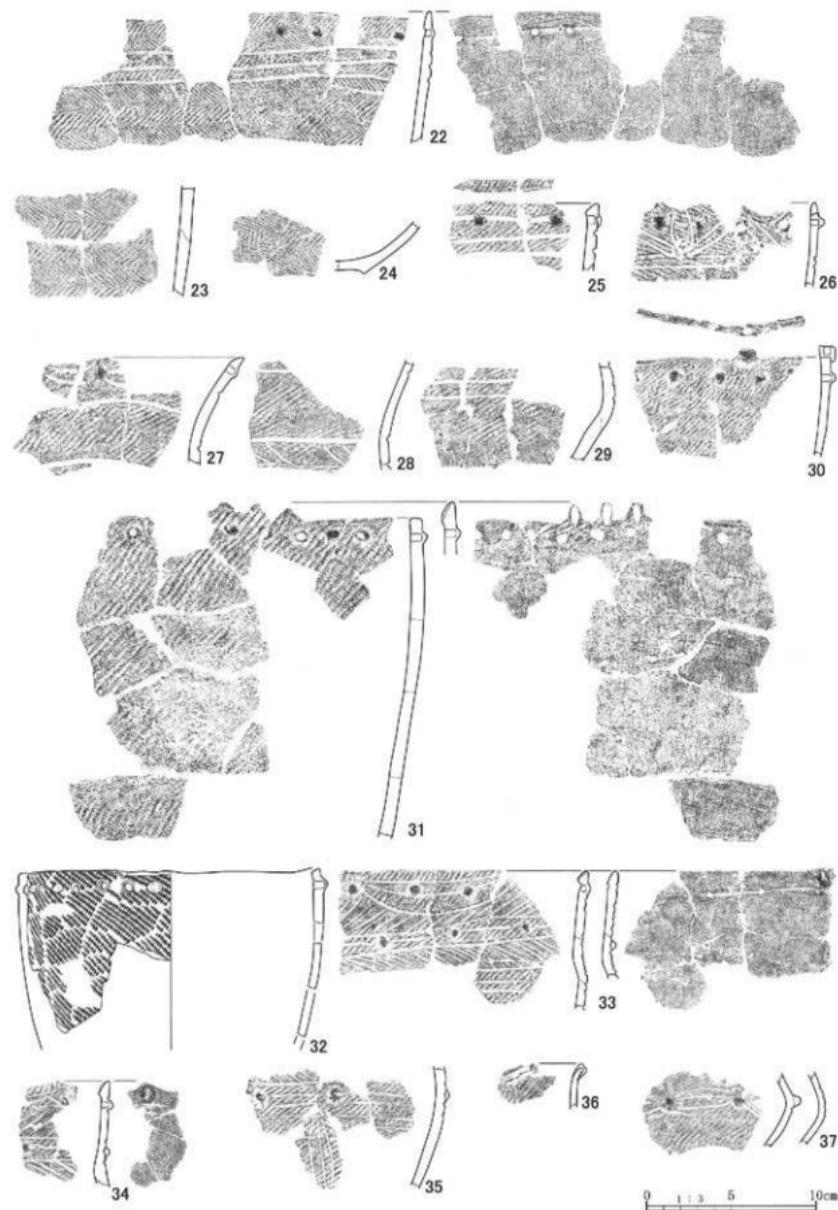
III群 B2類土器(6~9)

中期後半の柏木川式に相当するもの。出土点数は291点で、267点がA地区からの出土である。

全て深鉢形土器の破片と思われる。6は平縁で口唇形状は丸状である。胎土には3mmほどの円礫が少量混入している。7・8は同一個体片である。平縁で、口唇形状は隅丸角状をなし、ミガキ調整が認められる。LR斜行縄文を地文とし、胎土は纖維を多量に含み、砂粒も少量混入している。9は胴部片である。LR斜行縄文が施され、胎土は纖維を少量、砂粒を中量含み、やや摩耗が進んでいる。



図III-13 縄文時代包含層出土土器(1)



図III-14 縄文時代包含層出土土器(2)

III群 B3 類 a 種 (10~12)

北筒式に相当するもの。出土点数は 16 点で、全て B 地区からの出土である。

全て深鉢形土器の破片と思われる。10 は口縁部片で口唇は断面三角形状に肥厚し、その上にヘラ状工具による浅い押引文が 2 条施文される。地文は RL 斜行繩文で、右側破断面付近に棒状工具による円形刺突文が施されている。11 は口縁部下半の破片である。上部で外反し、地文の LR 斜行繩文は施文が粗雑である。右側の破断面に竹管状工具による円形刺突文がみられる。胎土に纖維や砂粒が混入するが、焼成は良好で硬質である。12 は一段 R 無節の斜行繩文が施されている。中央部に貼付帯が施され、棒状工具による押引文が施文されている。器表面は摩耗がやや進んでいる。

IV群 A1 類 a 種 (13)

後期初頭の余市式土器に相当するもの。出土点数は 304 点で、201 点が A 地区からの出土である。

13 は深鉢形土器の胴部片である。地文に 2 段 RL と 0 段多条 LR の撚りの異なる 2 本原体で羽状繩文が施される。0 段多条 LR の繩文は施文時の原体目詰まりによって節は不明瞭で、無節状に見える。左半分は器表面が剥落している。胎土は砂粒のみで纖維を含まず、III群土器の胎土とは大きく異なる。

IV群 C2 類 (14)

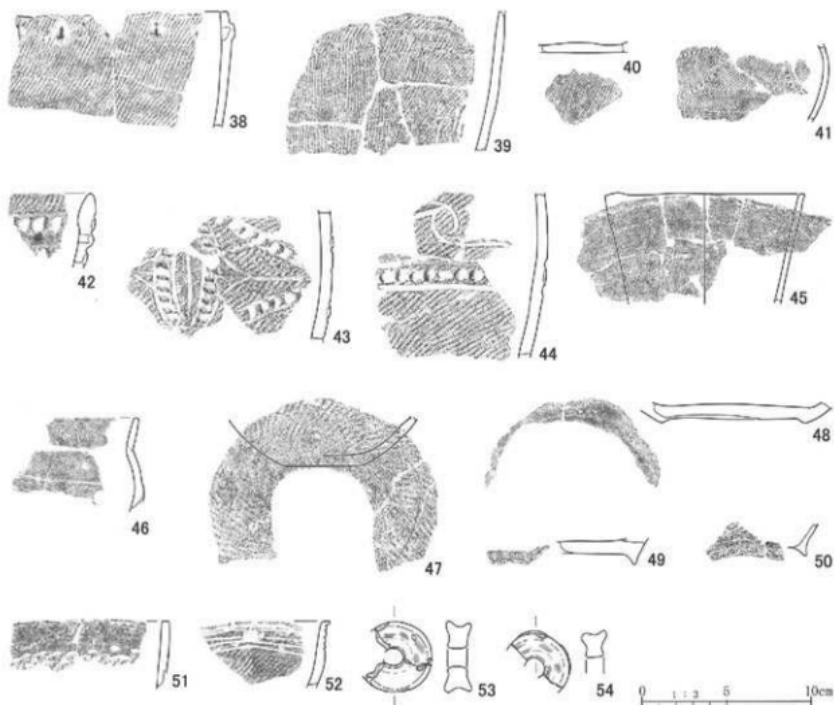
後期中葉の手稻式に相当するもの。出土点数は 6 点で、4 点が A 地区からの出土である。

14 は深鉢形土器の口縁部と思われる。緩やかな波状口縁を呈し、口唇は内削ぎの切り出し状である。内外面ともヘラナデ調整が施され、外面下端には横走沈線が 1 条施されている。

IV群 D1 類 (15~50)

後期後葉の堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。出土点数は最も多く 16,328 点で、16,186 点が A 地区からの出土である。点数が多いが接合率は低く、完形に復元できたものは無い。

15~21 は口唇が肥厚し形状が切出し状を呈し、文様は羽状繩文と I O 突瘤文が施文されるものであることから堂林式土器に相当するものであるとした。全て深鉢形土器の破片である。15・16 は同一個体片である。口縁は波状を呈し、口縁部には下向きの弧状沈線が 3 条描かれ、その下に横走沈線が 4 条、無文帶を挟んで 2 条描かれている。17・18 は同一個体片である。口唇直下に 1 条、胴部下位にも 2 条の横走沈線が描かれる。胎土に砂粒を多量に含み、器表面はやや摩耗が進んでいる。19 はやや浅い横走沈線が 4 条描かれる。20・21 は同一個体片である。横走沈線が 4 条描かれ、突瘤文は他と比べ大きく突出している。22~32 は I O 突瘤文を持つが、口唇形状や文様構成から堂林式から三ツ谷式への移行期のものと考えられる。22~24 は深鉢形土器の同一個体片である。他と比べ器厚がやや薄く、口唇の切出しも弱い。外面には横走沈線が 3 条、内面に 1 条描かれる。底部は上げ底である。25 は口唇がやや肥厚し LR 繩文が施される。外面には LR 斜行繩文施文後、3 条の横走沈線がやや深く描かれる。26 は波状口縁で、地文に RL 斜行繩文が施され、各種沈線文が描かれる。胎土に砂礫は少なく、やや光沢感のある質感を持つ。27~29 は壺形土器の同一個体片である。口縁は波状を呈しだけ外反する。地文は LR 斜行繩文で、口唇直下には 2 条 1 対の弧状沈線文、その下から胴部最大径部分までに数条の横走沈線と斜行沈線が描かれる。器表面はやや摩耗が進んでいる。30 は深鉢形土器の口縁部である。平縁で口唇に小突起があり、その中央に刺突文が施されている。LR 斜行繩文施文後ナデ調整が行われているため、条間が潰れている。31 は深鉢形土器の口縁へ胴部片である。口縁は平縁で、隅丸角状口唇にやや肥厚した小突起を 3 つ作り出し、縦位に棒状工具に



図III-15 繩文時代包含層出土土器(3)

よる刻みが施される。外面はLR斜行縄文が施文されている。内面口唇直下に短沈線様のものが認められるが、部分的であり粗雑でもあることから、意図して付けたものとは思われない。32は深鉢土器である。口径171mm、残存器高115mmを測る。平縁で口唇は浅い切出しを呈し、地文にRL斜行縄文が施されている。33～40は斜行縄文と貼瘤文若しくは縦位のIO突瘤文が施文されるもので、三ツ谷式土器に相当するものとした。33～35は深鉢形土器の同一個体片である。口縁は平縁で山形の小突起が設けられる。小突起は肥厚し縦位の刻みが施される。地文はLR斜行縄文で、上から口縁に並行する横走沈線文、弧状沈線文、右上がり斜行沈線文、3条の横走沈線文、右下がりの斜行沈線文、4条の横走沈線文、縦位の弧状沈線文が描かれる。口唇直下にはIO突瘤文、頸部及び胴部最大径部には縦位の貼瘤文が施文される。36・37壺形土器の同一個体片である。口縁は外反し、波状口縁を呈するものと思われる。波状の頂部に小突起を作り出している。地文にLR縄文が施され、口唇直下に細い横走沈線文が3条描かれる。胴部最大径部には貼瘤文が撫で付けられ、それを結ぶ浅く細い弧状沈線文が描かれる。38～40は深鉢形土器の同一個体片である。口縁は平縁で、口唇形状は隅丸角状を呈する。外面及び平底の底面にはLR斜行縄文が施文される。口唇直下には縦位のIO

突瘤文が施される。41~44は爪形文が施されたもので、御殿山式土器に相当するものと考えられる。41は壺形土器の胴部片である。LR斜行縄文が施され、細く浅い弧状沈線文が描かれる。二重に描かれた弧状沈線文間には小型の爪形文が並ぶ。また、沈線文で囲まれた一部は磨消しが施されている。42・43は深鉢形土器の同一個体片である。平縁で口唇は肥厚した切出しを呈する。地文はLR斜行縄文で、口縁部には2条の横走沈線文と爪形文、IO突瘤文が施文される。胴部には弧状沈線文が描かれ、二重に描かれた沈線文間には爪形文が並ぶ。口縁部の摩耗が著しい。44は深鉢形土器の胴部片である。上部には弧状沈線文が、その下方には2条の横走沈線間に爪形文が並ぶ。地文にLR斜行縄文が施文される。45・46は無文の口縁部である。45は壺形の口縁部と思われる。口径118mm、内外面ともミガキ調整が施される。46は無文の注口土器ないしは鉢形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片資料と思われる。口唇は隅丸角状を呈し、平縁で外反する。胴部は内湾し、下部には貼付帯が撫で付けられ、段状を呈している。器厚も薄く、内外面ともミガキ調整が施されている。破断面は部位屈曲部からの輪積み成形痕からの剥離状態を観察できる。47~50は底部である。47は底径46mm、僅かに丸底で底側面にはLR斜行縄文が施される。48~50は上げ底の底部である。48は底径84mm、内外面ともミガキ調整が施される。底面の2/3が剥落している。49・50は同一個体片である。上げ底で、内外面ともミガキ調整が施される。

V群 A1類 (51)

晩期前葉の土器で爪形文や刺突文を施すもの。13点が出土し、9点がA地区からの出土である。51は深鉢形土器の口縁部片である。平縁で、口唇は隅丸角状を呈する。丁寧なミガキ調整が施され、LR斜行縄文施文後、口唇直下の無文帶下縁に棒状工具による列点が施される。

V群 B1類 (52)

晩期中葉の美々3式、ママチI・II群に相当するもの。出土点数は13点で、うち7点がA地区からの出土である。

52は深鉢形ないしは鉢形土器の口縁部片である。LR斜行縄文が施され、口唇直下に4条の横走沈線文が描かれる。

土製品 (図III-15-53・54 図版13-53・54)

土製品はA地区から7点出土した。内訳は土製耳飾が6点、焼成粘土塊が1点である。出土層位から縄文時代後期末葉、IV群D1類の時期と考えられる。土製耳飾2点を掲載した。

53・54は滑車形耳飾である。53は直径42mm、内径13mm、厚さ16mmを、54は直径(41)mm、内径(12)mm、厚さ15mmを測る。調整はとともに円周方向への丁寧なナデで、文様は施文されていない。形状、調整、胎土等非常に似ており、一对をなしている可能性がある。

(岩橋)

表III-12 繩文時代包含層出土土器属性表(1)

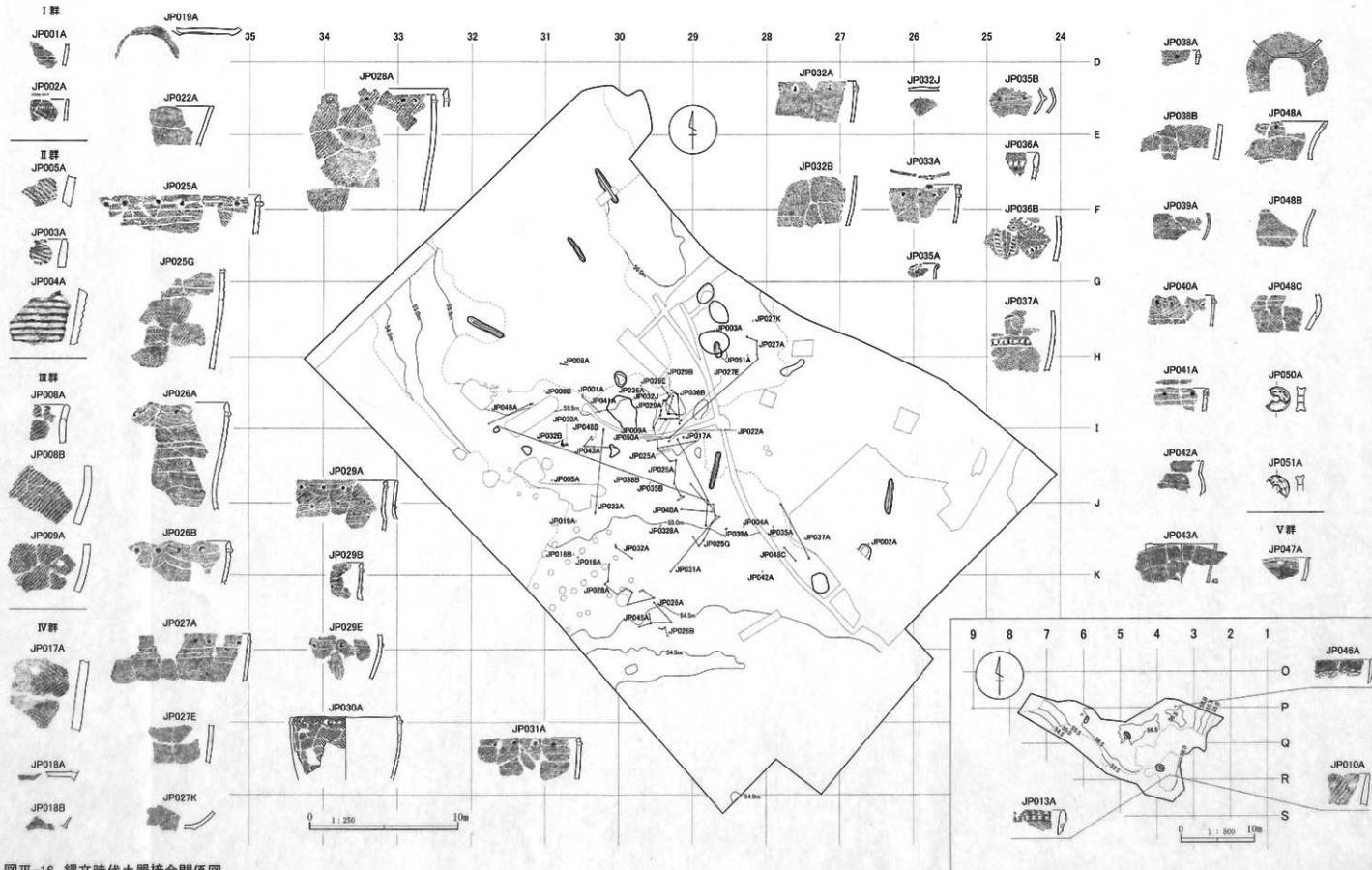
擇図 番号	図版 番号	個体 名称	分類 / グリッド	遺構名 / 層位	点数	部位	器形等		文様	胎土	備考
							口縁~ 底側面~ 変換点~ 底面	外傾	口縁~ 直立~ 内面	口縁~ 内面	
III-13-1	II-1	JP001A	I B3	H-30	VI	1	脣部	外傾	羽状繩文・微隆起繩文	砂粒少量	
III-13-2	II-2	JP002A	I B4	J-29	VI	1	口縁~ 脣部	平縁・直立~ 丸角状/やや外傾	輪み~繩彫压痕文/燃 糸文(LR-RRL)	砂粒少量	
III-13-3	II-3	JP003A	II A1	H-28	Vc	1	口縁部	平縁・やや外傾~ 丸角状	ヘラナデ・羽状繩文~ ヘラナデ(斜め)	織維多量	美々7式
III-13-4	II-4	JP004A	II A1	J-28	Vc	1	脣部	外傾	横走繩文(条間の節、 ナデ消し) 条幅10mm	織維多量	内面平滑
III-13-5	II-5	JP005A	II A2b	I-30	Vc	1	脣部	外傾	RL羽状繩文(U形構 成)	織維多量	砂粒少量
III-13-6	II-6	JP010A	III B2	Q-3	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾~丸状	LR斜行繩文	砂粒中量	
III-13-7	II-7	JP008A	III B2	H-30	VbL	2	口縁部	平縁・外反~ 丸角状	ミガキ~LR斜行繩文~ ミガキ(横)	織維多量	砂粒少量
III-13-8	II-8	JP008B	III B2	H-31	VbL	1	脣部	わざかに内湾	LR斜行繩文~ミガキ	織維多量	砂粒少量
III-13-9	II-9	JP009A	III B2	H-29	VbL	4	脣部	わざかに内湾	LR斜行繩文	織維少量	砂粒中量
III-13-10	II-10	JP013A	III B3a	Q-3	VbL	1	口縁部	半縁・直立~丸状(肥 厚)	押引文(ヘラ状工具・2 条・浅い)+RL斜行繩文~ 円形刺突文(棒状工 具)~ヘラナデ(横)	砂粒中量	
III-13-11	II-11	JP011A	III B3a	-	搅乱	1	口縁部	外反		織維少量	砂粒中量
III-13-12	II-12	JP012A	III B3a	-	搅乱	2	脣部	直立	RL斜行繩文~貼付替 刺突文(棒状工具)~ナ デ	織維少量	砂粒中量
III-13-13	II-13	JP017A	IV A1a	I-29	VbL	2	脣部	外傾	2段異原体羽状繩文~ ナデ	砂礫多量	
III-13-14	II-14	JP022A	IV C2	I-29	VbU	2	口縁部	波状・外傾~切出し	ナデ~ヘラナデ(横)・沈 線文~ヘラナデ(横)	砂粒少量	
III-13-15	II-15	JP026B	IV D1	K-29	VbU	4	口縁部	波状・やや内湾~ 切出し(肥厚)	ミガキ~羽状繩文・波状 沈線文・横走沈線文 +IO突瘤~ミガキ	砂粒中量	
III-13-16	II-16	JP026A	IV D1	K-29	VbU	6	口縁~ 脣部	波状・やや内湾~ 切出し(肥厚)/外傾	ヘラナデ~羽状繩文・波 状沈線文+IO突瘤~ヘラ ナデ/横走沈線文・磨 消~ヘラナデ	砂粒中量	
					VbL	1					
III-13-17	II-17	JP038A	IV D1	J-29	VbU	1	口縁部	直立~切出し	ミガキ~羽状繩文・横走 沈線文+IO突瘤	砂粒多量	
III-13-18	II-18	JP038B	IV D1	I-31 I-28 J-28	VbU	1	脣部	外傾	LR羽状繩文~横走沈線 文	砂粒多量	
					VbU	1					
					Va	1					
III-13-19	II-19	JP031A	IV D1	I-29 J-28	VbU	1	口縁部	半縁・直立~切出し (肥厚)	ミガキ~R羽状繩文・横 走沈線文(4条)+IO突瘤 ~ミガキ	砂礫少量	
III-13-20	II-20	JP025A	IV D1	I-28 I-29	VbU	1	口縁部	半縁・直立~切出し (肥厚)	ナデ~RL斜行繩文・横 走沈線文+IO突瘤~ミガ キ	砂礫多量	
					Va	1					
III-13-21	II-21	JP025G	IV D1	I-29 J-28	VbU	5	脣部	外傾	RL斜行繩文(一部重複 施文)の為羽状構成・ 横走沈線文~ミガキ(粗 い)	砂礫中量	
					VbU	5					

表Ⅲ-13 縄文時代包含層出土土器属性表(2)

掲 番 号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名 / グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
									口唇～口縁～内面/ 頸部～内面/ 底側面～底面～内面		
III-14-22	12-22	JP027A	IVD1	H-29	Va	1	口縁～ VbU	平線・やや外傾・隅丸 頭部	ミガキ・2段異原体羽状 縄文・横走沈線文+IO 突瘤・ミガキ(横)/2段異 原体羽状縄文(横)	砂粒少量	
				I-29	乱視	1					
				G-28	VbU	4					
				H-29	VbU	3					
III-14-23	12-23	JP027E	IVD1	H-29	VbU	3	頭部	外傾	2段異原体羽状縄文- ミガキ	砂粒少量	
III-14-24	12-24	JP027K	IVD1	G-28	VbU	1	底部	外傾-尖状-上げ底	2段異原体羽状縄文- ミガキ(粗い)	砂粒少量	
III-14-25	12-25	JP041A	IVD1	H-30	VbU	2	口縁部	平線・直立-切出し (肥厚)	LR斜行縄文-LR斜行縄 文・横走沈線文+ IO突瘤・ミガキ	砂礫少量	
III-14-26	12-26	JP040A	IVD1	J-28	VbU	1	口縁部	波状・直立-尖状	ナデ-RL斜行縄文・弧 状凸線文・IO突瘤- ミガキ(横)	砂礫少量	
				J-29		1					
III-14-27	12-27	JP048A	IVD1	H-31	VbU	4	口縁部	波状？・外反-尖状	ミガキ-RL斜行縄文・弧 状沈線文・横走沈線文 +IO突瘤-ミガキ	砂礫中量	
III-14-28	12-28	JP048B	IVD1	I-30	VbU	1	頭部	外反	LR斜行縄文・横走沈線 文・斜行沈線文-ミガキ	砂礫中量	
III-14-29	12-29	JP048C	IVD1	J-27	Va	2	頭部	内湾	LR斜行縄文・横走 沈線文-ミガキ(粗い)	砂礫中量	
III-14-30	12-30	JP033A	IVD1	I-30	VbU	2	口縁部	平線・突起・直立- 隅丸角状	ミガキ・刺突(突起部)- LR斜行縄文+IO突瘤- ヘラミガキ(横)	砂礫中量	
				J-30		2					
III-14-31	12-31	JP028A	IVD1	J-30	VbU	1	口縁～ 頭部	平線・山型突起・直立- 隅丸角状・切出し (肥厚)/外傾	ミガキ・刺突-LR斜行縄 文+IO突瘤-ヘラミガキ/ ヘラミガキ	砂礫多量	
				K-29		7					
				K-30		3					
III-14-32	12-32	JP036A	IVD1	I-30	VbU	13	口縁～ 頭部	やや内湾-切出し/ やや外傾	ミガキ-RL斜行縄文+IO 突瘤-ミガキ/RL斜行 縄文-ミガキ	砂礫中量	
III-14-33	13-33	JP029A	IVD1	H-29	VbU	5	口縁～ 頭部	平線・山形突起・外傾- 剪出し/内湾	ミガキ・刺突(突起部)- LR斜行縄文・横走沈線 文・弧状沈線文・斜行 沈線文+IO突瘤-ミガキ (横)/横走沈線文/LR斜 行縄文・斜行沈線文・ 横走沈線文+貼瘤- ミガキ(横)	砂礫少量	
				H-29	VbU	4					
III-14-34	13-34	JP029B	IVD1	H-29	VbU	4	口縁～ 頭部	平線・山型突起・外傾- 剪出し/内湾	ミガキ・刺突(突起部)- LR斜行縄文・斜行沈線 文+IO突瘤/LR斜行縄 文・斜行沈線文・横走 沈線文+貼瘤-ミガキ (横)	砂礫少量	
III-14-35	13-35	JP029E	IVD1	H-29	VbU	5	頭部	内湾	LR斜行縄文・斜行沈線 文・横走沈線文・弧 状沈線文+貼瘤-ミガキ (横)	砂礫少量	
III-14-36	13-36	JP035A	IVD1	J-27	VbU	1	口縁部	波状？・突起・外反- 尖状	粗いミガキ+ナデ-LR斜 行縄文・横走沈線文- ナデ	砂粒少量	
III-14-37	13-37	JP035B	IVD1	J-29	VbU	1	頭部	内湾	LR斜行縄文・弧状沈線 文(浅い)+貼瘤-ミガキ	砂粒少量	彫形
III-15-38	13-38	JP032A	IVD1	J-29	VbU	1	口縁～ 頭部	平線・外傾-隅丸角状/ 外傾	ミガキ-LR斜行縄文+IO 突瘤-ミガキ(横)/LR 斜行縄文-ミガキ	砂粒少量	
				J-30		2					
III-15-39	13-39	JP032B	IVD1	I-30	VbU	4	頭部	外傾	LR斜行縄文-ミガキ	砂粒少量	
				I-31		1					

表III-14 繩文時代包含層出土土器属性表(3)

擲図番号	団版番号	個体名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/脣部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-内面/ 脣部-内面/ 底側面-底面-内面		
III-15-40	13-40	JP032C	IVD1	H-29	VbU	1	底部	平底	LR斜行縄文-ミガキ	砂礫中量	
III-15-41	13-41	JP039A	IVD1	J-28	VbU	2	脣部	内湾	LR斜行縄文・弧状沈線文・爪形文-ミガキ(粗い)	砂礫少量	
III-15-42	13-42	JP036A	IVD1	H-29	VbU	1	口縁部	平縁・直立-切出し(肥厚)	ミガキ？-LR斜行縄文・爪形文・横走沈線-IQ突縮-ミガキ？	砂礫中量	摩耗著しい
III-15-43	13-43	JP036B	IVD1	H-29	VbU	3	脣部	やや内湾	LR斜行縄文・弧状沈線文・爪形文-ミガキ	砂礫中量	
III-15-44	13-44	JP037A	IVD1	J-27	VbU	4	脣部	やや内湾	LR斜行縄文・爪形文・沈線文-ミガキ	砂礫微量	
III-15-45	13-45	JP043A	IVD1	I-30	VbU	4	口縁部	平縁・外傾-隅丸角状	ミガキ-ミガキ(横)-ミガキ(横)	砂礫少量	
III-15-46	13-46	JP042A	IVD1	J-28	VbU	1	口縁～	平縁・外反-隅丸角状/脣部内湾	ミガキ-ミガキ-ミガキ/貼付滑-ミガキ-ミガキ	砂礫少量	
III-15-47	13-47	JP045A	IVD1	K-29	VbU	2	底部	外傾-丸状-丸底	LR斜行縄文	砂礫中量	
III-15-48	13-48	JP019A	IVD1	J-30	VbU	1	脣部	外傾-上げ底	ミガキ	砂礫少量	
III-15-49	13-49	JP018A	IVD1	J-30	VbU	1	底部	外傾-上げ底	ミガキ-粗いミガキ	砂礫少量	
III-15-50	13-50	JP018B	IVD1	J-30	VbU	1	底部	外傾-上げ底	ミガキ-粗いミガキ	砂礫少量	
III-15-51	13-51	JP046A	VAI	O-3	VbL	2	口縁部	平縁・直立-隅丸角状	LR斜行縄文・棒状工具による列点(横)/ミガキ	砂短軸少量	
III-15-52	13-52	JP047A	VBI	I-29	VbU	1	口縁部	平縁・外傾-隅丸角状	ミガキ-LR斜行縄文・横走沈線-ナデ	砂礫少量	
III-15-53	13-53	JP050A	IVD1	H-29	VbU	2	滑車形耳飾	-	全面ナデ	砂礫中量	
III-15-54	13-54	JP051A	IVD1	G-28	VbU	1	滑車形耳飾	-	全面ナデ	砂礫中量	



図III-16 繩文時代土器接合関係図

2. 剥片石器（図III-17～18 図版14）

包含層、遺構を含め914点が出土している。包含層出土のものは814点である。ポイント類が327点と最も多く、ナイフ・スクレイバー類が192点でそれに次ぐ。石材は黒曜石のものが91.2%を占め、その他に出土点数の多い順に頁岩、チャート、メノウ、珪化岩、安山岩、酸性岩、砂岩、片岩がある。石材については非黒曜石であった場合のみ記述する。

ポイント類（1～7）

ポイント類は327点中、石鏃が323点と98.8%を占め、石槍はわずか4点である。内訳は無茎のA2類が12点、有茎のA3類が176点、その他5点、欠損品等が130点で、形態の判別が可能なものではA3類が91%を占める。その内157点(81.3%)がVb層上位から出土しており、同じVb層上位出土の土器のうち、IV群D1類土器が83.8%を占めるところから、同時期の石鏃と考えられる。これらの石鏃の剥離調整等を観察すると、黒曜石の道内原産地における四大産地の中で、赤井川産とその他の産地(以後、道東産)との間に、概ね次の差異が認められた。赤井川産のものは、長軸が短く、鏃身部も厚く粗雑な剥離調整ものが多い傾向であるのに対し、道東産黒曜石を素材とするのものは薄手で精緻な造りである傾向が見られた。

1はA2類に分類される無茎の石鏃で、基部は内湾する。2～6はA3類に分類される有茎の石鏃である。2は明瞭な縞模様が見られることから赤井川産と考えられ、鏃身部が短く厚みがある。両面に調整が施されている。3は頁岩製で、鏃身部が半円形である。この形状は貫通力が弱まると予測され、どのような利点からこの形態が選択されたかは不明である。4は頁岩製で正三角形に近い鏃身部を持ち、明瞭なかえしを持つ。5はVb層下位より出土した。やや厚手で、高さのある二等辺三角形の鏃身部を持つ。6は石鏃中最も数が多いVb層上位出土のA3類である。薄手で、高さのある二等辺三角形の鏃身部を持ち、先端部が欠損し、基部はI-29区出土の破片と接合している。7は石槍で、石質は多数の球果を含み、赤井川産と考えられる。左右非対称で厚手であり、やや粗雑な造りである。

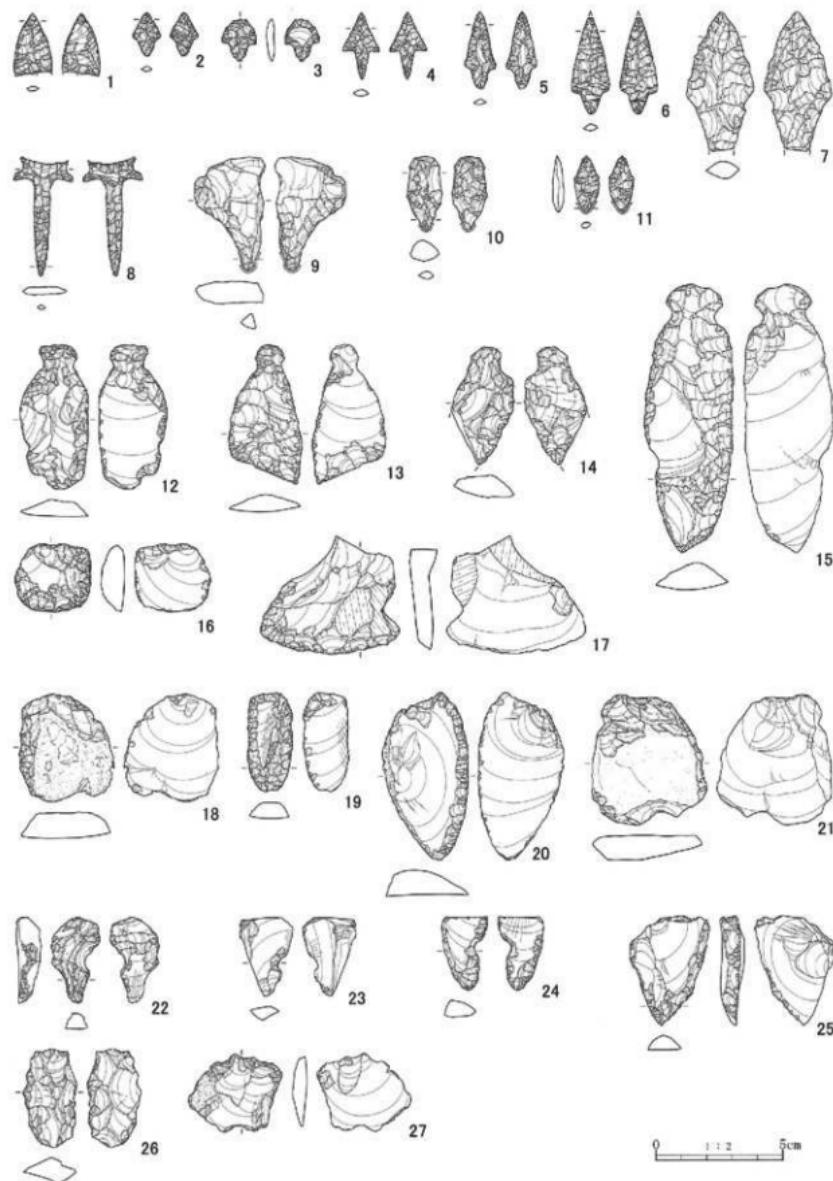
石鏃（8～11）

包含層からは22点が出土している。8は頁岩製でB類に分類した。細かい突起のあるつまみがあり、先端部に使用痕跡と思われる微細剥離が観察された。9はチャート製で柄と機能部の区別が不明瞭な幅広のものである。非常に硬い石材であるが、先端は磨滅が著しい。10は柄と機能部の区別が不明瞭な棒状のものである。機能部に使用痕とみられる微細剥離が見られ磨滅も著しい。11は石鏃からの転用品で、E類に分類した。先端にらせん状に剥離した使用痕がある。

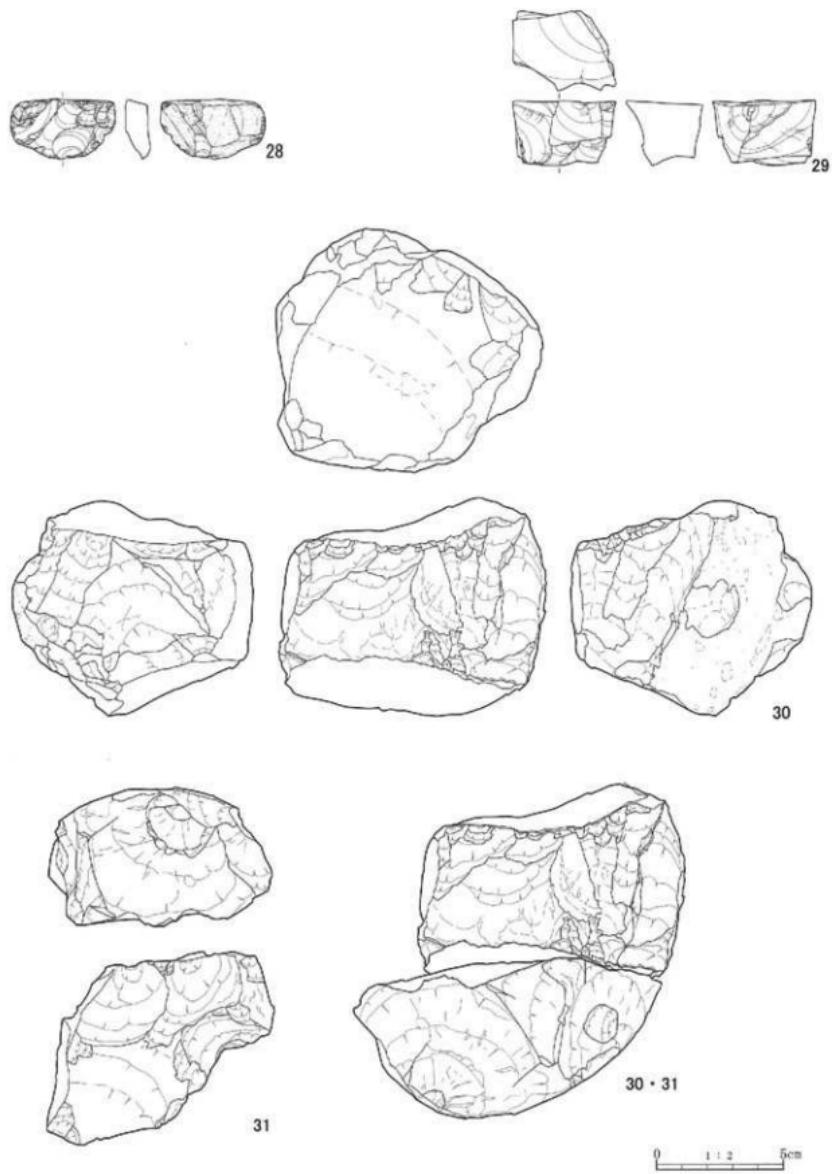
ナイフ・スクレイバー類（12～25）

つまみ付きナイフが20点、素材剥片の長軸端部に刃部が形成されるB類（ラウンド・スクレイバー、エンド・スクレイバー）が6点、素材剥片長軸に並行する刃部形成のC類（サイド・スクレイバー、コンケーブ・スクレイバー）が63点である。その他欠損品などが104点出土している。

12～15はつまみ付きナイフである。12は素材の周縁を加工したもので、裏面の加工がつまみ部の周間にのみ施されている。13はVc層出土で、直線的に端部が調整されている。片面全体に加工を施したものでA2類に分類する。14はメノウ製で両面に加工が施されるが、一方の縁辺にのみ調整を施して刃部を作出している。A3類に分類した。15は珪化岩製で長軸103.9mmあり、剥片石器中最大の資料である。表面のほぼ全体に加工が施され、縁辺の欠損を避けて刃部を作出している。A2類



図III-17 繩文時代包含層出土剥片石器（1）



図III-18 純文時代包含層出土剥片石器（2）

に分類した。16~22はスクレイパーである。16は片面調整のラウンド・スクレイパーである。17はエンド・スクレイパーで、厚真川流域で産出する頁岩が使用されている。18~22はサイド・スクレイパーで片面のみ加工が施されている。18は転疊面が残り、調整が転疊面側に施されている。19はほぼ全周に剥離調整が施されたもので、カマボコ形の断面をもつ。20は左側縁に転疊面を残すスクレイパーで、対置する右側縁に刃部調整を施している。21はメノウ製で右側縁に刃部調整が施される。22は一見、抉入石器であるが、ノッチ部分は意図した加工整形剥離でないことから、左側縁に使用刃部を有するサイド・スクレイパーに分類した。23~24は抉入石器で、意図的にノッチを形成しているが、ノッチの使用目的や方法は不明である。オニキシベ6遺跡で出土した抉入石器は遺構も含め12点であるが、RFに分類したものにも浅いノッチを持つものがある。25はやや大型の横型剥片素材の端部に両側縁から剥離調整を施し、先端を尖らせたもので、C4類に分類した。C4類は17点が出土している。

両面調整石器（26）

1点のみの出土である。メノウ製で非常に硬く、黒曜石に比して加工は困難であると考えられる。調整中の石器と推測されるが、どのような器種に加工中であったかは不明である。

表III-15 繪文時代包含層出土剥片石器属性表

標印番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-17-1	14-1	-	18249	ポイント	A2	I-27	Vc	24.8	14.8	3.5	0.9	Obs.	
III-17-2	14-2	-	18851	ポイント	A3	J-29	VbU	17.2	10.6	3.3	0.5	Obs.	
III-17-3	14-3	-	2233	ポイント	A3	G-28	Va	16.7	13.6	3.1	0.6	Sh.	
III-17-4	14-4	-	12210	ポイント	A3	K-30	VbU	26.0	14.5	3.5	0.7	Sh.	
III-17-5	14-5	-	15507	ポイント	A3	I-29	VbU	30.5	12.1	4.3	1.0	Obs.	
III-17-6	14-6	VFT001	12060他	ポイント	A3	G-28	VbU	(32.6)	15.2	3.9	(1.5)	Obs. 接	
III-17-7	14-7	-	12348	ポイント	B1	H-31	VbU	(54.6)	26.6	10.0	(12.4)	Obs.	
III-17-8	14-8	-	15476	石核	B	G-28	VbU	46.5	23.4	5.0	1.8	Sh.	
III-17-9	14-9	-	12620	石核	C	K-29	VbU	43.1	30.1	8.6	11.3	Obs.	
III-17-10	14-10	-	15006	石核	D	G-28	VbU	28.3	13.3	9.4	3.6	Obs.	
III-17-11	14-11	-	5972	石核	E	H-28	VbU	22.0	9.8	4.4	0.9	Sh.	
III-17-12	14-12	-	10374	ナイフ・スレーブー	A1	H-30	VbU	56.2	26.5	7.2	11.1	Obs.	
III-17-13	14-13	-	18055	ナイフ・スレーブー	A2	I-28	Vc	50.0	28.4	8.2	8.3	Obs.	
III-17-14	14-14	-	3503	ナイフ・スレーブー	A3	I-30	VbU	(45.6)	24.5	9.6	(8.9)	Aga.	
III-17-15	14-15	-	17440	ナイフ・スレーブー	A2	I-30	Vc	103.9	33.4	10.5	34.6	理化岩	
III-17-16	14-16	-	17294	ナイフ・スレーブー	B1	H-29	VbU	28.7	26.2	8.6	7.7	Obs.	
III-17-17	14-17	-	5777	ナイフ・スレーブー	B2	H-28	VbU	49.5	47.5	14.0	20.5	Sh. 地元産石材	
III-17-18	14-18	-	10891	ナイフ・スレーブー	C1	I-28	VbU	38.7	17.9	7.3	5.3	Obs.	
III-17-19	14-19	-	5910	ナイフ・スレーブー	C1	G-28	VbU	44.6	37.2	10.7	17.4	Obs.	
III-17-20	14-20	-	11094	ナイフ・スレーブー	C1	H-28	VbU	65.2	33.9	9.3	17.8	Obs.	
III-17-21	14-21	-	27270	ナイフ・スレーブー	C1	I-29	VbU	51.2	44.6	9.5	28.0	Aga.	
III-17-22	14-22	-	30546	ナイフ・スレーブー	C1	G-28	Va	33.4	18.1	9.4	4.8	Obs.	
III-17-23	14-23	-	14536	ナイフ・スレーブー	C3	J-30	VbU	31.1	21.1	6.0	3.2	Obs.	
III-17-24	14-24	-	20658	ナイフ・スレーブー	C3	H-30	VbU	28.7	17.6	6.7	3.1	Obs.	
III-17-25	14-25	-	253	ナイフ・スレーブー	C4	H-28	Va	(44.6)	32.7	9.0	(11.6)	Obs.	
III-17-26	14-26	-	3497	両面調整石器	-	H-29	VbU	37.6	20.0	11.0	8.3	Aga.	
III-17-27	14-27	-	16704	RF	-	I-30	VbU	35.0	30.0	4.3	5.7	Obs.	
III-18-28	14-28	-	9394	石核	-	H-28	VbU	41.0	23.2	11.3	10.9	Obs.	
III-18-29	14-29	-	8567	石核	-	H-29	VbU	47.2	31.8	24.8	31.9	Sh. 地元産石材	
III-18-30	14-30	VST021	15793	石核	-	I-31	VbU	105.0	93.5	85.0	950.0	Sa. 接	
III-18-31	14-31	VST022	17096	石核	-	I-30	VbU	105.5	67.0	54.5	330.0	Sa. 接	

RF (27)

包含層からは 67 点が出土している。1 点を掲載した。27 は転疊面の残る剥片で、表面のみに調整を施している。抉入石器に分類できない非常に浅い湾入部が見られる。

石核 (28~31)

包含層からは 22 点が出土している。28 は岩碎面が残る、長辺 41.0 mm 程度の小片である。この破片からは非常に小さな剥片しか採取できないと考えられる。剥離作業面には微細剥離もみられることから、スクレーパーとしても利用されていた可能性がある。29 は厚真川流域産の頁岩製石核である。地元産の頁岩は 26 点が出土しており、1 点が UF、2 点がスクレイパー、8 点が石核、15 点が剥片である。石核以外の石器は 3 点のみのため、その利用傾向を知ることは困難である。30・31 は硬砂岩製の石核で、この 2 点は接合するが、それぞれ別の石核として剥片が採取されていたと考えられる。この石核から採取した剥片で作成された定型的な石器は出土していない。

(服部)

3. 積石器 (図III-19~23-37 図版 15~18)・石製品 (図III-24-38 図版 18-38)

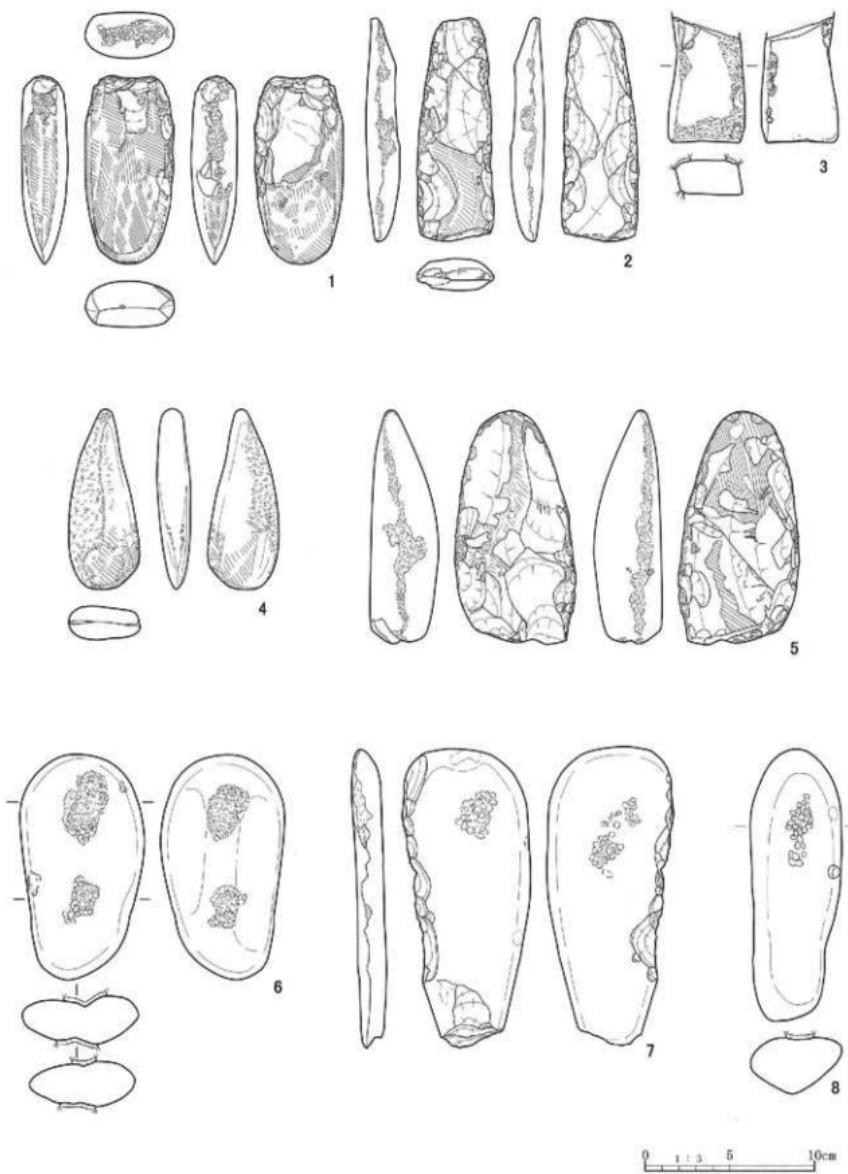
包含層、遺構を含めて 267 点が出土している。たたき石が多く、石斧、すり石が極端に少ない。

石斧 (1~5)

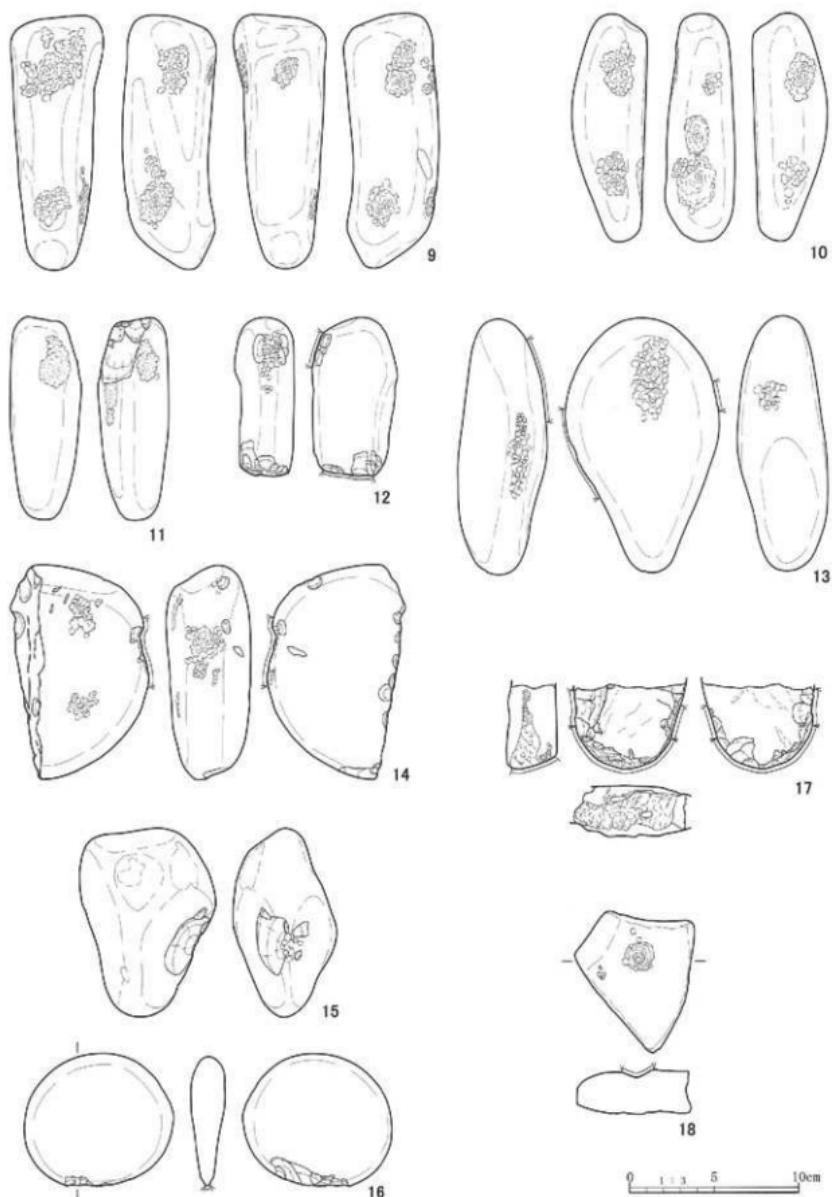
包含層から未製品、欠損品を含め 11 点が出土している。石材は片岩の欠損品 1 点を除きすべて緑色泥岩である。1 は両刃の磨製石斧完形品であるが、厚みのある基部には研磨整形後の敲打痕があり、たたき石として再利用された可能性もある。2 は未製品で、短冊形の石斧に整形する目的で剥離と敲打が施されている。3・4 は D 類に分類される、棒状の素材疊の形状が残る未製品である。共に敲打調整が施され、4 は一部に研磨調整が見られる。5 は剥離調整が進み、左右両側縁は敲打調整、表裏面は研磨調整によって稜の切除が進んでいる。

たたき石 (6-19)

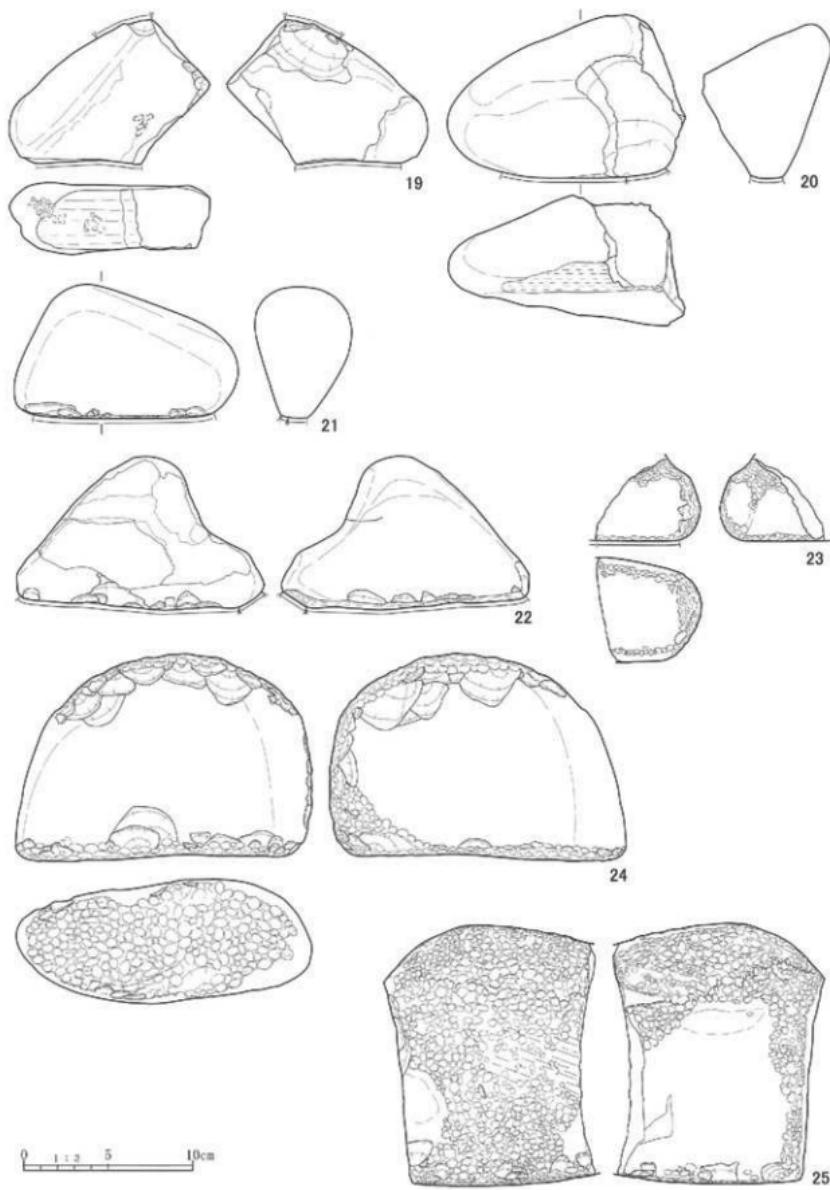
包含層から 110 点が出土しており、所謂くぼみ石を含んでいる。掲載遺物の石材は 17 を除き全て砂岩である。6 は扁平な疊の平坦面を利用したたたき石で、表裏面とともに 2 カ所ずつ敲打痕がある。7 は扁平な疊の側縁と平坦面に敲打痕がある。6・7 はともに幅広的部分を先端として主に使用したと考えられる。8~11 は、ほぼ手に収まる大きさの棒状疊を素材とするもので、8~10 は平坦面に、11 は平坦面及び稜線部分に敲打痕があり、上端部からの剥離加工も見られる。12 は上部側縁稜と長軸下縁の平坦面を使用敲打面としている。いずれも敲打使用に伴う側面への剥離がみられる。13 は敲打痕が約 4mm と深く、これは軟質な砂岩を素材として使用したためと、重量が 670 g で本器種の中では最も重いことから、対象物の差異などによる可能性も考えられる。14・15 は敲打痕の単位が大きく、対象物も硬く、強い敲打が行われていたと思われる。いずれも側縁稜が主要使用部位で、14 は素材疊形状に抉れが生じる程度まで使用されている。16 は扁平でほぼ円形の疊の縁辺を利用したものである。17 は非常に硬い石英岩を素材としたもので、選択した理由は判らない。細かい敲打痕とともに磨滅がみられる。18 は板状疊の周囲が破断面であることから欠損品とも見えるが、疊の中央部に敲打痕があり、掌中に収まる大きさであり、縁辺の稜線がやや磨滅していることから疊片素材のたたき石の完形品とした。同じタイプの疊片利用のたたき石は他に 9 点が出土している。19 は下面に擦り面があり、たたき石としても利用したもので、他に上端と正面にも敲打痕がある。



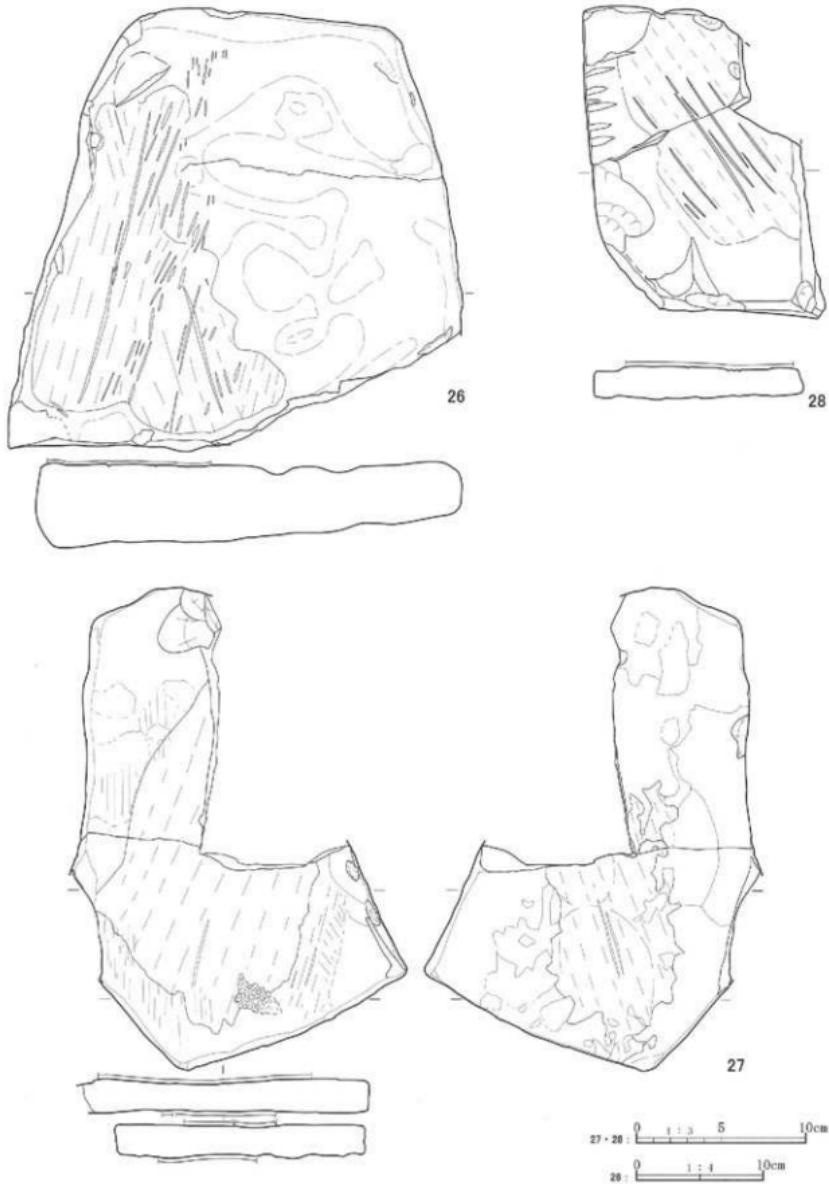
図III-19 繩文時代包含層出土礫石器 (1)



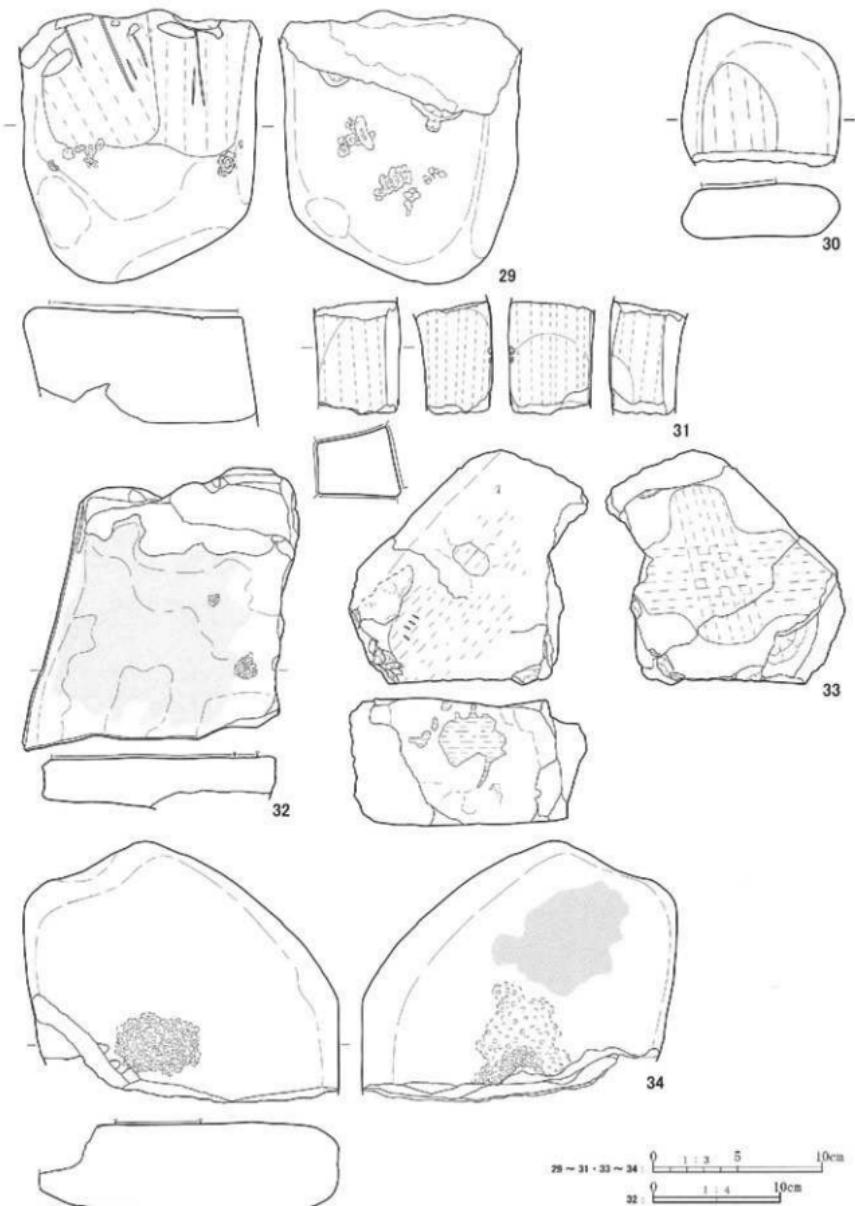
図III-20 縄文時代包含層出土礫石器（2）



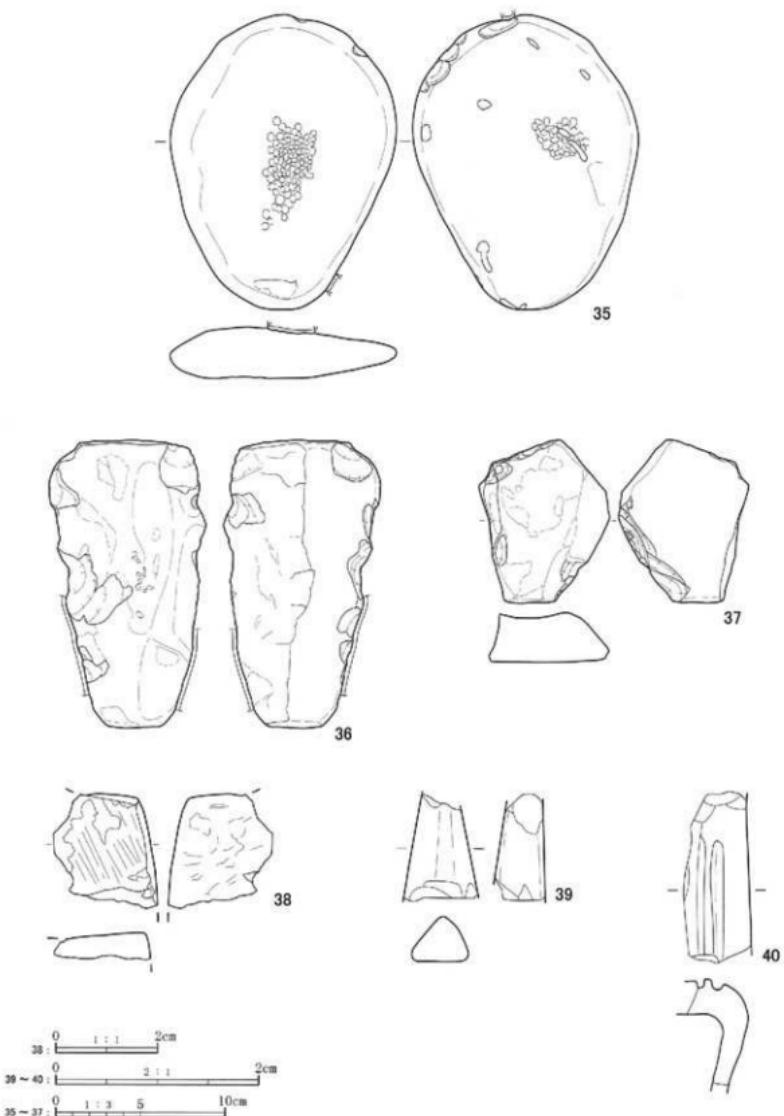
図III-21 縄文時代包含層出土石器（3）



図III-22 縄文時代包含層出土礫石器 (4)



図III-23 縄文時代包含層出土石器（5）



図III-24 縄文時代包含層出土礫石器 (6)・石製品及び骨製品

すり石（20～25）

13点が出土している。全て包含層からの出土である。20～22の3点は素材礫の断面形が三角形状で稜に擦り面が見られ、その端部に敲打痕がある点で共通している。20は白色を呈する蛇紋岩製で、ウバロバイト（ざくろ石の一種）が粒状に含まれることから、夕張市字鹿島白金沢産と推定された（アースサイエンス株式会社 加藤氏の御教示）。21・22は砂岩製で、22は被熱により破損している。23は砂岩製の北海道式石冠の破片である。北海道式石冠の出土はこれ1点のみである。24は北海道式石冠の未製品の可能性が考えられるが、帯状の敲打がみられないことと北海道式石冠の出土がわずか1点のみであることからE類（その他）に分類した。25は未製品で正面に浅い擦痕がみられるが、欠損により廃棄されたと考えられる。

砥石（26～31）

包含層から欠損品も含め42点が出土している。石材は全て砂岩である。26は重量10kgを超える大型の板状礫で、砥面長軸に平行する6～100mm以上の長さの線条痕と、砥面の範囲外に2条1対で5～7mmの細かい線条痕が見られる。擦痕の方向は大きく2方向があり、すり面上部で交差している。27・28は角礫を素材とする砥石で、線状痕が見られる。27は両面、28は片面に砥面がある。29は亜角礫、30は円礫を素材とする砥石で、ともに欠損品である。31は所謂「四面砥石」で各面の粒度に差がみられる。

石皿・台石（32～35）

包含層からは54点が出土している。石材は泥岩の1点を除き全て砂岩である。32は石皿で、正面中央にすり面がみられる完形品で、使用面の素材礫の形状が殆ど変わらないことから獸皮や植物など柔軟なものが対象物として利用されたと思われる。33は表裏面の他、側面にもすり面があり破断面の凹凸が消えるほどの使用頻度であるが、より盛り上がっている面にはすり痕が見られないことから、この面全体は使用しない限定的な使用方法で、手に持たずに使用されていたと推定される。34は台石で、表裏面の敲打痕の他、弱いすり面も見られるが、敲打痕は粗く、またすり面も他の石皿等と比べて滑らかではない。35は台石で、たたき石に類似した形態的であるが、長軸175mm、短軸は135mmで掌中に収まらないこと、重量も914.0gと重いため台石とした。

加工痕のある礫（36・37）

12点が出土しており、全て包含層からの出土である。石材は青色片岩1点、泥岩1点を除き、砂岩である。36・37はともに砂岩製で、側面に連続した荒い剥離痕があり、使用された痕跡であると考えられる。

石製品（図III-24-38 図版18-38）

包含層より1点が出土している。滑石製で表面には粗い擦痕がある。また側面にも擦痕があり、稜を作出しているため、薄く方形の板状に加工する意図がうかがえるが、欠損破片のためどのような石製品であったかは不明である。（服部）

4. 骨製品（図III-24-39・40 図版18-39・40）

包含層から3点が出土しており、そのうち2点を図示した。39は倒木痕に焼骨片が多く混入していたため、土壤を回収しフローテーション処理を行った結果見つかったものである。断面形が隅丸三角形状の骨礫先端部片で、全面が研磨調整によって作出されており、アイヌ文化期の中柄の先端

部形状に類似している。A地区H-28区から出土しており、IV群D1類土器が密集している範囲でもあり、焼骨片集中のVBB-02と隣接していることから、繩文時代後期末葉の資料の可能性がある。40はシカなどの陸棲哺乳類の四肢骨と思われる管状骨表面に人為的なスリットがある。実測面に直線状のスリットが2条刻まれており、スリットの幅は約1.2mm、長さは欠損のため不明である。左側のスリットから破断しており、人為的に折り取られたものと思われ、本資料は骨角器の素材残片と考えられる。

(服部)

表III-16 繩文時代包含層出土礫石器属性表

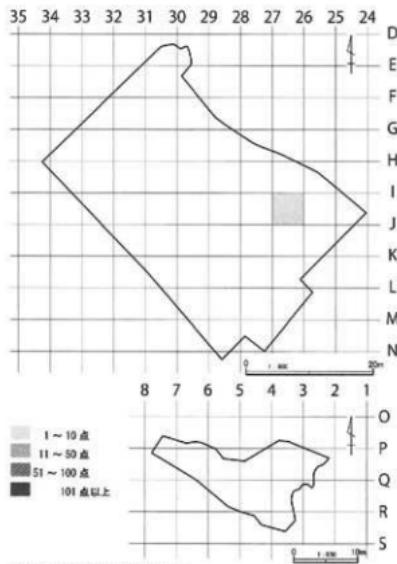
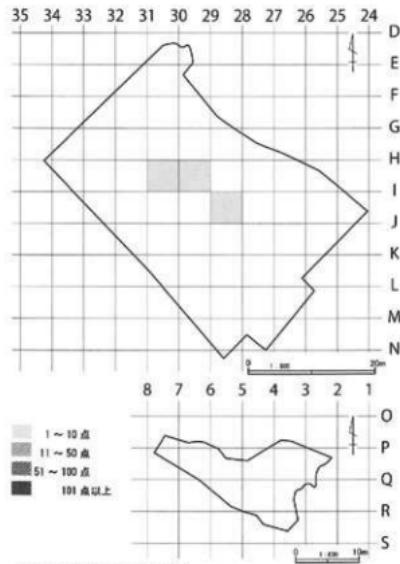
掲番号	図版番号	個体名	遺物番号	遺物名	分類	グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-19-1	15-1	-	15139	石斧	A	Q-4	VbL	110.0	56.0	29.5	280.0	Gr. Mod.	
III-19-2	15-2	-	14532	石斧	B	J-30	VbU	126.0	47.0	21.0	158.0	Gr. Mod.	石斧未製品
III-19-3	15-3	-	4781	石斧	D	J-30	VbU	(73.0)	46.0	21.0	(137.0)	Gr. Mod.	石斧未製品
III-19-4	15-4	-	17974	石斧	D	I-24	Va	107.0	42.0	20.0	127.0	Gr. Mod.	石斧未製品
III-19-5	15-5	-	40351	石斧	D	-	表紙	138.0	71.5	40.5	510.0	Gr. Mod.	石斧未製品
III-19-6	15-6	-	3214	たたき石	I A1	H-28	VbU	132.0	73.0	28.0	344.0	Sa.	
III-19-7	15-7	-	15140	たたき石	I A3	Q-4	VbL	176.5	79.0	19.5	350.0	Sa.	
III-19-8	15-8	-	12021	たたき石	I B1	H-30	VbU	162.0	52.0	38.0	380.0	Sa.	
III-20-9	15-9	-	12981	たたき石	I B1	H-32	VbL	148.0	56.0	57.0	500.0	Sa.	
III-20-10	15-10	-	14295	たたき石	I B1	H-30	VbU	134.0	47.0	43.0	280.0	Sa.	
III-20-11	15-11	-	16538	たたき石	I B1	H-29	VbL	129.0	41.5	35.0	155.0	Sa.	
III-20-12	15-12	-	17968	たたき石	I B2	I-24	VbU	93.0	54.0	37.0	230.0	Sa.	
III-20-13	15-13	-	3645	たたき石	I B3	I-30	VbU	150.0	90.0	56.5	670.0	Sa.	
III-20-14	15-14	-	3855	たたき石	II A3	J-28	VbU	127.0	82.5	52.0	590.0	Sa.	
III-20-15	15-15	-	40365	たたき石	II B2	I-27	Va	111.5	85.0	62.0	460.0	Sa.	
III-20-16	16-16	-	17934	たたき石	III A	H-29	VbU	89.0	79.0	21.0	169.0	Sa.	
III-20-17	16-17	-	6757	たたき石	IV	J-29	VbU	67.0	(53.5)	31.5	(138.0)	Qu.	
III-20-18	16-18	-	10104	たたき石	V	H-29	VbU	89.0	79.0	21.0	169.0	Sa.	被熱
III-21-19	16-19	-	40362	たたき石	VI	試掘	搅乱	116.0	91.0	45.5	466.0	Sa.	
III-21-20	16-20	-	17583	すり石	A	H-28	Vc	138.0	98.0	69.0	973.0	Ser.	夕張白金沢産
III-21-21	16-21	-	10382	すり石	A	H-31	VbU	133.0	79.0	63.0	564.0	Sa.	
III-21-22	16-22	-	17564	すり石	A	H-27	Vc	145.0	87.5	71.0	650.0	Sa.	被熱
III-21-23	16-23	-	15867	すり石	D	J-27	VbL	(62.0)	(48.0)	(64.5)	(191.0)	Sa.	
III-21-24	16-24	-	16516	すり石	E	H-28	VbL	172.5	120.0	74.5	2,260.0	Sa.	
III-21-25	16-25	-	46	すり石	E	F-29	VbU	153.0	(127.0)	66.0	(1,710.0)	Sa.	平坦面にすり痕あり
III-22-25	16-26	-	16772	砥石	I a	G-27	VbL	316.0	342.0	100.0	10,700.0	Sa.	
III-22-27	17-27	VST024	1940他	砥石	I b	K-28	Va	283.0	(202.0)	22.0	(1,113.0)	Sa.	接
III-22-28	17-28	VST018	1519他	砥石	I a	K-27	VbU	188.0	135.7	44.0	790.0	Sa.	接
III-23-29	17-29	-	16768	砥石	II	H-28	VbL	(158.0)	149.0	74.0	(1,920.0)	Sa.	
III-23-30	17-30	-	9332	砥石	II	H-28	VbU	93.0	88.0	35.5	390.0	Sa.	
III-23-31	17-31	-	15128	砥石	III c	P-4	VbL	(67.0)	50.0	55.0	(187.0)	Sa.	
III-23-32	17-32	-	11788	石皿	I	K-29	VbL	262.0	193.0	42.0	2,657.0	Sa.	
III-23-33	17-33	VST019	4416他	石皿	I	H-30	VbU	(158.0)	(126.0)	76.5	(1,660.0)	Sa.	接
III-23-34	18-34	-	11991	台石	I	H-28	VbU	282.0	190.0	73.0	4,700.0	Sa.	
III-24-35	18-35	-	16732	台石	II	I-30	VbL	175.0	135.0	35.0	914.0	Sa.	
III-24-36	18-36	-	8697	加工痕のある砾	-	H-29	VbU	169.5	(89.0)	53.0	(710.0)	Sa.	
III-24-37	18-37	-	17594	加工痕のある砾	-	H-31	VbL	90.0	79.5	39.0	290.0	Sa.	

表III-17 繩文時代包含層出土石製品属性表

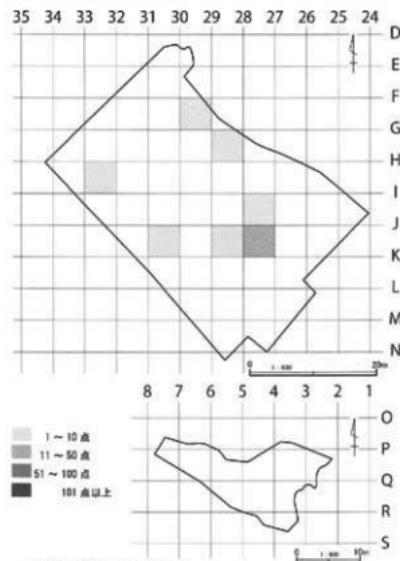
掲番号	図版番号	個体名	遺物番号	遺物名	分類	グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-24-38	18-38	-	20733	-	-	R-3	VbU	(23.2)	(19.8)	(6.7)	(4.4)	滑石	未製品

表III-18 繩文時代包含層出土骨製品属性表

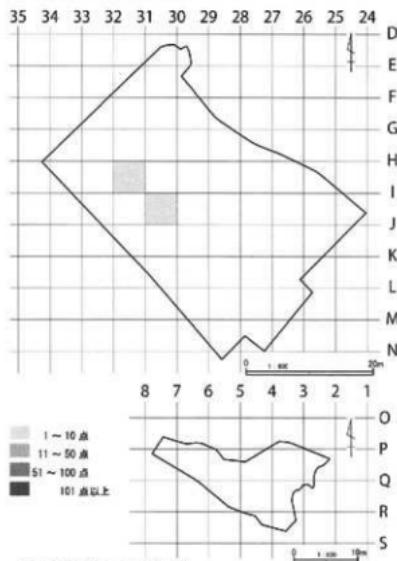
掲番号	図版番号	個体名	遺物番号	遺物名	分類	グリッド	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
III-24-39	18-39	-	40425	骨鱗	-	-	搅乱	(9.8)	(6.7)	(4.9)	(0.2)	B.	
III-24-40	18-40	-	40426	擦切残片	-	H-28	Va	(16.0)	(11.2)	(5.6)	(0.7)	B.	



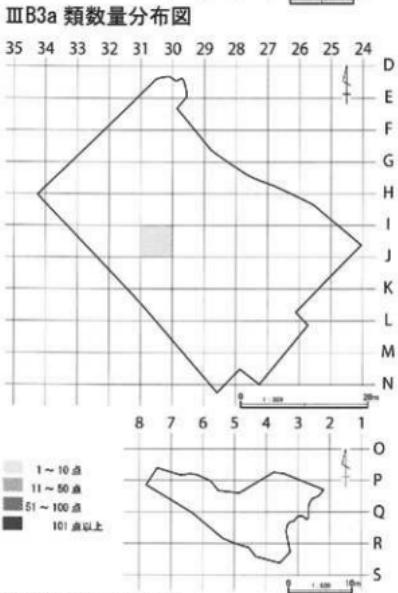
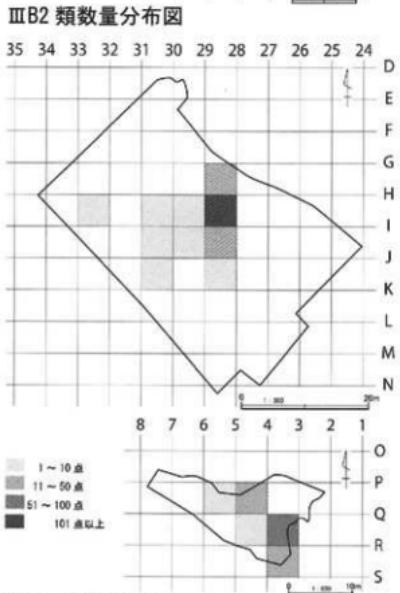
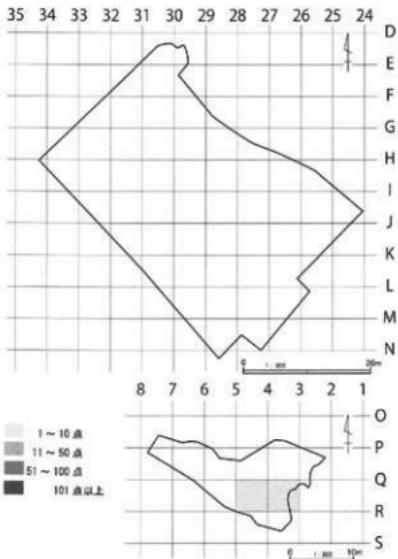
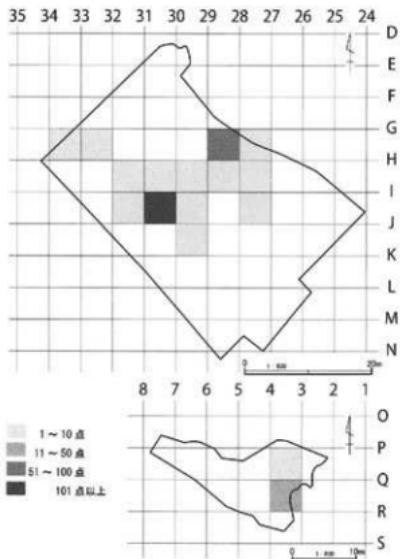
II A1類数量分布図



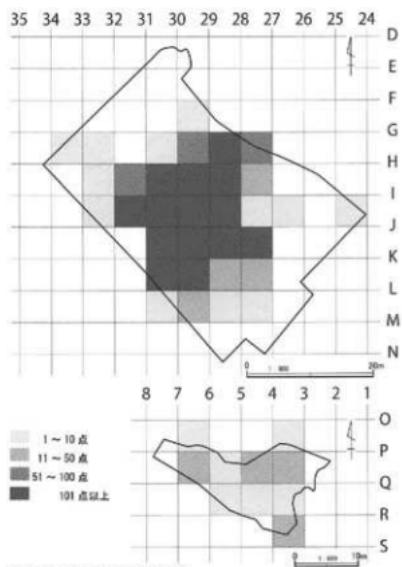
II A2類数量分布図



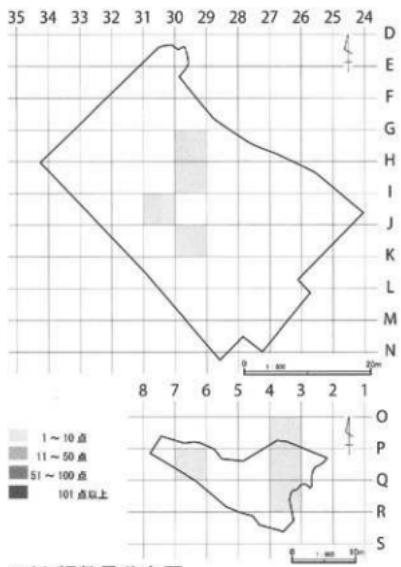
図III-25 土器数量分布図(1)



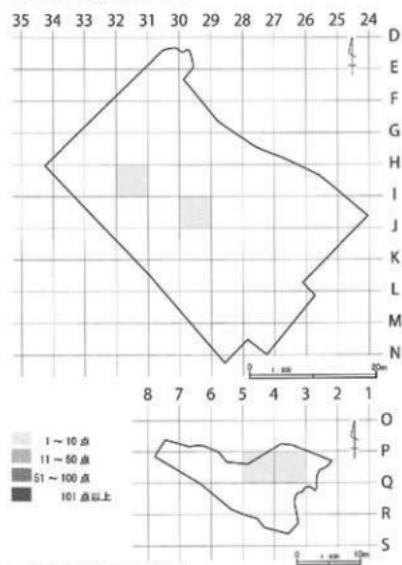
図III-26 土器数量分布図（2）



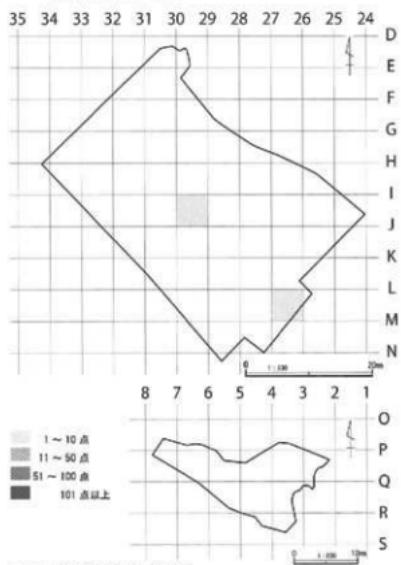
IV-D1 類数量分布図



VA-1 類数量分布図

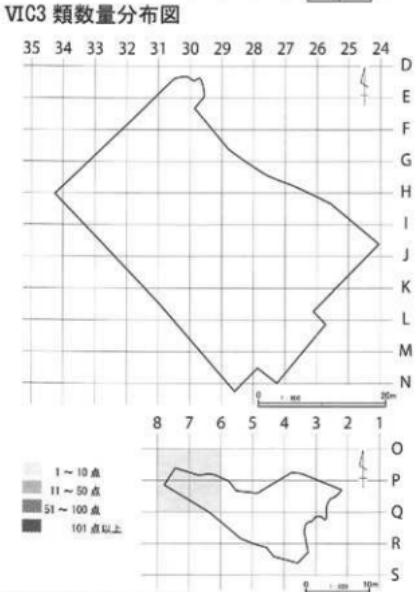
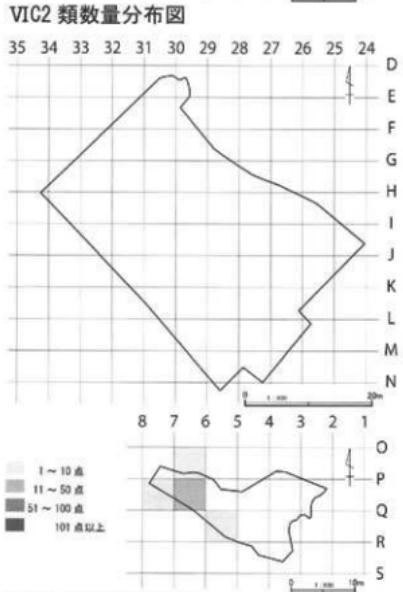
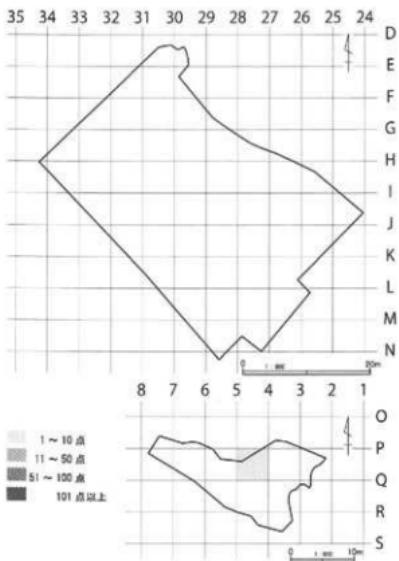
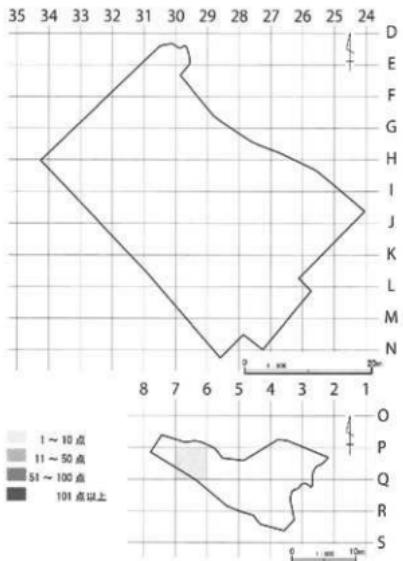


VB-1 類数量分布図

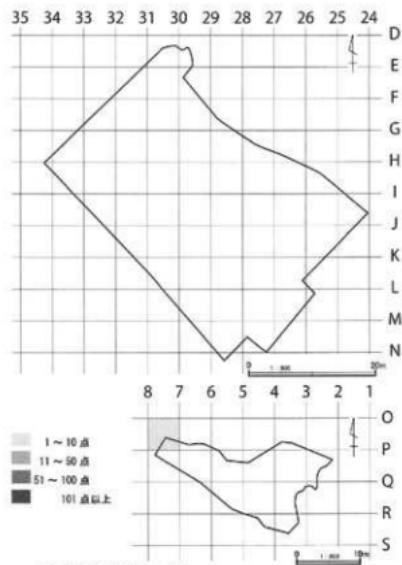


VIB-1 類数量分布図

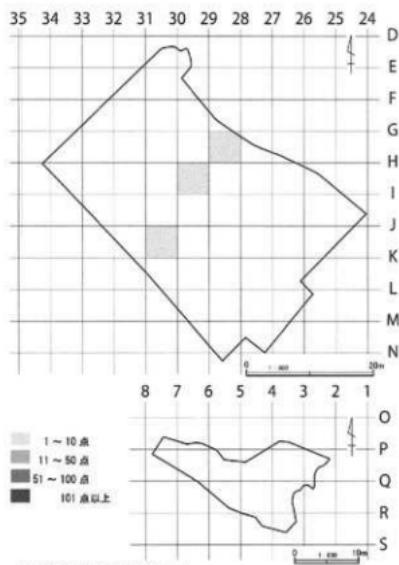
図III-27 土器数量分布図(3)



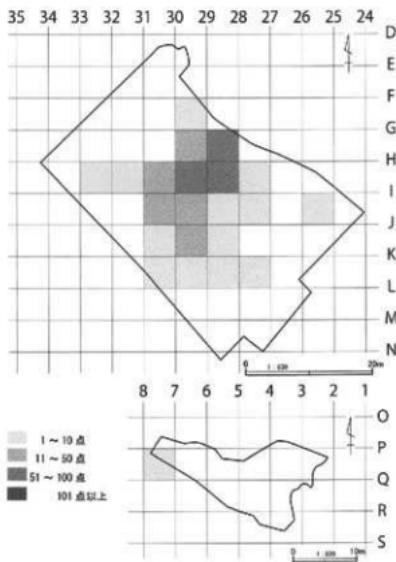
図III-28 土器数量分布図(4)



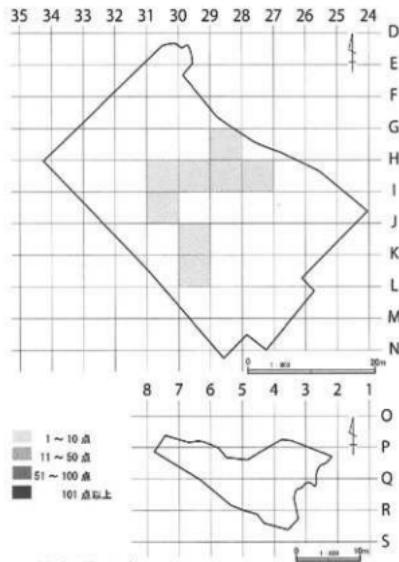
VII B1 類数量分布図



土製品数量分布図

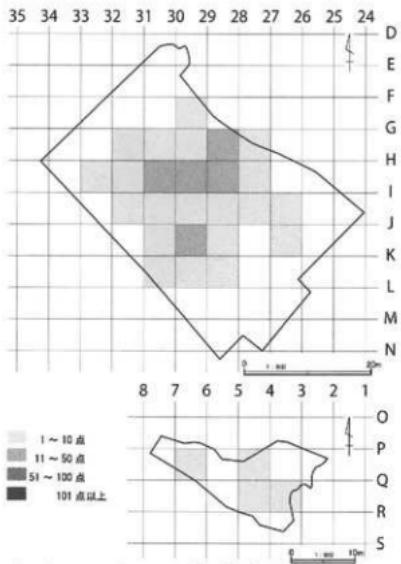


ポイント類数量分布図

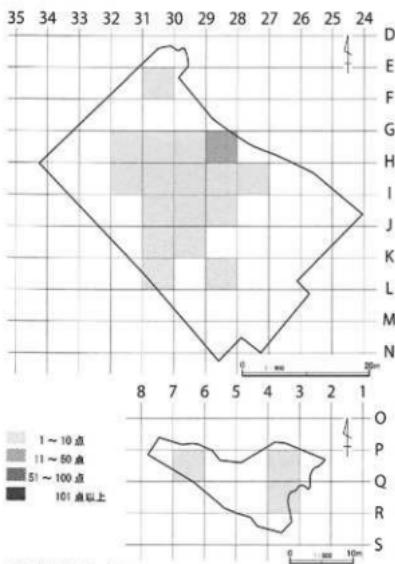


石錐数量分布図

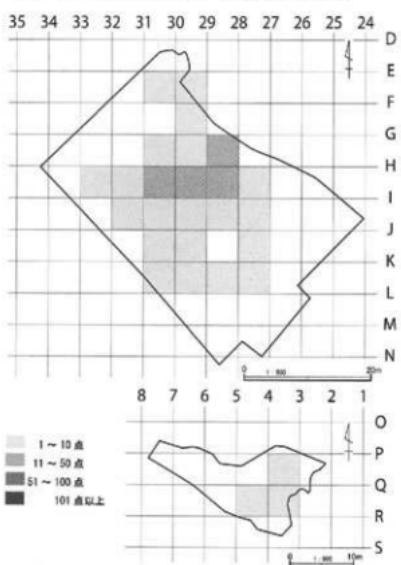
図III-29 土器数量分布図(5)・石器数量分布図(1)



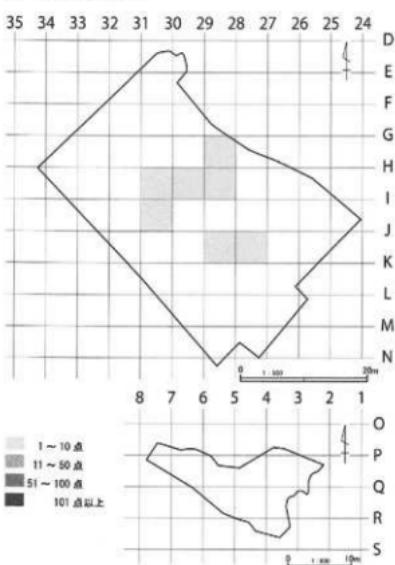
ナイフ・スクレイバー類数量分布図



RF 数量分布図

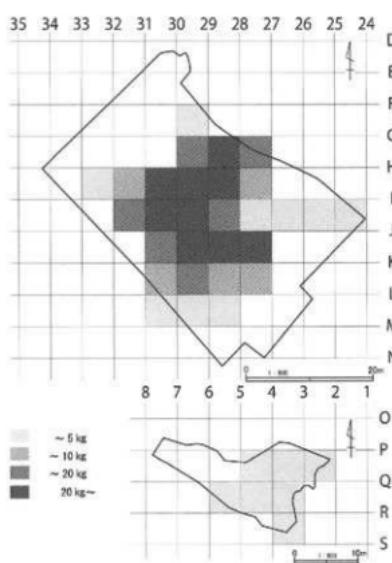
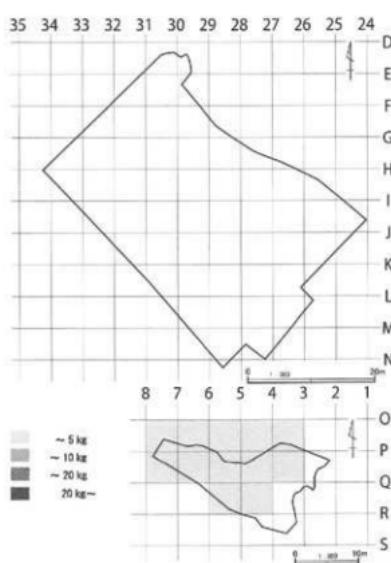
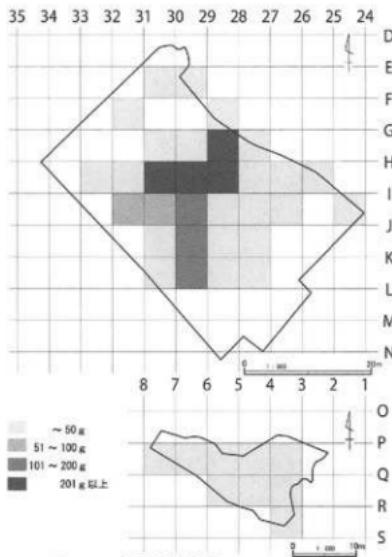
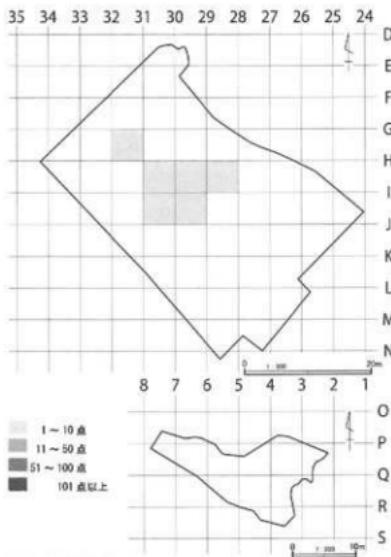


UF 数量分布図



石核数量分布図

図III-30 石器数量分布図（2）



図III-31 石器数量分布図(3)・重量分布図

第IV章 自然科学分析

第1節 オニキシベ6遺跡における放射性炭素年代

(株) 加速器分析研究所

1 测定対象試料

オニキシベ6遺跡は、北海道勇払郡厚真町字幌内482-2（北緯42°46'00"、東経141°59'13"）に所在する。測定対象試料は、Vb層上位の焼骨片集中02（VBB-02）出土炭化種子（No.004:IAAA-123073）、H-29区包含層Vb層上位出土炭化種子（No.012:IAAA-123074）の合計2点である（表1）。炭化種子はいずれもクルミ属に同定されている。

Vb層は樽前cテフラを被覆し、縄文時代後期末葉堂林式期の遺物が多数出土している。

2 测定の意義

オニキシベ6遺跡は縄文時代後期末葉堂林式期のほぼ単純遺跡であり、当該期の年代データを蓄積する上でよい試料となる。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 测定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)、¹³C濃度(¹³C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として選る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal109データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、Vb層上位のVBB-02出土炭化種子No.004が 3120 ± 30 yrBP、H-29区包含層Vb層上位出土炭化種子No.012が 3110 ± 30 yrBPである。Vb層上位から出土した2点の値は、誤差($\pm 1\sigma$)の範囲でよく一致する。

历年較正年代(1σ)は、No.004が1435~1386cal BCの範囲、No.012が1426~1322cal BCの間に2つの範囲で示される。いずれも縄文時代後期末葉頃に相当する年代値で(小林編 2008)、出土土器の時期と整合的である。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337–360
- 小林達雄編 2008 總覽縄文土器、總覽縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal109 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111–1150
- Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355–363

表1

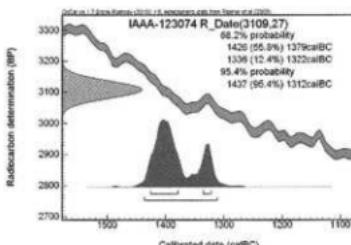
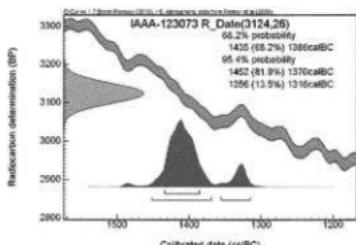
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-123073	No.004	V層焼骨片集中02(V BB-02) Vb層上位	炭化種子 クルミ殻片	AAA	-28.91 \pm 0.35	3,120 \pm 30	67.78 \pm 0.23
IAAA-123074	No.012	H-29区包含層 Vb層上位	炭化種子 クルミ殻片	AAA	-24.02 \pm 0.54	3,110 \pm 30	67.90 \pm 0.23

[#5579]

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-123073	3,190 \pm 30	67.24 \pm 0.22	3,124 \pm 26	1435calBC - 1386calBC (68.2%)	1452calBC - 1370calBC (81.9%) 1356calBC - 1316calBC (13.5%)
IAAA-123074	3,090 \pm 30	68.04 \pm 0.22	3,109 \pm 27	1426calBC - 1379calBC (55.8%) 1336calBC - 1322calBC (12.4%)	1437calBC - 1312calBC (95.4%)

[参考値]



[参考]曆年較正年代グラフ

第2節 黒曜石原産地分析

佛 第四紀 地質研究所

1 分析試料の調整と実験条件

(1) 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製 JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており、 ^{63}C ～ ^{92}U までの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30kV、4mA）の採用で微量試料～最大290mm ϕ ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクFP法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rb、加速電圧＝30kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量%）で $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$, $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$, $\text{K}_2\text{O}\text{-CaO}$ の各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

2 分析結果

表1 化学分析表には分析結果に基づいて原産地も記載してある。

1) 表1に示すように、最も多く検出されたのは赤井川で7個、次いで所山の3個である。

2) 図1～図4を検討すると図2 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図では各試料は領域を少し外れており、幾分被覆しているのかもしれない。

引用文献

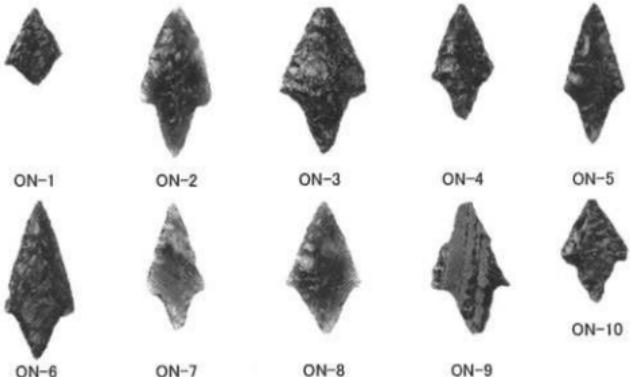
井上 巍（2008）東北日本の原産地黒曜石 北海道編

表1 化学分析表

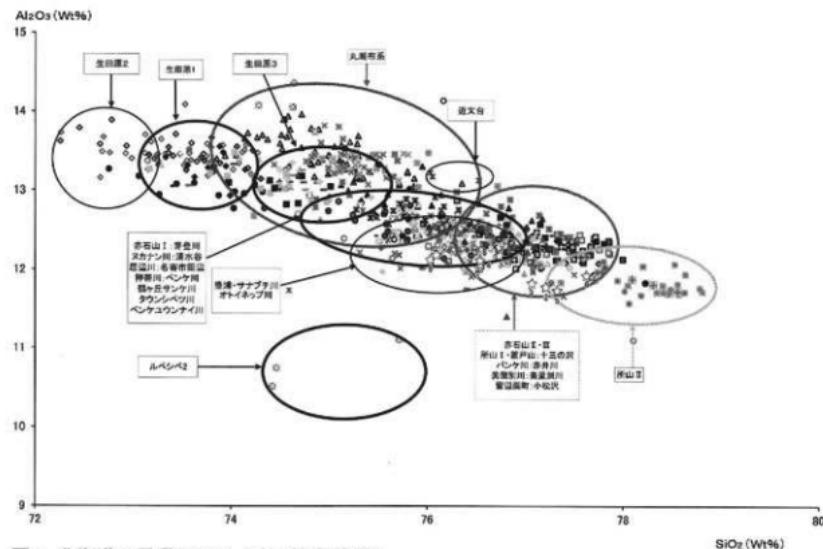
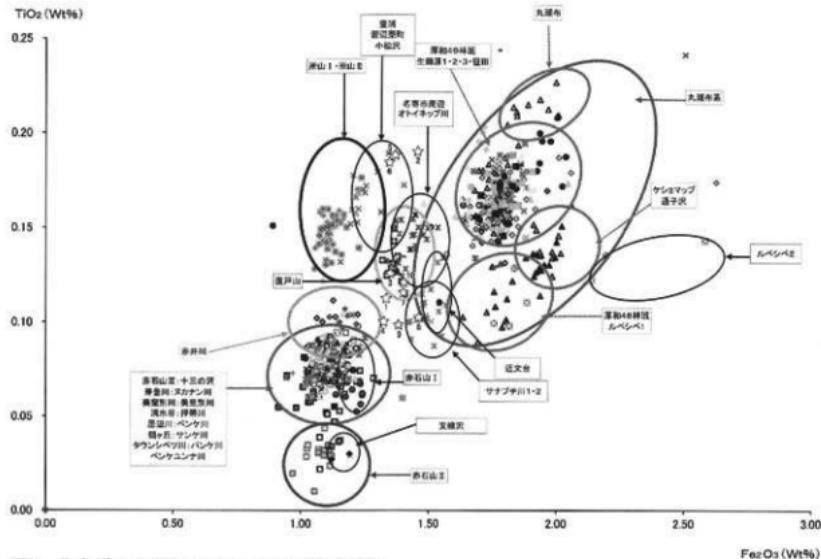
試料名	時期	器種	遺物番号	原産地	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂
ON-1	調文 後期 宋葉	石鏹	3057	赤井川	3.8705	0.0000	12.0111	76.5347	0.4850	4.6642	0.8599	0.1130
ON-2		石鏹	8106	所山	3.7167	0.0000	11.7569	77.2164	0.4579	4.1392	0.9416	0.1905
ON-3		石鏹	11075	赤井川	3.6441	0.0000	11.8054	77.0733	0.5497	4.5479	0.7748	0.1263
ON-4		石鏹	11229	赤井川	3.7247	0.0000	12.0419	76.5509	0.4720	4.8230	0.8385	0.1007
ON-5		石鏹	14994	所山	3.6239	0.0000	11.7126	77.3320	0.5153	4.1813	0.9628	0.1887
ON-6		石鏹	9090	所山	2.9959	0.0000	11.9042	77.6304	0.5313	4.3447	0.9457	0.1848
ON-7		石鏹	9096	赤井川	3.7859	0.0000	12.1563	76.7425	0.5341	4.3427	0.7973	0.1181
ON-8		石鏹	9760	赤井川	3.7143	0.0000	12.0946	76.5450	0.4748	4.6949	0.7703	0.1029
ON-9		石鏹	5919	赤井川	4.1282	0.0000	12.1077	76.0355	0.4674	4.7485	0.8821	0.0989
ON-10		石鏹	3505	赤井川	3.9456		12.1689	76.0977	0.5148	4.7399	0.8791	0.1214

表2 図1~4凡例

● 丹波川	● 赤井川	□ 丹波山字	△ 丹波山字	× 丹波山字
□ 丹波山字 十勝石	■ 丹波山字 白土の沢	■ 丹波山字 色見	■ 丹波山字 色見どら	■ 丹波山字 ロック層
▲ 丸瀬布系 南瀬48井群	▲ 丸瀬布系 所和45井群	● 丸瀬布系 丸瀬48井	▲ 丸瀬布系 ケシマップ	▲ 丸瀬布系 ケシマップ2
▲ 丸瀬布系 マゼンツ	● 丹波山 78井群	● 丹波山 78井沢	● 丹波山	▲ 丹子沢
×	×	×	×	×
● 丸瀬布系 N1	● 丸瀬布系 N2	● 丸瀬布系 N3	● 丸瀬布系 N4	● 丸瀬布系 N5
※ 丹波山 N1	※ 丹波山 N2	※ 丹波山 N3	※ 丹波山 N4	※ 丹波山 N5
● 丹波川	● ルビペ	● ルビ	● ルビ川	● ルビ川
■ 丹波谷	■ 赤井川	■ 赤井川	■ 下川町	■ 丹波谷川
○ 無記	○ 生駒山	○ 生駒山	○ 生駒山	○ 生駒山
○ 無記 滅石	○ 生駒山 滅石	○ 生駒山 滅石	○ 生駒山 滅石	○ 生駒山 滅石
○ 生駒山 滅石	● 生駒山 滅石	● 生駒山 滅石	● 生駒山 滅石	● 生駒山 滅石
○ 田代川 芥見川	● 田代川 芥見川	● 田代川 芥見川	● 田代川 芥見川	● 田代川 芥見川
○ 田代川 大根	● 田代川 大根	● 田代川 大根	● 田代川 大根	● 田代川 大根
○ 上木根町 ランタ川	○ ベケ川 沢口	● ベケ川 沢口	● ベケ川 大手一場	● 上木根町 ランタ川
○ ベケ川 ランタ川	● ベケ川 小松沢	● ベケ川 小松沢	● ベケ川 大手一場	○ ランタ川 ベケ川 七ノ沢
○ 生駒原町 及生沢4	● オナバチ川	● オナバチ川	● 生駒原町 及生沢1	● 生駒原町 及生沢2
○ 木曾町 リケ川	● サナブチ川の跡の説明	● サナブチ川の跡の説明	● カリブ川河岸	● 生駒原町 及生沢
● 木曾町 リケ川	● 塚古川上流域	● 塚古川中流域	● 木曾町秋父割	☆ オナバチ川 逆流



0 1 2 cm

図1 北海道の黒曜石 SiO_2 - Al_2O_3 図(標準図)図2 北海道の黒曜石 Fe_2O_3 - TiO_2 図(標準図)

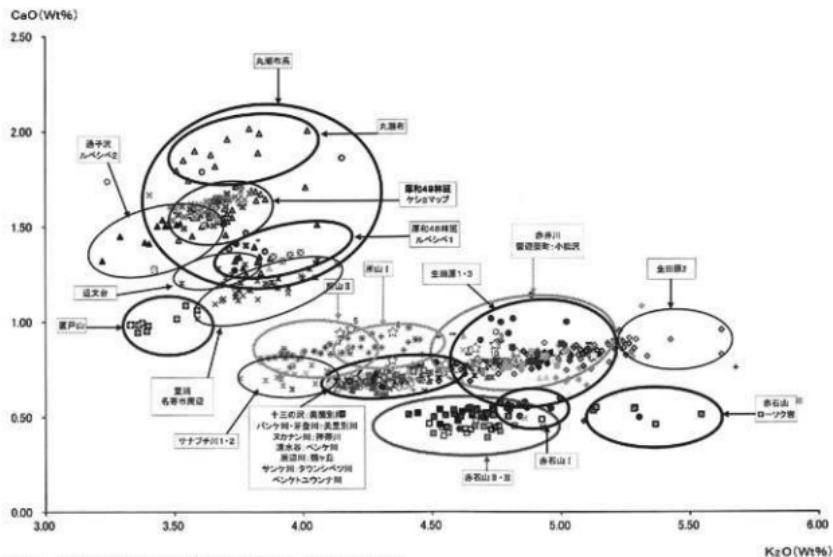


図3 北海道地方の黒曜石K₂O-CaO図(標準図)

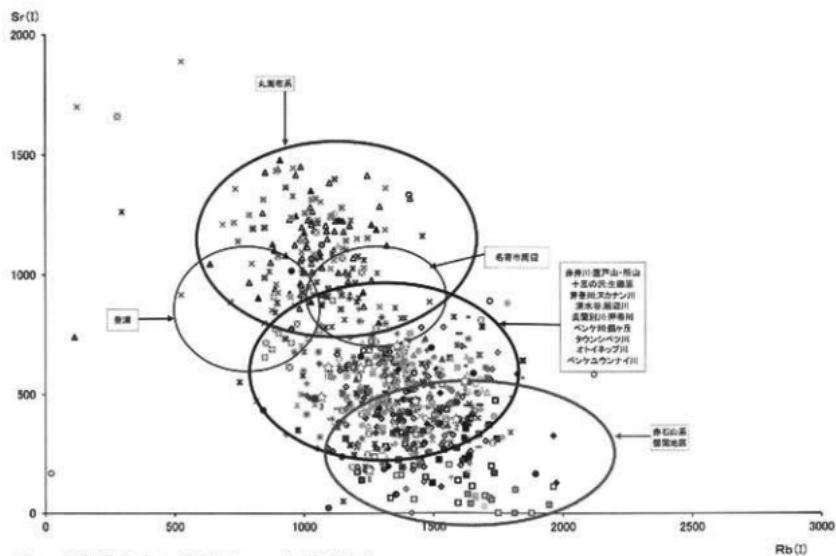


図4 北海道地方の黒曜石Rb-Sr図(標準図)

第3節 北海道勇払郡厚真町オニキシベ6遺跡の動物

高橋 理／千歳市埋蔵文化財センター

はじめに

平成14年度から開始された厚真川上流域における厚幌ダム建設関連の発掘調査において、まとまつた出土資料の出土はオニキシベ6遺跡をもって初出とする。遺物は、擦文文化期、統繩文文化期、縄文晚期～早期である。

筆者に分析の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に心より御礼申し上げます。

出土動物

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

クジラ偶蹄目 Cetartiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

若干のコメント

Vb 層上位におけるイノシシの出土が特筆される。すべて焼けており、道内各地の例と同様といえよう。成獣・幼獣の区別ができる例はなかったが、幼獣がごく多いという印象はない。今後当地域の調査が増えれば、縄文後期の動物相のあり方が明確になってくると思われる。

参考文献

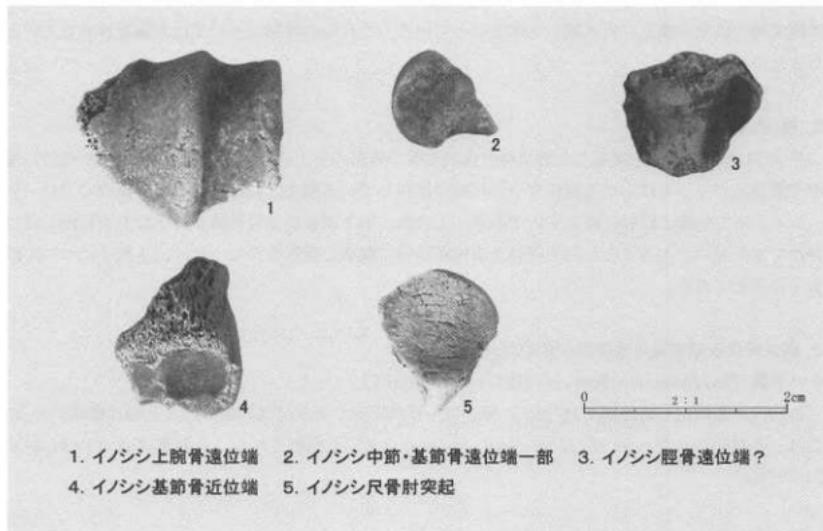
Carden, R. F. and Hayden, T. J. 2002

Epiphyseal Fusion in the Postcranial Skeleton as an Indicator of Age at Death of European Fallow Deer (*Dama dama dama*, Linnaeus, 1758)
9th ICAZ Conference, Durham 2002

Recent Advance in Ageing and Sexing Animal Bones, 227-236 Oxbow Books
Perdue, J. R. 1983 Epiphyseal closure in white-tailed deer. *Journal of Wildlife Management*
47 (4), 1207-1213.

表1 フローテーション法 動物遺存体同定一覧

時期	遺構/グリッド	層位	出土動物	部 位	L/R	点数	備 考
原文	P-I	IIIbL	哺乳類 non det.	部位不明		多数	被熱
	P-I	IIIbL	哺乳類 non det.	部位不明		26	被熱
VBB-01	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
VBB-02	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
		イヌ科? sp.	末節骨?			1	被熱
VBB-03	VbU	シカ	中手骨? 近位端一部		?	1	被熱
		哺乳類 non det.				多数	被熱
G-28	Va	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱 被熱
		イノシシ	中節骨 近位端			1	被熱
		イノシシ	基節骨 近位端			1	
		イノシシ	基節骨 遠位端一部			1	
G-28	VbU	イノシシ?	尺骨 射突起? 一部		?	1	
		イノシシ?	中節骨or基節骨 遠位端一部			1	
		イノシシ?	上腕骨 遠位端		?	2	
G-29	Va	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
G-29	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	
H-28	Va	哺乳類 non det.	部位不明			多数	
H-28	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
H-29	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
H-30	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
I-29	VbU	哺乳類 non det.	部位不明			多数	被熱
I-30	VbU	哺乳類?	部位不明			26	被熱
I-31	VbU	不明 non det.	部位不明			6	被熱
不明	B地区	KR	哺乳類 non det.	部位不明		多数	被熱



第4節 オニキシベ6遺跡出土の植物種子について

Project Seeds 考古植物研究会 椿坂恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡の名称：オニキシベ6遺跡（J-13-118）

所在地：勇払郡厚真町字幌内482-2, 二級河川厚真川河川敷

発掘調査機関：厚真町教育委員会

発掘調査期間：平成24年7月23日～平成24年9月21日

発掘調査面積：1,401 m²

オニキシベ6遺跡は厚真町市街地より約15Km入った山間部の厚真川上流域に形成された河岸段丘上に存在する。調査区は45m×35mの厚真川の自然堤防上にあるA地区と23m×12mの狹小な独立丘状のB地区に分かれ、A地区的調査区内は旧家屋の建設に伴って削平、擾乱を受けており、約半分の面積はVII層の基盤シルト層まで露出していた。調査区内の標高は両地区ともに54～56mで、現厚真川水面との比高差は約3mである。段丘面としては、樽前d火山灰（降下約8,000年前）の堆積がなく、この地域における低位段丘面T₁に当たる。

発掘調査では擦文化期、続縄文化期、縄文時代の遺構、遺物が検出されており、圧倒的主体は縄文時代後期末葉三ツ谷式期が主体となっている。これらの詳細については本編を参照していただきたい。

2. 扱った資料

平成24年度に調査を実施した縄文時代後期末葉の資料のみで、陸棲哺乳類を主体とする焼骨片集中や調査区グリッドにおける焼骨片や炭化物が散在している調査区包含層の土壌を採取しフローテーション法で処理、回収されたものである。その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。これらの資料を実体顕微鏡で観察し撮影を行なった。出土種子については表1に示しておく。

3. 縄文時代後期末葉の遺構から出土した種子

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版1-1:G-28から出土)

G-28区から酸化した状態で1粒出土。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。計測値はL3.50×W2.20×T0.70 (mm)

ブドウ科VITIDACEAE (図版1-2a : VBB-02から出土)

焼骨片集中 VBB-01から酸化した状態で1粒と、VBB-02から3粒と8片出土。堅果は広倒卵形。背面には凹みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなし稜の両側に針形の凹みがある。これらの特徴からブドウ属に分類される。形態の類似した種子にヤマブドウ *Vitis coignetiae*

Pulliat.、サンカクヅル *Vitis flexuosa* Thunb.、エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata*, があるが、サンカクヅル、エビヅルの分布域は北海道の南部に限られているという。形態の特徴からヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat であろう。計測値は L3.80 × W3.20 × T2.10 (mm)

ウルシ科 ANACARDIACEAE (図版1-3 : VBB-02から出土)

焼骨片集中 VBB-02から1粒出土。種子は歪んだ扁円形でやや扁平。先端は急に尖る。北海道ではこれらと類似した形態を持つ種子としてヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq.、ツタウルシ *Rhus ambigua* Lavallee ex Dippel.、ヌルデ *Rhus javanica* L. がある。出土資料はヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. に似るが、一部破損しており詳細な分類は出来なかった。計測値は L2.70 × W3.20 × T1.80 (mm)

クリ属 *Castanea* Mill. (図版1-4a : I-30から出土)

I-30区から1片出土。堅果は三角状偏円形。長さより幅が広く一側面は丸みがあり、反対面は平らな形が多い。子葉の表面には縦皺がある。このような特徴からクリ属と判断される。破片の計測値は L7.70 × W6.30 (mm)

コナラ属 *Quercus* L. (図版1-5a : VBB-02から出土)

焼骨片集中 VBB-02から2片出土。子葉は長楕円形で表面には縦条がある。このような形態を持つ種類にはミズナラ *Quercus crispula* Blume.、コナラ *Quercus serrata* Thunb.、カシワ *Quercus dentata* Thunb. などがある。細片のため詳細な分類は出来なかった。また、細片のため計測はしていない。

クルミ属 *Juglans* L. (図版1-6 : H-29から出土)

各遺構から出土。内果皮はすべて碎片である。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maxim. と判断される。細片のため計測していない。

不明 (図版1-7a : VBB-01から出土)

焼骨片集中 VBB-01から出土。図示した資料はイネ科草本の稈の部分と考えられる形態である。しかし、資料の保存状態が悪いため、詳細な分類は出来なかった。細片のため計測していない。

不明炭化物 (図版1-8 : II-28から出土)

II-28・29区から出土。被熱によるダメージ大きく詳細な分類は出来なかった。径 10mm くらいの炭化物。

その他の不明資料は、極めて保存状態が悪いため分類できなかった。

4. 若干のコメント

検出された植物種子はキハダ属、ブドウ科、ウルシ科、クリ属、コナラ属、クルミ属で、いずれも可食性、あるいは利用可能のものが多い木本の堅果類である。

今回、注目したいのは、厚真町の発掘調査で始めてクリ属が検出されたことである。クリは日本各地に分布するブナ科クリ属の落葉広葉樹木である。日本列島の植生史から、トチノキやクリが北海道に進出した正確な時期は不明であるが、ブナは約8,500年前には本州の北端まで達していたという（辻ほか 1983）。約8,500年前から5,300年前ころまでは津軽海峡を越えて、北海道西南部に達し、約800年ころ前には北桧山に、そして約350年ころ前までは現在の自生北限である黒松内低地帯に達したとされている（五十嵐ほか 1991）。クリが進出した北海道では渡島、後志、石狩、胆振、日高地方に分布する。山田らによるとクリの自生北限である石狩低地帯以南の地域で、クリの出現は縄文時代前期後半からだという（山田・柴内 1997）。その後の調査で北海道中央部の統縄文時代の遺跡からは約1,700個体の子葉が出土し、その多くは子葉の中央部に小孔があげられており、こうした様相はアイヌ民俗例もあり、食料として乾燥保存された状態を示すものであろうという（上野 1989）。

今回の調査で得られた、たった1片のクリ子葉であるが、今後の調査において、厚真町域におけるクリの出土状況とその利用方法などを検討して行く上で、重要な資料を得ることが出来た。今後もこうした考古植物学的な事例を蓄積して行くことが重要と考える。

引用文献

- 辻 誠一郎・宮地直道・吉川昌伸：1983「北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変遷」『第四紀研究』Vol. 21 No. 4、301-314
小野有五・五十嵐八重子：1991「完新世の森林と気候の変化」『北海道の自然史』181-205 北海道大学図書刊行会
山田悟郎・柴内佐知子：1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類」『北海道開拓記念館研究紀要』代25号 17-29 北海道開拓記念館
上野秀一：1989「札幌市K135遺跡4丁目地点出土のクリについて」『PROJECT SEEDS NEWS』NO. 2 3 Project Seeds

表1 炭化種子一覧表

時期	遺構名/グリッド	層位	キハダ属 粒	ブドウ科 粒	ウルシ科 粒	クリ属 片	コナラ属 片	クルミ属 粒	不明 粒	不明炭化物 片	備考
	VBB-01	V blU	1							1	
	VBB-02	V blU		3	8	1		2	3.991	1	
	VBB-03	V blU							0.302		
調 文	G-28	V a							0.112		
後 期	G-28	V blU	1			5			2.392		
末 葉	H-28	V a				1			0.682		
	H-28	V blU				1			0.946	1	
	H-29	V blU							1.873	2	1
	I-29	V blU							0.109		
	I-30	V blU					1		0.010		
	SITE B	KR							0.001	4	

酸化した状態

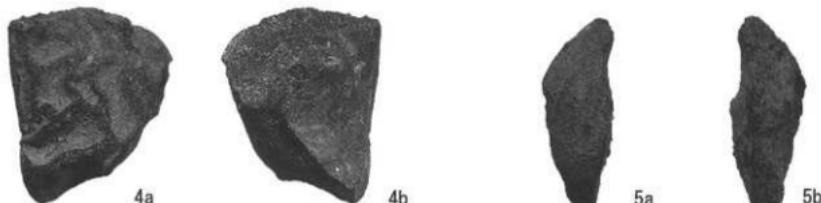


キハダ属

ブドウ科背面

腹面

ウルシ科



クリ属子葉 表面

内面

コナラ属子葉 表面

内面



クルミ属内果皮

6



不明草本 表面

内面

不明炭化物

図版1 出土炭化種子類

引用・参考文献

- 赤石慎三 1999 「苫小牧地方の円筒上層式について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1
- 厚真町 1986 『厚真町史』
- 厚真町教育委員会 2002 『鰊沼2遺跡』
- 厚真町教育委員会 2004 『厚幌1遺跡』
- 厚真町教育委員会 2005 『鰊沼3遺跡』
- 厚真町教育委員会 2006 『鰊沼3遺跡(2)』
- 厚真町教育委員会 2006 『上幌内モイ遺跡(1)』
- 厚真町教育委員会 2007 『上幌内モイ遺跡(2)』
- 厚真町教育委員会 2009 『上幌内モイ遺跡(3)』
- 厚真町教育委員会 2009 『ニタップナイ遺跡(1)』
- 厚真町幌内自治会 1997 『幌内のあゆみ』
- 厚真村 1956 『厚真村史』
- 厚真村郷土研究会 1962 『厚真村古代史』厚真村郷土研究会
- 乙部町教育委員会 1976 『元和』
- 乙部町教育委員会 1987 『栄浜遺跡』
- 小野 尚・小野有五他 2003 『日本の地形2 北海道』東京大学出版会
- 河野広道・藤本英夫 1966 「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』日本考古學會
- 早田 勉 2006 「上幌内モイ遺跡後更新統の層序とテフラ」『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 苫小牧市教育委員会 1997 『柏原5遺跡』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群II』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1990 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群III』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IV』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群V』
- 野澤謙庵 1892 「蝦夷記」『續々群書類從第九』
- 藤本英夫 1961 「御殿山ケーレン墳墓群遺跡について」『季刊 民族学研究』
- 益富壽之助 1987 『原色岩石圖鑑』(全改訂新版) 保育社
- 松浦武四郎(吉田常吉訳) 1962 『蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』時事通信社
- 松浦武四郎(高倉信一郎校訂) 1985 『戊午東西蝦夷山川地理歌詞日誌』中 北海道出版企画センター
- 松野久也・石田正夫 1960 『1:50,000 地質図解説明書 早来』北海道開発庁

オニキシベ6遺跡

写真図版

図版1



1. 遺跡遠景 E→



2. A地区V層調査前状態 E→



3. B地区調査前状態 W→



4. A地区完掘状態 E→



5. B地区完掘状態 SE→

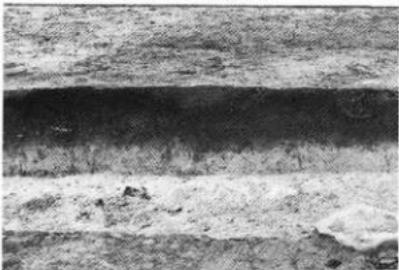
図版2



1. A地区北西壁土層断面 SE→



2. J-28区 旧河道土層断面 W→



3. I-28区 高位部土層断面 W→



4. B地区土層断面 E→



5. B地区基盤土層断面 SE→

図版3



1. TP-01完掘 E→



2. TP-01断面 E→



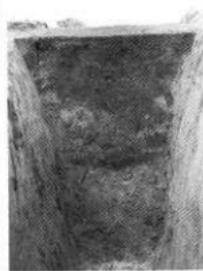
3. TP-02完掘 N→



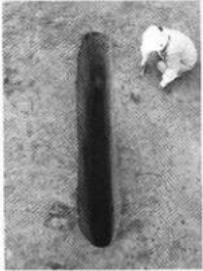
4. TP-02断面 N→



5. TP-03完掘 S→



6. TP-03断面 S→



7. TP-04完掘 E→



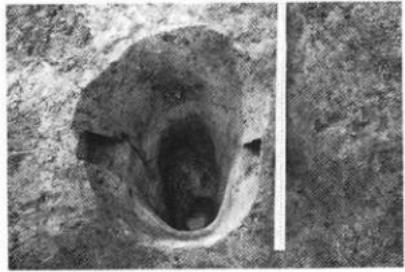
8. TP-04断面 E→



9. TP-05完掘 E→



10. TP-05断面 E→



11. TP-06完掘 E→



12. TP-06断面 E→

図版4



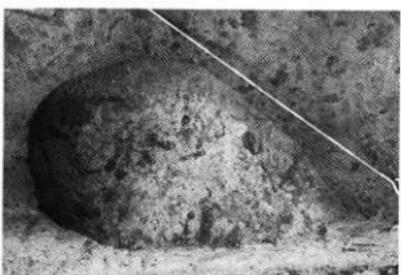
1. TP-07完掘 S→



2. TP-07断面 S→



3. A地区V層調査状況 N→



4. VP-02完掘 SW→



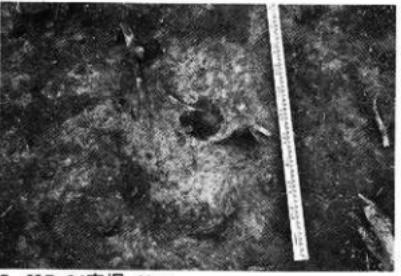
5. VP-02断面 SW→



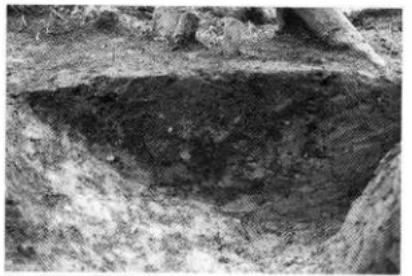
6. VP-03完掘 S→



7. VP-03断面 S→



8. VP-04完掘 N→



9. VP-04断面 N→

図版5



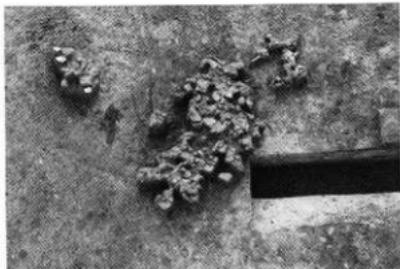
1. VPB-01出土状態 E→



2. VPB-02出土状態 NW→



3. VPB-03出土状態 W→



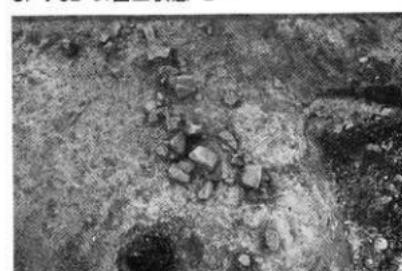
4. VPB-04出土状態 E→



5. VSB-01出土状態 E→



6. VSB-01断面 E→

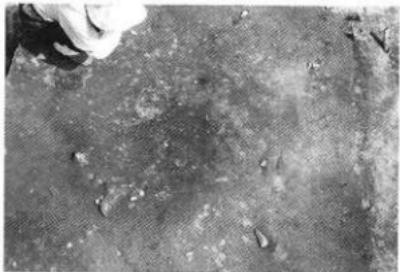


7. VSB-02出土状態 E→



8. VSB-03出土状態 SW→

図版6



1. VBB-01検出 W→



2. VBB-01断面 W→



3. VBB-02断面 S→



4. VBB-02遺物出土状態 N→

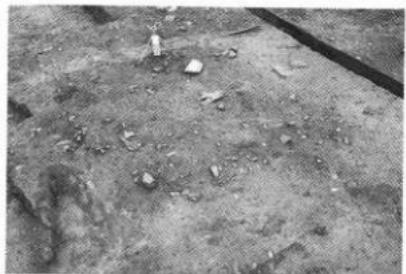


5. VBB-02完掘 S→

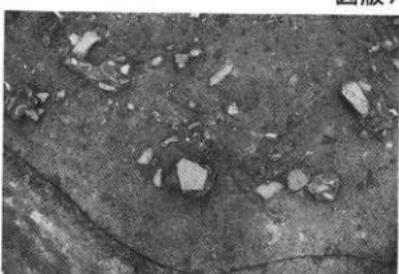


6. VBB-02周辺遺物出土状態 S→

図版7



1. VBB-03出土状態 NE→



2. VBB-03焼骨片検出状態 NE→



3. G・H-28区 Va層遺物出土状態 SW→



4. I-29・30区 Vb層上位遺物出土状態 S→



5. G-28区 滑車形耳飾出土状態 S→



6. B地区 西側続縄文土器出土状態 SE→

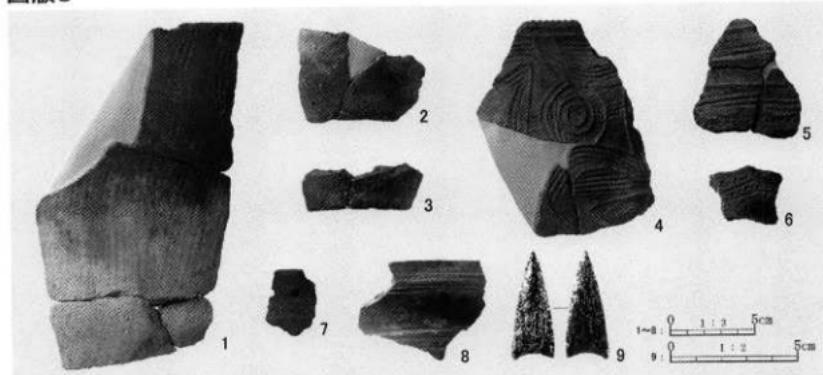


7. P-6区 続縄文土器 S→

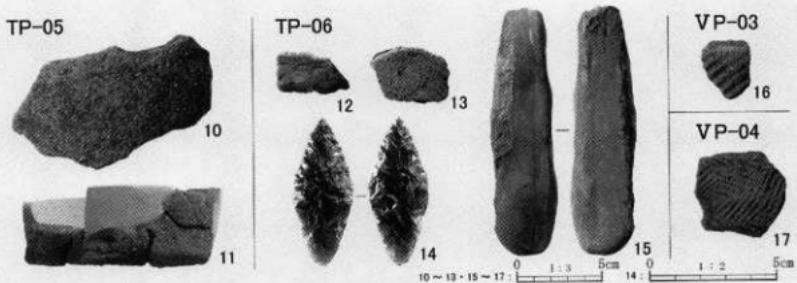


8. B地区III層調査状況 E→

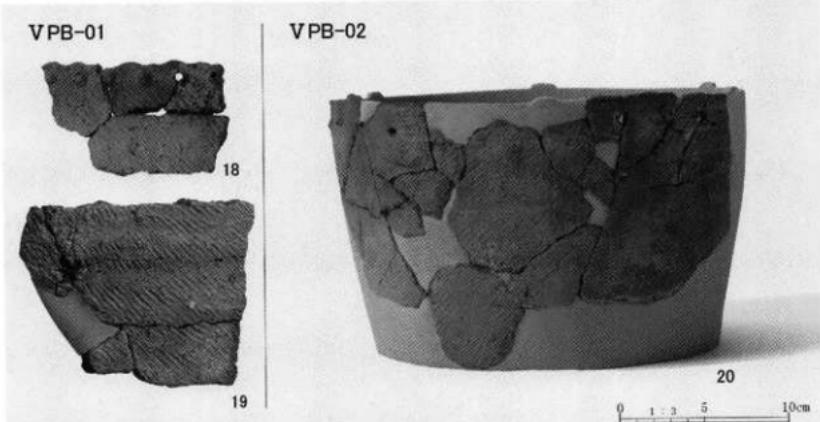
図版8



1. 繩縄文・擦文文化期包含層出土遺物

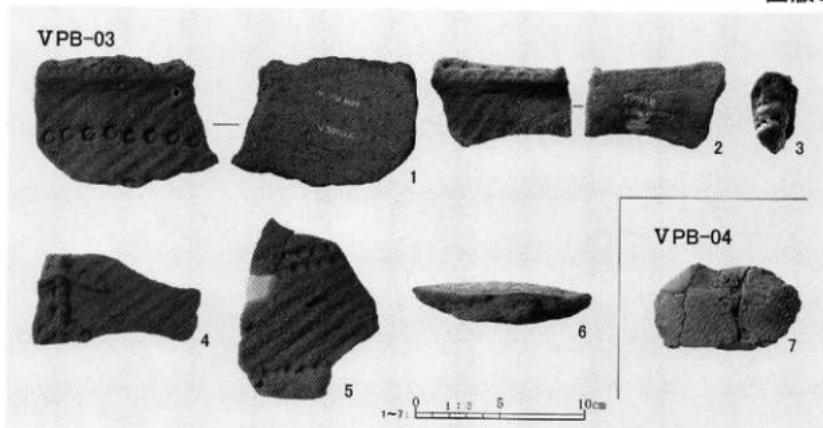


2. TP・VP出土遺物

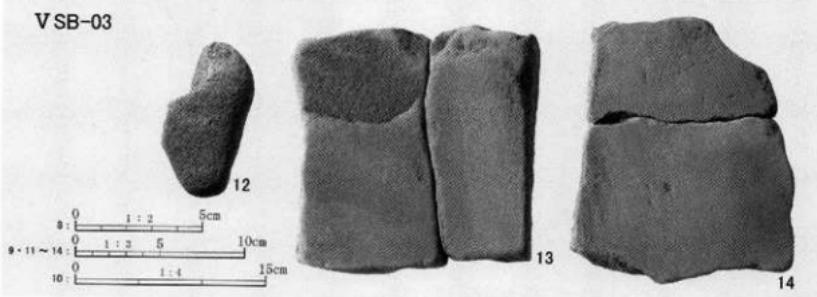
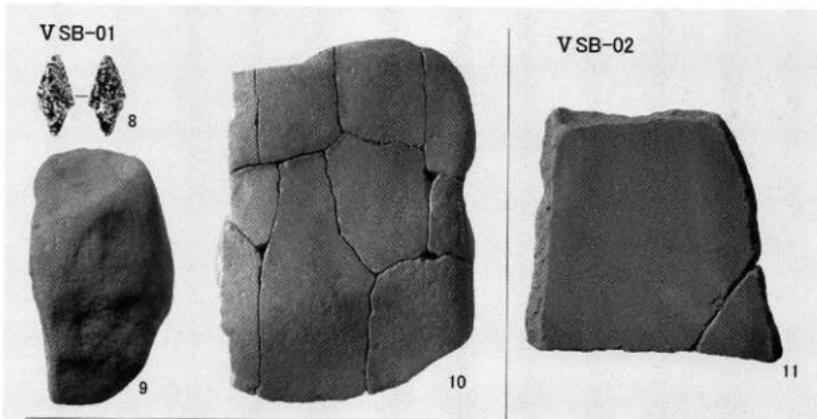


3. VPB-01・02出土遺物

図版9



1. VPB-03-04出土土器



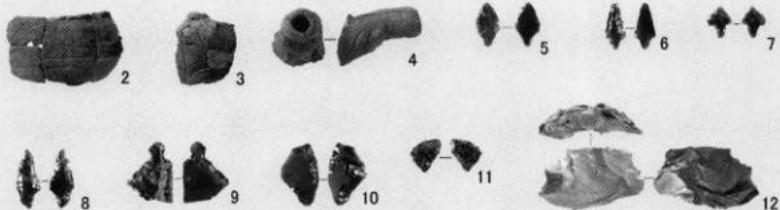
2. VSB出土石器

図版10

VBB-01



VBB-02



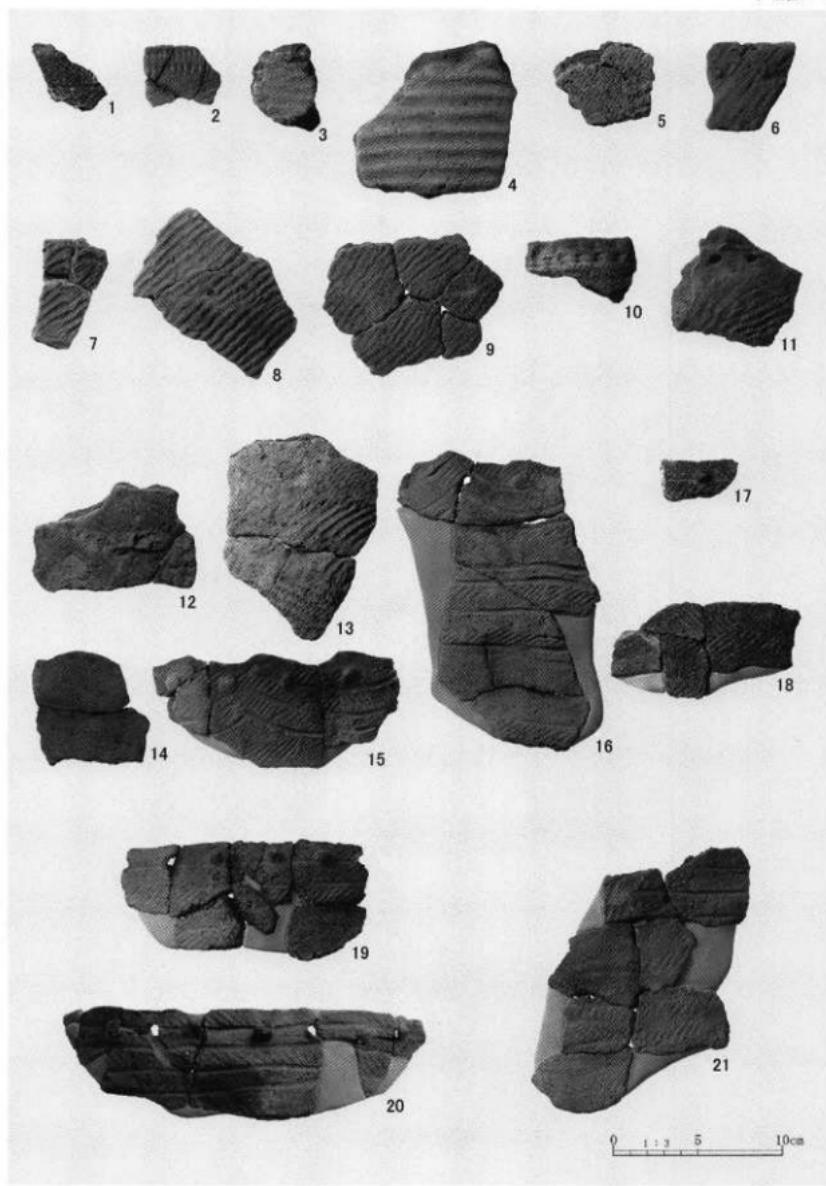
VBB-03



0 1 : 3 5 10cm

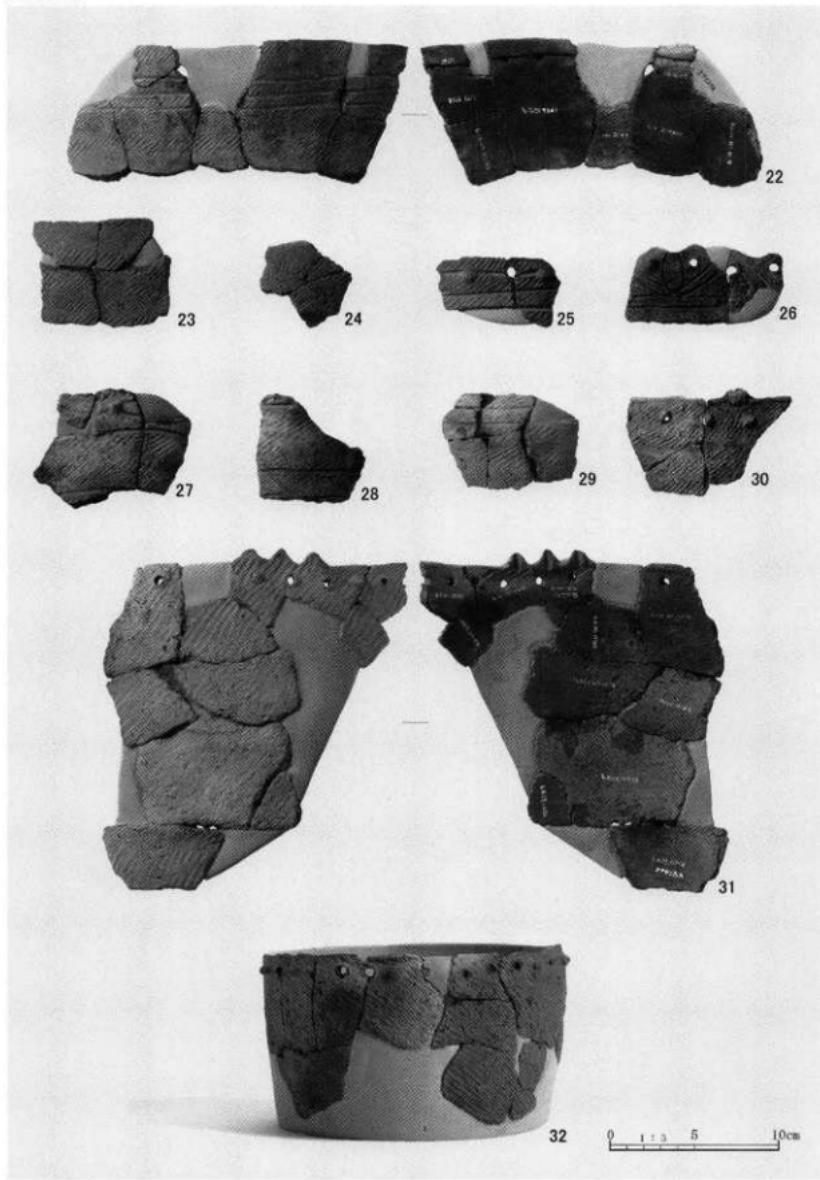
1. VBB出土遺物

図版11



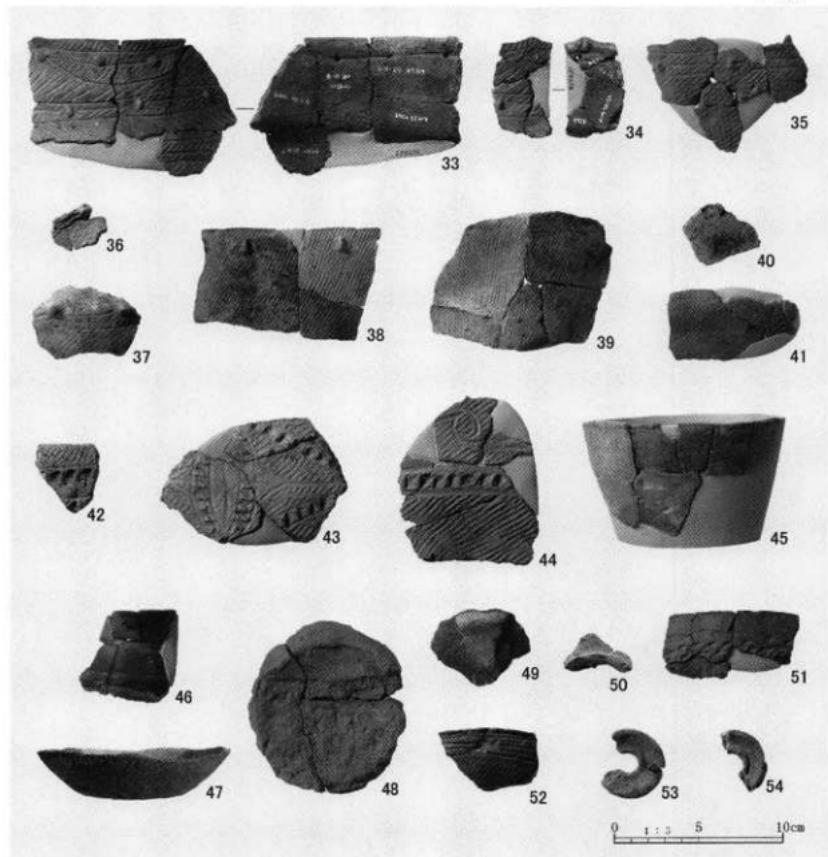
縄文時代包含層出土土器(1)

図版12



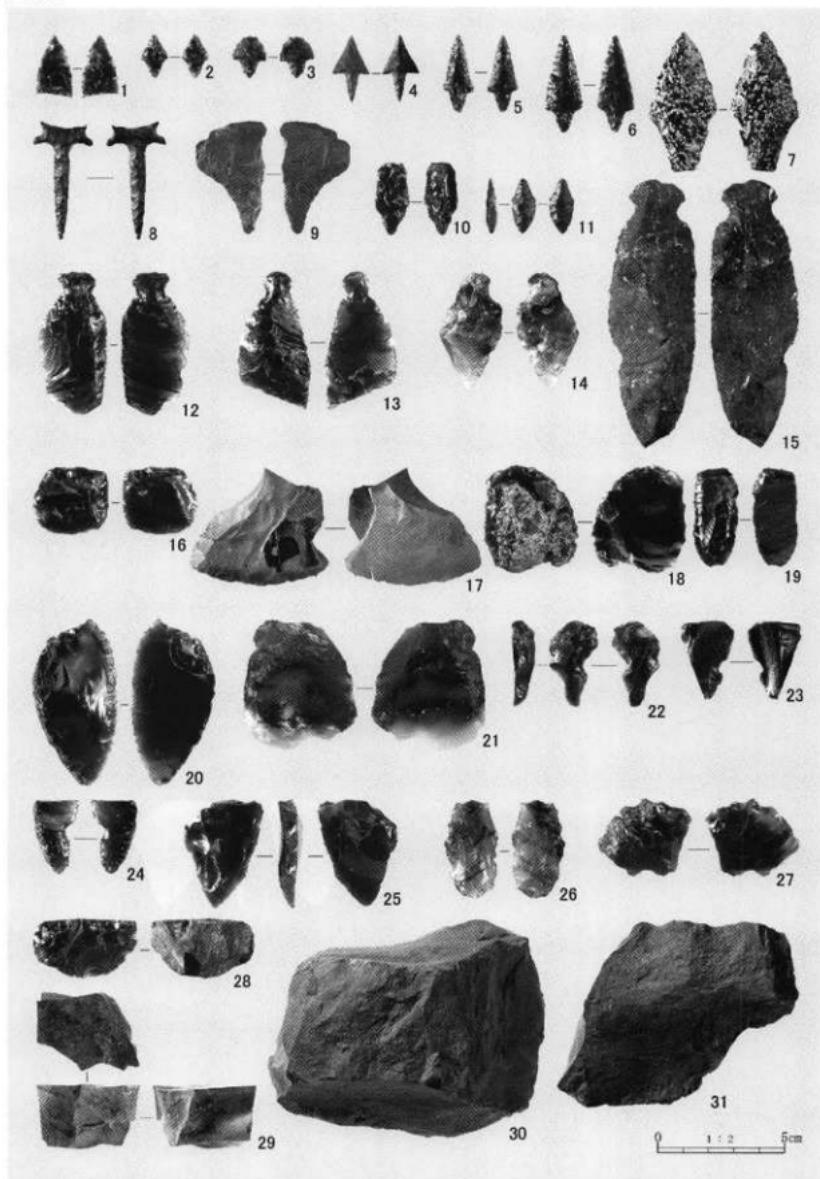
縄文時代包含層出土土器 (2)

図版13



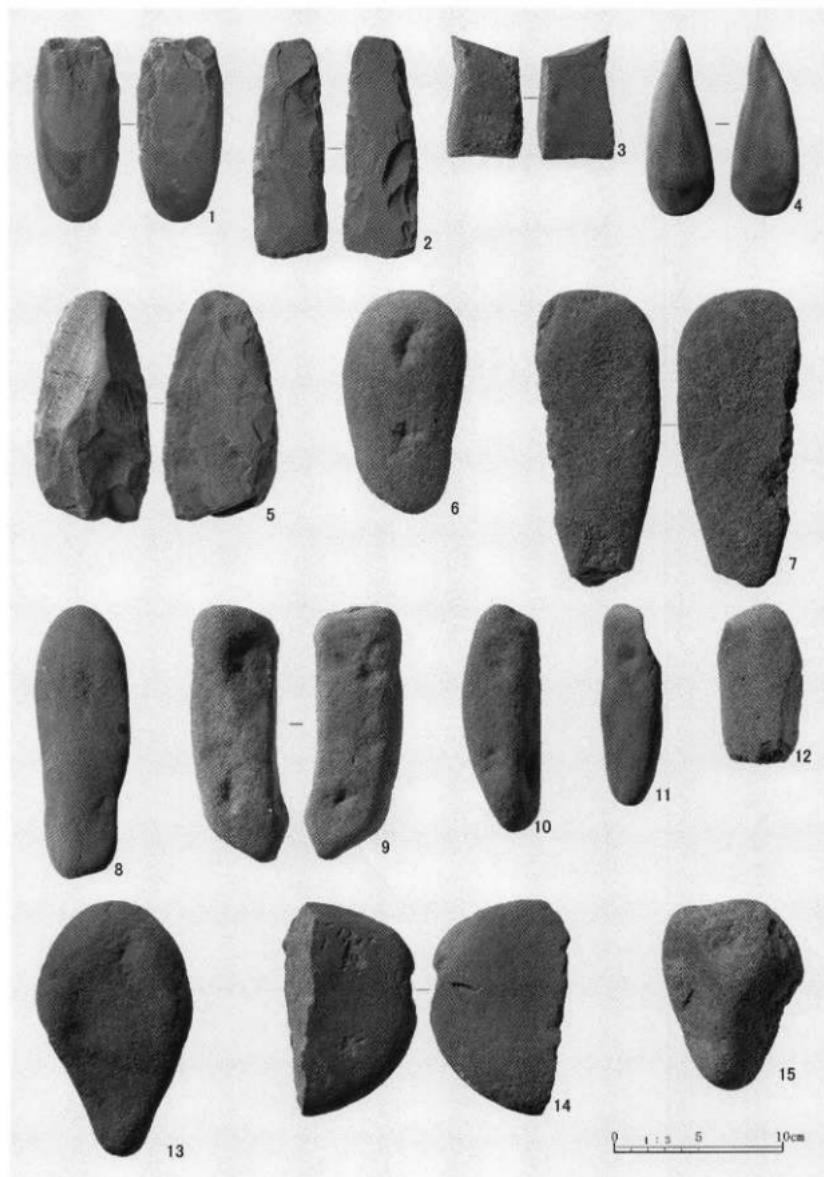
縄文時代包含層出土土器(3)

図版14



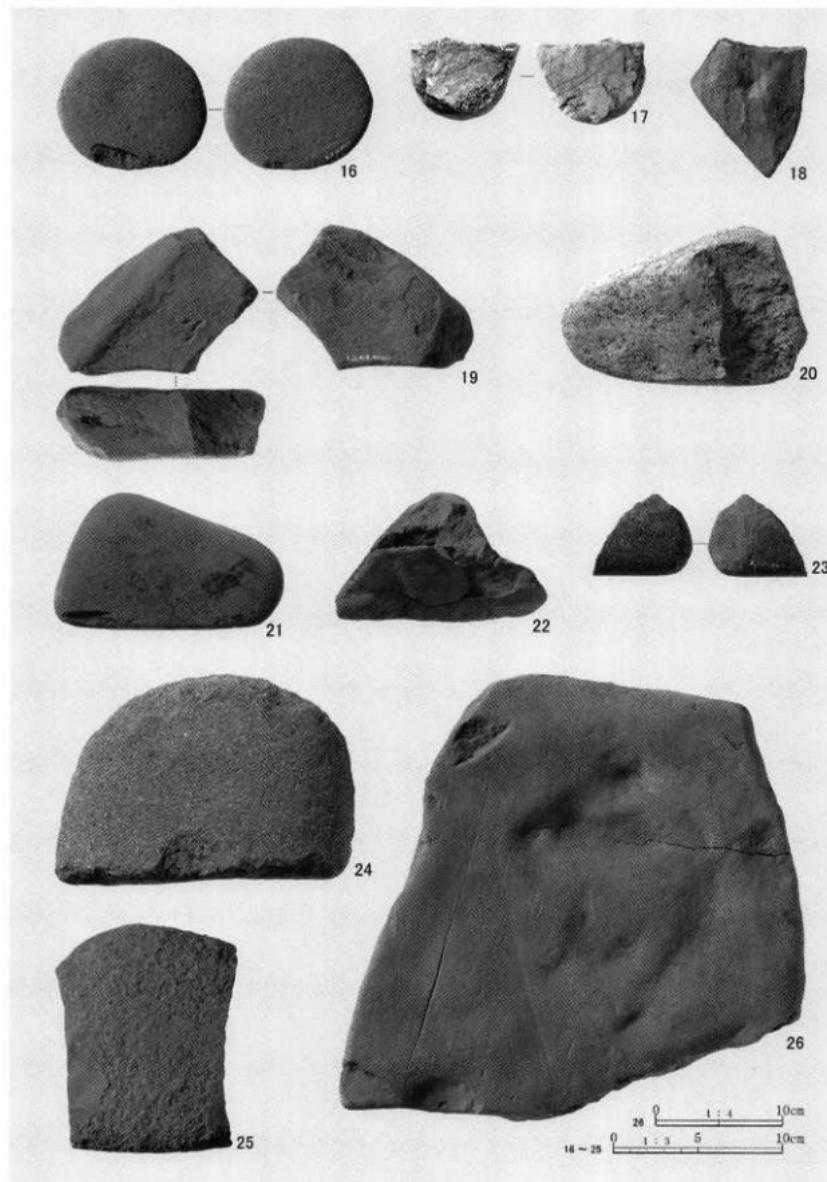
縄文時代包含層出土剥片石器

図版15



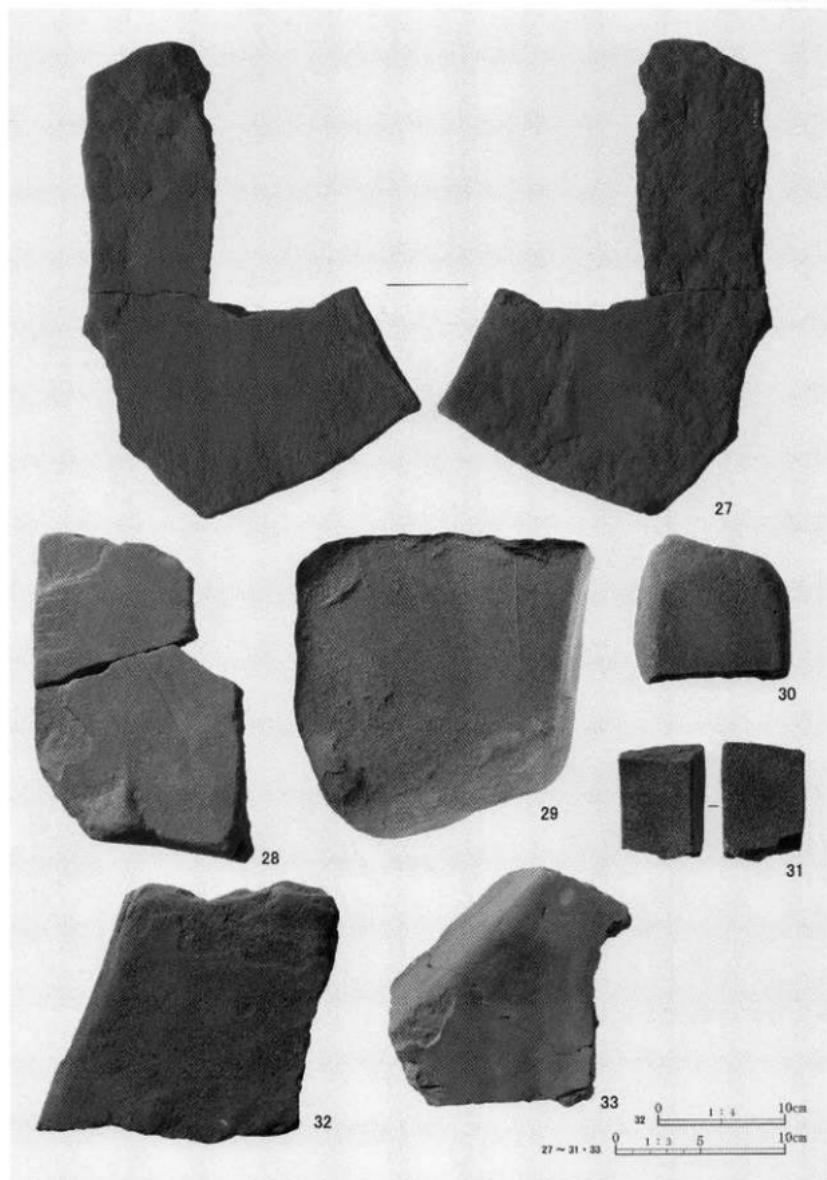
縄文時代包含層出土砾石器(1)

図版16



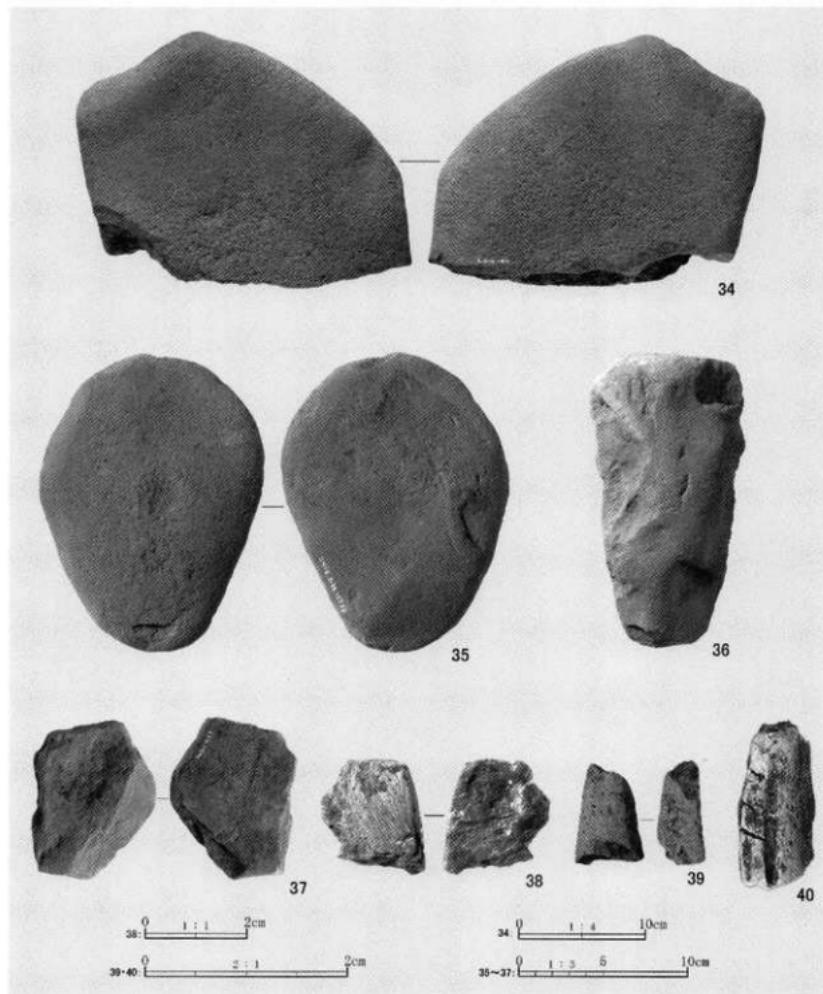
縄文時代包含層出土礫石器(2)

図版17



縄文時代包含層出土礫石器(3)

図版18



縄文時代包含層出土礫石器(4)・石製品及び骨製品

報告書抄録

ふりがな	おにきしへ ろく いせき
書名	オニキシベ6遺跡
副書名	厚幌ダム建設事業に伴う発掘調査報告書
巻次	10
シリーズ名	厚幌ダム建設事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ番号	10
編著者名	岩橋由久・奈良智法・服部一雄・乾哲也
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1605 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2014年3月19日
ふりがな	おにきしへ ろく いせき
収録遺跡	オニキシベ6遺跡
所在地	勇払郡厚真町字幌内482番地の2ほか
市町村コード	1581
遺跡番号	118
北緯	42° 46' 00"
東経	141° 59' 13"
調査期間	平成24(2012)年7月23日～9月21日
調査面積	1,401m ²
調査原因	厚幌ダム建設
種別	遺物包含地
主な時代	縄文時代後期末葉・統縄文文化期・擦文文化期
主な遺構	縄文時代:Tピット7基・上坑3基・土器集中4ヶ所・礫集中3ヶ所・焼骨片集中3ヶ所
主な遺物	縄文時代:堂林式系土器群、石器、剥片類、石製品、土製品、骨製品、礫 統縄文文化期:恵山系土器、後北B～C2-D式土器、石器 擦文文化期:北大田式土器、擦文土器(前期)
要 約	
<p>オニキシベ6遺跡は厚真川上流域とその支流である鬼岸辺川との合流点に形成された、南側のオニキシベ4遺跡と同じ河岸段丘上に立地する。下流側のA地区、上流側のB地区がある。A地区は大部分が削平されているが、南側は後背湿地または旧河道となる低地があり、縄文時代後期には起伏のある地形であったと推定される。B地区は河川合流点に接する小規模な独立丘である。</p> <p>遺構はTピット7基、焼骨片集中3ヶ所などが検出された。平面が溝状のタイプ(A地区)と梢円形のタイプ(B地区)の二種類があり、梢円形タイプの坑底面には逆茂木跡が見られる。焼骨片集中などからはイノシシの骨が出土している。</p> <p>縄文時代早期～晩期、統縄文文化期、擦文文化期の土器が出土しているが、17,173点出土のうち、縄文時代後期末葉の堂林系土器が16,366点と約95%を占める。擦文文化期以降の遺物はA地区では出土していない。石器は剥片・石器914点で石鏃が高比率を占める。礫石器は267点、剥片18,889点、礫4,149点である。</p>	

厚真町 オニキシベ6遺跡

－厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10－

発行日 平成26年3月19日

編集・発行 厚真町教育委員会

〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1

電話 0145-27-2321(代)

印刷 ひまわり印刷株式会社

北海道苫小牧市永福町2丁目1-2

電話 0144-74-4500